

の。人。な。り。き。自。信。無。き。今。の。世。に。於。て。博。士。は。他。く。迄。自。信。の。人。な。り。き。世。は。舉。り。て。名。利。に。競。奔。せ。り。而。し。て。博。士。は。正。義。を。以。て。自。ら。立。ち。得。ざ。ら。む。を。恐。れ。た。り。奢。侈。は。一。代。を。風。靡。し。人。は。虚。榮。を。追。う。て。僥。る。を。知。ら。ず。而。し。て。博。士。の。勤。儉。は。實。に。欺。美。す。べ。き。も。の。な。り。き。日。は。照。す。も。の。に。其。の。德。を。思。は。し。め。ず。吾。人。は。今。に。於。て。博。士。が。眞。に。世。の。鹽。な。る。こ。と。を。認。む。る。也。

博。士。の。其。の。主。義。を。重。ず。る。や。恐。ら。く。は。死。も。亦。是。を。脅。し。得。ざ。り。し。な。ら。む。若。し。博。士。に。し。て。主。義。よ。り。も。名。利。を。重。じ。た。り。し。な。ら。ば。博。士。の。事。業。は。更。に。其。の。大。を。加。へ。し。や。も。知。る。べ。か。ら。ず。而。か。も。博。士。は。外。千。萬。人。の。鑽。仰。よ。り。も。内。一。心。の。疼。し。き。に。勝。え。ざ。り。し。也。文。部。大。臣。を。退。き。て。閑。散。の。地。に。就。く。や。知。人。の。中。に。は。博。士。に。向。て。切。に。政。黨。に。入。る。の。利。を。説。け。る。も。の。あ。り。し。が。博。士。の。答。は。實。に。高。潔。な。る。も。の。な。り。き。曰。く。吾。に。主。義。の。動。か。し。難。き。も。の。あ。る。を。如。何。と。將。來。の。政。治。界。に。於。て。爲。す。め。ら。む。と。す。る。も。の。大。政。黨。を。利。用。す。る。の。止。む。べ。か。ら。ざ。る。こ。と。博。士。の。聰。明。に。し。て。安。そ。他。人。の。言。を。待。て。知。ら。む。や。唯。自。家。の。所。信。を。枉。げ。て。夫。の。所。謂。黨。議。に。左。右。せ。ら。る。が。如。き。は。博。士。の。到。底。忍。ぶ。能。は。ざ。る。所。な。り。し。也。畢。竟。博。士。は。今。の。政。治。界。に。於。て。成。功。し。得。む。に。

は。其。の。所。信。餘。り。に。鞏。固。に。其。の。德。操。餘。り。に。高。潔。な。り。き。良。し。や。博。士。に。し。て。政。治。界。の。人。と。な。る。も。其。の。越。く。と。恐。ら。く。は。夫。の。田。口。島。田。諸。氏。と。同。一。の。軌。道。な。り。し。な。ら。む。の。み。博。士。が。超。然。と。し。て。始。終。批。評。家。の。位。地。に。立。ち。た。る。は。眞。に。其。の。天。分。を。效。し。得。べ。き。の。地。に。立。て。る。も。の。當。に。其。の。自。ら。知。る。の。明。を。稱。す。べ。き。の。み。に。非。ざ。る。べ。し。

二 三河武士の好摸型

主。義。を。重。じ。廉。直。自。ら。潔。う。す。る。の。點。に。於。て。博。士。は。所。謂。三。河。武。士。の。好。摸。本。な。り。き。博。士。の。家。は。幕。府。の。旗。本。に。し。て。其。の。先。は。三。河。に。出。づ。博。士。の。祖。先。は。現。に。三。方。ヶ。原。に。討。死。し。た。る。三。河。武。士。の。一。人。な。り。き。吾。人。潜。に。博。士。の。爲。人。を。察。す。る。に。三。河。武。士。の。遺。血。の。其。身。中。に。流。れ。つ。ゝ。あ。り。し。を。疑。は。ざ。る。也。今。日。三。河。武。士。の。子。孫。と。し。て。其。の。遺。韻。を。傳。へ。た。る。も。の。田。口。卯。吉。氏。の。如。き。島。田。三。郎。氏。の。如。き。或。は。江。原。素。六。氏。の。如。き。故。佐。久。間。貞。一。氏。の。如。き。若。し。く。は。勝。海。舟。翁。の。如。き。其。の。廉。潔。な。る。點。に。於。て。其。の。正。直。な。る。點。に。於。て。何。れ。も。博。士。と。同。摸。型。の。人。な。り。而。し。て。是。の。如。き。摸。型。の。人。と。し。て。博。士。の。如。き。は。其。の。最。も。純。な。る。も。の。に。近。か。り。し。な。ら。む。幕。末。の。英。士。た。る。海。舟。翁。の。相。

續人たるべきものは先づ指を博士に屈せざるべからざりしが今や博士の後に於て何人が是に當るべき。日本が伊藤博文氏の如き星亨氏の如き人物を再び見むことは必ずしも期し難きにあらず吾人は現に幾多の小伊藤小亨の多きに勝えざる也。されど博士の如きは人物の摸型として甚だ得易からざる也。請ひ問はむ博士の薰陶を受けたる赤門數千の子弟果して幾人の其の流風を傳へ得たるものある乎。

然れども三河武士の子孫は今の世の寵兒に非ざる也。聞説らく海舟翁嘗て島田三郎氏を評して曰く沼南は好男子恨らくは不遇の間に一生を終らむ乎と。正義と失意とは多くの場合に於て同意義に解せらるゝ今の時に於て吾人は三河武士の子孫の薄命を悲むの情に堪えざる也。博士の襟度は必ずしも狭からず自ら守ること嚴なる割合には己れと異なる者に對して左迄狹直ならざりき然れども博士にして如何に風雲に際會するも到底大隈伯たるを得ざる也伊藤侯たるを得ざる也。博士の大なる理想としては唯海舟翁ありしのみ是れはた三河武士の子孫が天稟の宿命にして而して博士の人格の高潔なる所以也。

### 三 博士の天分

博士の生涯の重なる部分を語るものは學者の閱歷なりき。然れども博士の天分は學者たるに在るよりは寧ろ批評家たるに在りき。博士は學者として本邦人には珍らしきプロードカルチュアを有したり。スペンセル氏を祖述せる其の進化論も哲學雜誌に掲げたる社會道德宗教に關する論文も儘に價値ある研究なりしならむも然かも批評家は博士にありて更に大いなる天分なりし也。而して博士が多方面の趣味と其のプロードカルチュアと自己の説を立つるよりは他の缺點を看破するに長じたる其の炯々たる觀察眼と不羈獨立何人の前にも忌憚なく其所信を告白し得る其の勇氣と凡て是の天分を果すべき要具として博士に賦與せられたるの觀ありき。

今日に於てこそスペンセル氏の進化論は福澤氏の民權論と同じく餘り稱美すべき者にも非ざれども日本が初めて博士の口より是を聞たる當時にありては儘に警拔なる新真理なりし也。博士が時流に先じて是を鼓吹したるは儘に卓見と

謂ふべけむ。演劇改良論は今に於てこそ常套の問題なれ、博士の是を唱へたる頃  
 にありて幾人か能く其の眞意義を解し得たるべき乎。博士が『漢字破り』を著し、  
 羅馬字會を起し、『漢字に反對するものならば何でも賛成する』と喝破したる時に當  
 りて、幾人か能く國字改良の問題に對して痛切なる感興を有せしや。今や新體詩  
 は詩として藝苑の一方に昌へ、其の光榮ある將來亦豫期し難しとせず、而して明治  
 十年代に於て唱へられたる詩歌の一體が卅年代の今日に於て漸く世人に認めら  
 るゝに至りたるを思へば、吾人は博士及び博士と共に初めて新體詩を唱へたる人  
 々の先覺を多とせざるべからず。吾人は帝國大學の教室裏に於ける社會學の講  
 義よりは寧ろ是等の發掘なる批評に於て博士の本領を認めむと欲する也。  
 着手は成功の半也。今の日本の學術界に於ける進化論の勢力如何を想ひ、新體  
 詩が如何に漸く其の地步を占めつゝあるかを考へ、國字改良が上一世の輿論と  
 して如何に盛に研究せられつゝあるかを觀れば、吾人は殆ど廿年前の往時に於て  
 早く既に是事を國民に警告したる先覺者、博士の如き人に對して須らく其成功の  
 半ばを歸すべきに非ずや。

然れども是の如きは大學教授たり、文科大學長たる博士の片手間に過ぎず、博士  
 が精力の大部分は言ふ迄もなく大學教育の事業に效されたりき。帝國大學が博  
 士の力によりて完成の域に近づきつゝありしは素より疑ふべくもあらず。され  
 と博士の能力は一學校一教室の中に發揮せらるべきものとして、餘りに大なり  
 き。其の烈々たる活力は靜穩和平なる規矩準繩裡に於て現はされむには寧ろ強  
 大なるに過ぎたりき。博士の性格は其の活動の場面として更に大なる舞臺を要  
 したり。大學總長や文部大臣や吾人素より博士の爲に是を榮とすと雖も、而かも  
 博士の天分に待つありしものは學校に非ず、官衙に非ず、而して社會なりき。吾人  
 は是の點より見て寧ろ博士の短命なる大學總長と文部大臣とを祝せむと欲する  
 なり。

#### 四 社會的批評家としての博士

文部大臣を退ける後の博士の經歷の意外にも短かく、今や故人として博士を呼  
 ばざるべからざるに至りたるは、吾人の返すくも悼惜に堪えざる所也。社會は

凡そ二十餘年の間博士の警拔なる批評を耳にせり。然れども眞に社會的批評家としての博士の面目を發揮し初めたるは不羈自由の一個人と爲りたる文部大臣辭職の後にありき。是の短かき二年間に於ける博士の活動は其の光榮ある將來を預告するに餘りある極めて目覺しきものなりき而して今や忽焉として亡し。吁博士其の來る何ぞ夫れ遅かりし其の去るや何ぞ夫れ速かりし。人としての眞價は性格の力として現はる。沐猴も冠する間は衣冠を敬する人に敬せられむ。夫れ凡庸の徒は偶々其の地位職權を擁する間こそ堂々たる人物の觀もあれ一度び一布衣となりて民間に下れば忽ち獼猴の木より落ちたるが如きもの比々として是れ也。我外山博士は是の如き類に非ざりき。臺閣を退きたる後に於て博士が赤條々たる個人的性格の力は漸く現はれ初めたり勳爵の虚榮に依るに非ず政黨の援引に頼むるに非ず其の武器として筆と舌とあるのみ。而かも是の筆と是の舌と一度び博士の高潔なる人格を發表するに及びては金剛杵に比すべく夜叉戎にも較ぶべかりき。是の如くにして社會の爲に宗教の爲めに學術の爲めに教育の爲めに打撃し警醒し獎勵し訓諭せり。殊

に博士に於て他人の企て及び難きは其の批評の忌憚無きにあり。博士は東京市民の教育に冷淡なるを痛罵して禽獸に等しと言へり。大隈伯の學校に熱心なること温室の如くならざるを見て何ぞ益裁を賣飛ばさると罵れり。山口鹿兒島にのみ高等學校を建設するは藩閥内閣の持続計略なりと喝破せり。久保田讓氏の如きは博士によりて公然一小俗吏と罵倒せられたり。地方の一教育會の博士を聘して其の演説を聞きし時會衆の奢侈を打撃し滿堂をして顔色無からしめたり。博士は到る處に忌憚無く其所信を告白して毫も一身の榮辱を顧みざりき。殊に一度び全國民の教育的精神を鼓舞するを以て刻下の急務なりと信するや或は仙臺に或は神戸大阪に或は岡山姫路に或は濱松に或は長野新潟に到る處に其の熱誠に充滿せる稀代の雄辯を揮て地方の民心を鼓動せり。久しく遺却せられたる教育問題が近時漸く社會の注意を喚起せるもの博士の盡瘁與つて多きに居ると言ふも吾人決して其の過言に非ざるを見る。而して偉大なる人格の勢力と威重とは漸く是間に認識せられたり。嗚呼夫の樞密顧問官或は貴族院議員の明巢を狙ひ若しくは今生の思ひ出に授爵の恩典に與らむとして絶えず上長の鼻息

を窺ふが如き蠢々たる徒輩が時に新聞記者の訪問談に縁りて塵に自家の存在を  
 廣告しつゝあるに比すれば、嘗に霄壤の差のみに非ざるなり。

## 五 博士の死

晩近の教育界が博士の熱誠によりて鼓舞せられたるもの小少ならざるは天下  
 の齊しく認むる所也。而して博士の夭折が是の事業の爲めに速められたるの事  
 實を認るに及びては、誰か博士の人物に對して更に崇敬の情を加へざらむや。吾  
 人は敢て夭折と云ふ博士の祖父九十餘歳先考は八十餘歳代々長壽の家たり況や  
 博士の事業より見るも其の本領の現はるゝは今日以後なるべかりしをや。五十  
 四歳の今日は方に博士の壯年期たり。然らば即ち博士の死は即ち夭折に非ずして  
 何ぞや。

吾人をして博士の悲むべき死を語らしめむか。去年の十一月博士病で褥に在  
 りしが博士の住居する牛込區民の懇情に應じ疾を力めて其教育會に演説し大に  
 東京市民の教育事業に冷淡なるを打撃したりき。博士の病是より漸く加はり肺

炎より咽喉を害し引いて中耳炎を起したり博士は病中にありても尙ほ時事を憂  
 ふる情に堪へず『藩閥の將來』と『教育制度論』とは實に其の病床中の著述なりし也。  
 『藩閥の將來』は教育擴張を以て藩閥打破の最良法なるを説き特に高等學校増設の  
 問題に關して全國民の注意を喚起せるもの『教育制度論』は久保田讓氏等の所謂學  
 制改革を駁撃して大學教育の本領に關する俗論を糾せるもの共に教育社會の緊  
 急問題に屬す。社會は這般の問題に就いて聰明なる指導者を得たる間に博士の  
 病氣は漸く其の重きを加へたり。醫師は切に轉地療養を勧めしが博士は是の多  
 事の時に際して獨り閑地に退くことを肯せざりき。本年一月三十一日學制調査  
 會設置に關する建議案、貴族院の議事に上るや博士は病を力め、綑帶の儘にて登院  
 せり。當日高等學校増設案に關する質問は今より思へば實に現世にて博士の口  
 より聞かるべき最後の演説なりしなり。  
 死は往々其の人の傳記を語る。讀者よ博士の如何に生きてきたるかを知らむと欲  
 せば請ふ先づ博士が如何に死したるかを見よ。

### 六 博士に對する無上の讒誣

嗚呼官邊の生活二十餘年、一朝江湖の人となりて其の天分を披瀝せむとするに際し、事業塵に其の緒に就いて俄然として資を易ゆ、眞に人生の恨事と謂ふべし。世には寧ろ其の生を悼むべき幾多の人あるに、殊殊に斯人に下る、天道の是非夫れ何處にか惣へむや。

吾人は博士の死に際して一の悲むべき報知に接したり其の或は後世に累あらむを恐る一言の辯無かるべからざるを覺ゆ。何ぞや博士の死に際し其の喪を秘して爲に授爵運動を爲したる者ありと云ふこと是れ也。吁、果して是事ありし乎、果して是の事なかりし乎。博士の最も親近なる友人が是事を爲したりと云ふに至ては、吾人は其の訛傳に出でたりとの外思惟すること能はず。苟も博士の性情を知れる近親の人ならむには、萬々是の醜陋事を演出すべき謂はれなければ也。

博士が勳爵を口にせし事は、吾人の一度びも耳にせざりし所也。博士の主義あり、博士の性格あり、而て人爵に望むところありしと謂は、誰か其の不倫の大なる

に驚かざらむ。是點に關する博士の訓誡は吾人數々是に接せしが、實に高尚なるものなりき。夫の良心を欺きて官位を求むるもの、主義を典して富貴を購ふもの、或は學者として俗界の名利に競奔するもの、是等は博士の常に指彈したる所なりき。夫の博士の友人として爲に授爵の運動を爲したる人々は、博士を以て如何なる人物と爲したりし乎。男爵華族の稱號を以て博士の靈を慰め得べしと思惟したりし乎。有力なる一新聞紙は是事を批評して曰く、『今の學者は平生廉潔にして名利心なきが如く装ふも一旦死に瀕すれば、輒ち人爵の戀々たるに堪へず友人に依頼して周旋せしむ』と。是れ博士の爲に授爵運動を爲せる者を以て、即ち博士自らの意志に本けりと爲せる也。吾人は是言の甚だ理あるを認む、何となれば、凡人の爲にすることは其の人の素志に反すべき者にあらざれば也、故人に對する場合に於て最も然りとなす。今博士の死に際し、其親友と稱して博士の爲に奔走するものあらば、以て博士の素志を體認せるものと見做す、必ずしも理無きに非ざる也。彼の某々氏等の運動にして果して事實なる乎、即ち是れ博士の素志を詐りて、其の高潔なる性格に一大汚辱を與へたるものと謂はざるべからず。吁、博士が在

天の靈にして若し是の事を聞かば夫れ是を何とか謂はむ。俗物者流、往々自家の心事によりて猥りに高士を揣摩し、却て累を後世に遺すを覺らず、憐むべく、嘆すべく、惡むべし。然りと雖も、授爵運動の如きは恐らくは新聞紙の訛傳にして、苟も博士の友人と稱する某々氏等の關知せざる所なるべきは、吾人の喜び信せむと欲する所なり。

### 七 博士の眞摯

博士に關して言ふべき事は一論文の能く盡す所に非ず、されど一事の見遁し難きは其の心事の眞摯なること也。眞摯は大なる性格の特徴なりとの套語は、吾人博士に於て其の好例を見る。博士の言行には如何に些細なるものにも、其背後に大なる確信有らざるは無し。されば事を斷するや、寧ろ遅かりしと雖も、一たび斷じたる決心の鞏固にして、是れに伴へる意志の猛烈なるは、實に目覺ましき程なりき。外より見れば博士の所行には往々滑稽と見ゆるものあり、されど博士の心事に到りては極めて眞面目なり、大なる確信と抱負との上に爲されたる極めて嚴

肅なる意義を有せり。世人よりは入道とよび、天狗と嘲られながら、博士は毅然として其の確信を扛げず、其の抱負を捨つる能はざりし也。博士は時に駄洒落を以て人を笑はすることあり、されど人生の事一として戯れに成さるべきものあるを知らざりき。博士にとりては人生は飽迄嚴肅なり、飽迄實在なり、博士は茲に其の確信と抱負と天分とを自覺して、須臾も休止すること無かりし也。博士の全生涯に貫通せる眞摯なる精神は實に是の自覺に本けりき。

嗚呼、山は尙ほ築くべし、河は尙ほ穿つべし、高尚なる人物に至りては眞に天與の資なり。日本は外山博士の死に於て回復し難き損失を被りぬ。貴族爵位は唯帝王の一呼吸によりて製造せらるゝを得べけむ、唯夫れ大なる人物に到りては吾人は如何ともする無きなり。

(三十年四月)

### 東本願寺と村上專精氏

#### 一 奇怪なる現象

佛教と云へば則ち本願寺を聯想し、本願寺と云へば則ち腐敗を聯想す。今の世に於て本願寺の存在及び繁昌の爲に最も大切なる特權は實に是の腐敗の公認なり。彼れは是の奇怪なる特權を擁して聖代の天地に横行濶歩し、そが接觸するあらゆる事物を腐敗しつゝあるにも拘らず、社會は多く怪み咎めざる也。全國數萬の僧侶幾百萬の信徒亦恬として關知せざるものゝ如く却て其の學識と巧智と財を傾けて是の腐敗を助長せざらんことを是れ恐るゝものゝ如し奇怪なる現象と謂はざるべけむや。實に奇怪なる現象に非ずや、社會の腐敗を救濟すべき宗教其物は今や却て社會を腐敗しつゝあるなり。學寮を設け、經典を授け、少壯子弟に向てはあらゆる宗教者の徳義を訓へつゝある者、他方に向ては暗夜潜に賄賂を行使して俗論の多數を買はむとする也。稍高等の教育を受け、將來佛教の廓清を

以て任すべき青年教徒は却て是の腐敗長老の願使に奔走して不義の利益の分配に與るとの少からんを是れ憂ふる也。二十世紀は方に來りたり、舊佛教の勢力は到底今日の儘にて持續せらるべき者に非ざるとの最も分明なるにも拘らず、人間のあらゆる弱點を現はせる一凡庸僧侶は、傳燈法主の名によりて依然たる專制君主的威嚴を保たむとする也。教祖が救世の使命は全く遺却せられ、腐敗せる社會の尙は其の腐敗を擴斥すべきあらゆる劣悪手段を用ひて國家權門の外護に依頼し、以て其の舊信仰の殘骸を粉飾せむとする也。是れ豈明治三十三年の今日に於て最も奇怪なる現象に非ずや。

然れども是の奇怪なる現象は幸にも村上專精氏に於て一除外例を見るを得たり。若し村上氏の意志にして果して吾人の希望する如くならば、是れ獨り一本願寺、一佛教の幸のみならず、實に社會國家の幸也。一宗派、一寺院、將た一村上氏、吾人に於て何かあらむ、唯本邦宗教界の覇權を握れる一大國家的勢力に關するものとして、是事體甚だ小ならざるを覺ゆ、茲に一言無きを得ざるなり。



## 二 村上專精氏の大反抗

石川舜台氏の議員買収によりて宗教法案の否決を貴族院に見たるより四十日の後、四月八日、佛教有志者相會して釋尊降誕會を神田錦輝館に開く。當日眞宗中學校長にして文科大学講師たる村上專精氏が爲したる『佛教の過去及び將來』と題せる演説は大谷派本願寺の當事者に對する一大反抗として見るべきものなりき。越て五日、佛教青年會の一員として石川氏の買収運動に最も力ありきと稱せらるる文學士近角常觀氏の歐洲行に對する送別會、小石川植物園に開かる。當日村上氏が爲したる席上演説は、錦輝館の演説と同旨趣にして、要は佛教現時の腐敗を指摘し、殊に大谷派本願寺の行動を慨嘆して極めて切なるものなりき。去月十三日、氏は又讀賣新聞記者の訪問に接したる時、是等の演説に對する氏の責任を明にし、如何なる迫害に遇ふも決して其の所信を枉屈すること無かるべきを明言せり。村上氏は其學識の深遠、徳行の高潔、夙に衆望の歸する所也、而して現に石川氏の支配の下に存在する大谷派本願寺の一擬講にして、眞宗中學校の校長たり。是の如

き地位に在る氏が是の如き行動に出でたる事は、現時の宗教界に於て最も屬目すべき出來事ならずむばあらず。吾人は茲に村上氏の態度を明にせむが爲に先づ錦輝館に於ける氏が演説の要旨を観察せむ。

錦輝館に於ける氏が演説は歴史的に宗教の進化を説きたるものなりしが、其の歸結は明に本願寺今日の腐敗を打撃するに在りき。氏は先づ宗教改革に須要なる五個の預件を指摘して第一政治の變革、第二社會の進歩、第三社會の腐敗、第四宗教の腐敗及び第五偉人の出現なりとし、而て後、今日の日本が是の中の四箇條の預件を具足せるを説き、宗教改革の途に避く可らざる所以を立證せり。氏は宗教の腐敗を説くに當りて殊に東本願寺の近狀に參照し、宗教法案の通過の爲に賄賂を行使したる僧侶あることを憤慨せり。氏は茲に執事石川舜台の姓名を告白して、其の當事者なりとし、大に其の非行を打撃して曰へらく、今の政治社會は腐敗せり、而かも是の腐敗せる政治社會に賄賂を行使する宗教家あるに到つては言語道斷に非ずや。往年渥美契縁なるものありて暴横至らざる所無かりき、幸に全國の改革派の反抗に依りて是を黜くるを得しが、其の所謂改革は今日に於て果して如何

そや渥美と名くる一俗物に代ふるに石川と名くる他の俗物を以てしたるの外毫も逕庭無きに非ずや。大谷派本願寺は是の俗物の爲に腐敗の深淵に墮落せり。宗教家の神聖なる事業は是の俗物の爲めに却て社會の腐敗を助長するものと爲されたり。一大改革遂に已む可らざる也。——氏は是の如き熱誠に充滿せる雄辯を揮て大に石川舜台氏及び東本願寺の當事者を打撃せり。三千の聽衆は潮の如く動き均しく喝采せり。東京に於ける眞宗大谷派の監督として淺草本願寺の輪番たる大草惠實氏亦塲に在りしが、演説未だ了らざるに座に堪えずして逃避せり。

村上氏は更に論歩を轉じ是の改革の局に當るべき偉人を出だすべきものは青年佛教徒たらざるべからずと説き而して青年佛教徒の現状果して如何と提起して曰く、多少新時代の精神に接觸せる青年僧侶の中には石川氏の爲に犬馬の勞を取りて自ら其陋を覺らざる者あるに非ずや。老朽公卿を擔ぎ廻り無智の翁嫗を欺瞞して得々たる者あるに非ずや。此の如き青年は古き腐敗の火炎に向つて新しき薪を加ふるのみと。

青年佛教徒に對する打撃は尙ほ盡きざる也。氏が近角氏の送別會の席上に於

て爲せる演説は其調子に於て更に激越なる者ありき。曰く「近角氏は宗教法案否決運動の功績によりて洋行の恩典を受けたりと云ふ然れども是れ果して何の功績ぞや。大谷派本願寺をして國家の大罪人たらしめたる劣悪なる行爲は大谷派の僧侶にとりて果して何の功績ぞや。大谷派本願寺は是の如き劣悪なる行爲なくして存在する能はざらむ乎。吾人は寧ろ大谷派本願寺の滅亡を希望せむ。將又佛教にして是の如き罪惡を離れて存在する能はずとせむ乎。吾人は毫も佛教の存在を希望せざる也」と。嗚呼何ぞ其言の高大にして猛烈なるや。村上氏は至りて「ヨラ、ルトレル、日蓮の高調に達せりと謂ふべし。佛教徒よ何ぞ齊しく響を反さざる。齊しく其の響を反して何ぞ茲に宗教革新の大氣運を作らざる。佛陀の教訓にして尙ほ多少の生命あらむ乎。今の佛教徒たるもの決して黙々として已むべきに非ざる也。」

### 三 東本願寺腐敗史の一節(廿九年の改革運動)

以上は村上氏が演説の主旨也。吾人は氏が改革の精神の那邊にまで擴張せる

かを審にせずと雖どもは石川舜台氏の指導の下にある大谷派本願寺の行爲を非認せるは事實也、現社會の救済を以て宗教の本旨となせるも事實也、而して是の目的によりて現在の佛教を改造するの必要を認めたるも亦最も明なる事實也。想ふに是の如き思想を懐けるもの今の佛教徒中に少なからざるべし、而かも法主を神聖視する大谷本願寺部内の一僧侶たる村上氏が斷々乎として其の所信を天下に告白したる勇氣に至ては眞に懦夫をして起たしむるに足る。唯問題は村上氏が如何にして是の所信を貫徹し得べき乎にあり。吾人は是に於て聊か氏並に是に同情を有せる佛教改革者に謀るべきものあり、何ぞや、往年の所謂白河黨の前例に鑑みむこと是れ也。

吾人は茲に宗教界の事情に通せざる讀者の爲に、大谷派本願寺の腐敗史の一節を語らざるべからず。大谷派本願寺の腐敗史に關聯して第一に記載せらるべき人名は執事渥美契縁氏也。渥美氏は明治の初より二十九年の末に至るまで二代の法主を擁して權柄を握ること凡そ二十年、其間一二不平黨の反抗ありしも何れも志を果すこと能はず、今の石川舜台氏の如きも明治の初年に於て失敗したる改

進派の一領袖なりき。是の二十年間の在職に於ける渥美氏の專横は實に言語に絶したるものなりき。十三年の日子と一千餘萬圓の金額とを以て東洋第一の大伽藍を建てたるは氏の事業として永く記憶せらるべきものならむ、而かも其の財政の紊亂は實に甚しきものなりき。末寺門徒は何れも本山の勸財に困却せり、六十萬圓の負債尙ほ償却の道を得ざるに當りて、一千萬圓を喜捨したる信徒は、更に又三百六十萬圓の教學費献納を命せられたり。名は則ち教學の爲と稱すと雖も、當時大谷派の内情を知れるものは寺格堂班の賣買を事とする渥美氏一輩の當事者が決して是の重任に當り得べからざることを熟知せり。是に於てか渥美氏に對する多年の不信任は是の教學資金の募集を導火線として一時に爆發したり、而して是が先鋒となりたるものは則ち所謂白河黨なりき。

所謂白河黨が二十九年七月最初の會合に議決したるは「吾黨は腐敗の根源たる渥美執事を退職せしめずんば已まず」と云ふに存しき。『教界時言』に於ける宣言も全國の門末に飛ばしたる七千餘通の檄文も、要は渥美氏の退職運動に外ならざりき。是の運動は忽ち同志を全國に求め得たり。東六條の大學寮東西兩京の中學

寮は改革派に協同したるの故を以て解散を命せられたり。東京に於ける井上圓丁、南條文雄の二氏は村上氏と共に大に改革派の旨趣を賛成し、各々檄を飛ばして全國の信徒に勸告せり。村上氏の如きは『教界時言』に於て渥美氏に送りたる辭職勸告書を公にし、先に大谷派の教育顧問を斥けられたる澤柳政太郎氏の如きも亦遙に書を寄せ口を極めて當事者の非行を排撃せり。全國の諸新聞紙は京都『日出』等二三を除くの外は殆ど皆改革派を扶けて其不撓の意氣を獎勵せり。「一言すれば改革派が當時の勢力は殆ど天下に瀰蔓し、或は日本のルテルを以て彼等に謳歌する者さへあるに到りたりき。頑強なる渥美氏も遂に是の大勢力に抵抗する能はず、行掛けの駄賃に稻葉清澤、村上等改革派に屬する僧侶の職班寺格を褫奪したると共に自らも亦退隱の已むべからざるに到れり。是を二十九年に於ける所謂白河黨の改革運動の概畧となす。

#### 四 廿九年に於ける改革派の真相

表面より見れば改革運動は渥美氏を斥けたることに於て首尾好く成功せり。

然れども渥美氏を斥けたることは眞宗大谷派の改革として將た又佛教の革新として何程の効力を有したりしや。是の點を考察するは村上氏の今日の地置及び其反抗の意義を批評するに於て最も必要なる事項なりとす。

有体に言へば社會は慥に所謂白河黨なるもの、改革運動を買被りたりき。彼等は口を極めて渥美の不信任を攻撃せり然れども布教勸財の事業に就いて本願寺其者の取れる大方針を一言も批難せざりし也。傳燈相續の法主を神聖視せる固陋なる教權主義に關しても一言も批難せざりし也。彼等は渥美氏の失行を指摘すること甚だ力めたり而かも本願寺其者が今日の文明社會に於て果して其の宗教的職能を盡しつゝありや否やてふ根本問題に就いては何等の批評する所無かりしなり。彼等を目して日本のルテルと賞賛したるは慥に賞賛したるもの、過なりき何となればルテルは羅馬教會の根本教權を否定して起ちたるもの、一法王一僧正の更迭を目的とせるものに非ざりければなり。是の點より觀察すれば白河黨の諸子が所謂改革は改革と言はむよりは寧ろ一渥美氏に對する排斥運動と呼ぶべかりき。夫れ唯一渥美氏に對する排斥運動に過ぎず、是を以て改革的輿論

の火の手漸く蔓延して或は法主の内行を許き或は自由信仰を論じ或は從來の教權主義に反對せむとする者漸く加はるに及ては所謂白河黨の諸子は寧ろ其の結果の意外の邊に影響せるを本意ならずとせしならむ。若し然らずとせむか渥美氏の下に虎の如くなりし彼等は何故に石川舜台氏の配下には猫の如くなりし乎。大谷派本願寺の失行と腐敗とは其の執事に渥美氏を戴けると石川氏を戴けるとによりて毫も異なる事無し。彼等は何故に先に勇にして後に怯なるか。監獄教誨師問題と云ひ宗教法案問題と云ひ石川氏の亂行は寧ろ渥美氏が一宗内の財政を紊亂せるよりも遙に甚しきものあり。白河黨の諸子にして果して佛教改革の大志願ありたりとせむ乎少くとも今日に於て更に十倍の勇氣を以て奮起せざるべからざるに非ずや。吾人は是の點に於て多くの價值を二十九年の改革運動に置く能はざると同時に村上專精氏が今回の反抗に就いて深く氏に希望する所無かるべからず。

### 五過去に於ける東本願寺と村上氏との關係

村上氏も亦南條井上諸氏と共に白河黨の改革運動を贊助したる一人なりき。氏は改革運動の起ると同時に長文の辭職勸告書を渥美氏に送り其の願みられざるに及びて是を『教界時言』紙上に公にし更に井上圓丁氏と連署して改革賛成の概文八百餘通を全國に頒布し鷺尾境野諸氏と共に眞宗東京中學校長を辭して改革運動の爲めに地方遊説に出懸けたり。當時尾參二州並に美濃一帶の地に於ける革新派の興起は實に氏の力與て多きに居る。當時改革派中の有力なる一地方團體なる參河の愛山同盟會の如きは全く氏の力によりて成立せしものなりき。今村上氏が當時如何なる精神を以て改革派を助けたりしかを了解するは氏が今回の反抗を批評するに於て須要なる事項也。吾人を以て見れば氏が改革運動に希望したりし所のものは決して一執事の更迭と云ふが如き小事には非ざりしが如し。當時『無盡燈』第七號に掲載せる『余が佛教史』と題する一文は眞宗大谷派の狀況を古代の佛教歴史に比擬し其の命且夕に迫れることを警告したる一種の宗教進化論なりき。『教界時言』第二號に寄せたる『大谷派の生命は猶存するか』と題せる論文は更に是の旨趣を具體的に説明し根本的改革の免るべからざる所以を

痛論したるものなりき其の初めに曰へらく、

抑々本山が近來兩堂再建の方策の如き、負債償却の仕方の如き、宗教家の本分として爲すべき方法なる乎。勸學の施行、布教の方針、凡て文明の今日に適當するものと謂ひ得べきか。彼を思ひ此を思へば、余輩は眞宗大谷派の生命は實に旦夕に迫る心地こそすれ、吾曹之をしも憂へずんば亦何をか憂へん。是れ豈根本的改革意見に非ずして何ぞや。由來本願寺は金錢と極樂とを交換する一大商店也。憐むべき正直者が拮据經營して獲得したる半生の貯蓄を剝奪して、法主役僧等が妻妾衣住の資となすは決して今日に初まりたることに非ざる也。民衆に向て極樂往生の道を與ふるは好し、是が爲に必ず金錢を得ざるべからずとするは何の理由ぞや。負債償却、兩堂の再建、何れも是の方法によりて成されたり、是れ無くむば本願寺は一日も存在すべからざるなり。執事の甲乙たると丙丁たるとを問はず、是の一事は本願寺の生命の根源として、一日も缺くべからざる也。而して村上氏は是を以て宗教家の本分に違へりとせり、是れ即ち眞宗大谷派に對する根本的改革意見に非ずして何ぞや。本願寺は傳燈相續の貴族的法主を中心

として一切の教義の自由解釋を許さず、布教の方針、勸學の施行、素より日新の時勢に適合すべくもあらず。村上氏が是を以て文明の今日に適せずと斷せるものは、是れ亦眞宗大谷派に對する根本的改革意見に非ずして何ぞや。是に依て見れば、村上氏の改革派に賛同したる理由は、彼の所謂白河黨の諸氏が、單に一執事の更迭を希望したるものに比して遙に根本的なりし也。即ち氏が根本の精神は今の本願寺を全然破却せずむば已まざるべかりし也。然らば即ち石川氏の司配の下に立てる本願寺が、渥美時代より更に墮落の深淵に陥りたる今日、氏の改革的精神が、今回の大反抗となりて現はれたるは最も自然の徑行と謂ふべし、將た苟も斷乎たる確信と、是の確信を實行するの勇氣あるもの事、必ず茲に出でざるべからざる也。吾人は是の點に於て深く村上氏の終始一貫せる行動を歎美するを禁する能はず。是によりて之を見れば、村上氏が今回の大反抗は今日に初まりしに非ずして、既に二十九年の改革運動に其の端緒を發せし也。吾人は是に於て、氏と本願寺と將來の宗教との關係に就いて、氏に對する一言の希望を述べざるべからず。是れ實に氏の爲に言のふみに非ず、又實に本願寺の爲に言ふのみに非ざる也。

六 釋尊の行者(村上氏今後の覺悟如何)

大谷派本願寺の一僧侶として氏は其の本山に反抗して其の根本的改革を唱へたり。然れども本願寺にして動かざる時は即ち如何。今の本願寺が依て以て存在し依て以て繁昌する如き方法は氏が絶對的に非認せる所なり是の如き方法によりて存在し繁昌するものは本願寺なると佛教全體なるとを問はず寧ろ其の滅亡を以て國家國民の利福となすべき也。是の如き意見を有する氏が大谷派本願寺の一僧侶として終始することは甚だ謂はれ無きことならずや。吾人は是點に關して村上氏が自己の大なる天職の自覺に到達するの日あらむことを切望して已まざる也。

昔者日蓮の教を唱ふるや曰く吾は是れ釋尊の行者也。如何に偉大なる宣言なるよ。今の宗教界の腐敗せるは畢竟禪宗の行者あり眞宗の行者あり一法主一舞台の行者あり而して釋尊の行者無きが爲ならずや。宗教は人生の爲に存す人生宗教の爲めに存するに非ず腐敗せる本願寺と腐敗せる佛教との滅亡を希望し

たる村上氏は須らく釋尊の行者を以て自ら任すべきに非ずや。吾人が村上氏に希望するところ實に是の如し。遮莫本願寺は如何にして氏を待たむとする乎。眞宗大谷派及び其以外の佛教徒は如何にして氏の反抗を觀むとする乎。抑々村上氏自らは氏が今回の告白に對して將來如何なる行動に出でむとする乎將た又吾人の言へる所は吾人が理想の村上氏に過ぎざる乎。請ふ利目して是を觀む。

(三十三年五月)

## 十九世紀總論

## 第一章 序 論

(期二第) 索思及勢時

一言以て是を掩へば、十九世紀は革命の時代也。政治の上に於ては言ふまでも無く、社會の上に於ても、學術の上に於ても、文藝宗教の上に於ても、其他何れの方面に於ても、革命の時代也。而して是の革命の理想として二個の主義あり、十九世紀の文明は是の理想に向て集注せるを見る。二個の主義とは何ぞや、民主主義は其の一也、國民主義は其の二也。前者は個人の權利の平等を主張するに本き、後者は其同人種互に相團結し、異人種互に相排斥するの傾向に基く。是二主義の結合を十九世紀文明の特色と爲す。

然れども民主主義は十九世紀に於て創まりたる者にあらず、實に近世史に於ける歴史上の大勢力也。抑中世史に三種の門閥ありて當時の勢力を專有せり、近世史の最大事業は是の門閥制度を打破するに存しき。中世に於ける第一の門閥を

論 總 紀 世 九 十

(605)

學者と爲す、彼等は學識を私し、天下の民の愚なるに乘じて其の權力を揮ひたり。第二の門閥を僧侶と爲す、彼等は天國の鍵を私して威福を恣にせり。第三の門閥は帝王也、彼等は世襲の神權を擁して、民を土芥視せり。中世紀の人民は是の三頭門閥の下に立ちて無學、迷信、屈服の外其他を知らざりしが、是の門閥の特權に反抗して個人の權利を伸張するは即ち近世史の職能なりき。

第一、知識の專有は打破せられて學者は平民となりぬ、所謂文藝復興即ち是れなり。知識を得たる平民は次に僧侶の特權を打破して其の天國の鍵を人類の共有物となせり、宗教革命即ち是れ也。帝王の神權最後に打破せられて、政權は國民の間に分配せられぬ、佛蘭西革命即ち是れ也。佛蘭西革命は歐洲の情勢を根本的に搖撼せり、其反動は起りたり、而して第二、第三の革命は極端なる第一革命の善後策として引續いて現はれたり。十九世紀、殊に歐羅巴は是等の送迎に多忙なりき。

十九世紀文明の第二の理想は國民主義也。中世紀にありては今日の意味に於て國民と呼ぶべきもの殆ど是れ無かりき。歐洲大陸には幾多の異人種ありて、雜居せり、封建制度が是の間に劃したる境界は極めて勝手氣儘なるものなりき。



同人種も異邦の民たるあり、異人種も同邦の民たるあり、胡漢吳越雜然として其の居を同じうせる有様なりき。十九世紀に到り、各人種は是の渾沌裏より目醒めて漸く血族同體を感じ初めたり。國民主義乃ち是の感情の發表として、歴史上の一要素となりぬ。是に於て同人種間の求心力は獨逸、以太利を聯合し、異人種間の遠心力は將に匈牙利を分裂せしめむとす。

物質的文明の進歩も亦今世紀の特色として大書せらるべき也。而して是の物質的文明の進歩に伴へる富の増進と其分配の不均等とは一方に於ては大富豪を生ずると同時に、他方に於ては小貧民を多からしめぬ。富豪と貧民とは十九世紀文明が産みたる社會的雙生兒也。是に於て、大多數の人民は會て政治上に於て得たる所のものを、今は社會上に失ひたるの觀あり。這般の善後策は今日以後の問題に屬す、社會問題即ち是れ也。

十九世紀史の主動者は言ふまでも無く歐洲文明なり。歐洲文明が世界を征服したる大功業は今世紀の最も著しき事實なりとす。所謂『暗黒大陸』は今や歴史的名稱となれり、食人俗を以て有名なる南洋の諸島も、アリアン人のテニス遊戯場

あらざる者稀なるに至れり。歐洲文明に次いで勢力あるものは、絶東の文明なりと雖も、是を世界歴史の上より大觀すれば、遺憾ながら尙ほ未だ歐洲文明の競争者と稱するを得ず、其の發達の如きも、多くは西洋の影響に起因するを見る。所謂文明競争の東西兩洋間に起るの目ありとせば、そを目睹すべきものは即ち二十世紀以後の歴史ならむ。

凡て是等の事變の動機となりたるものは即ち革命也。十九世紀は前後三回の革命を経由せり。第一の革命は一千七百八十九年のバスチユの破壊に初まり、一千八百十五年の華德堡の戦に終る、所謂佛蘭西革命是れ也。第二の革命は一千八百四十八年に中部歐洲を通じて起りたる民主的運動にして、第一革命の反動として起りたる君主政治を顛覆するを目的とせり。二三國際間の戦争と一二國民の獨立運動と亦是に加はりしが、其の結果は概して失敗に終りたり。第三の革命は頗る成功多き革命なりき。歐洲中部の地圖は殆ど改造せられたり、國民の獨立せるものあると、立憲政治の實施とは其の主要なる結果也。是より以往國民の權利を伸張せむが爲に又銃丸を要せざるに到れり、彼等は投票の權利を確定したれば

なり。

中部歐洲の改造と同時に東部歐洲の改造も亦實行せられたり所謂東方問題即ち是れ也。歐洲の内事漸く鎮靜に赴くに及び東西兩洋の接觸は茲に漸く世界の注意を惹起しぬ。其の重なる役者を日本と露西亞となす所謂極東問題即ち是れ也。今世紀の終に於ける極東は獨り國際權力上の爭點なるのみならず經濟宗教學藝等諸般の文明に對して漸く交渉及び競争の舞臺たらむとせり而して其の根本的動機となれるものは即ちアリアンとチユニアンの間に於ける人種競争に外ならず。

若し夫れ當今の大問題は社會問題と國際問題とに歸着すべし。國際問題に關して最も危險なるアルサス、ロトリンゲン、君士坦丁、日本海の三地點は恐らくは最も重大なる固有名詞として來るべき世紀の史上に反覆せらるべき也。

## 第二章 第一革命(佛蘭西革命)

### 一 其由來

『朕の後に洪水あらむ』とは、ルイ十五世の遺言として寧ろ聰明に過ぎたる程なりき。洪水は遺言の通りに來りたり、『恐怖時代』は其嫡王を斷頭臺に上せたり、殆ど二十年の間、佛蘭西國民は毎朝ギロチンの響に目覺めたり。是の如き結果に於て正當の報酬を求めたるルイ十四世時代の稅政は、想像するに餘りあるべし。佛蘭西宮庭の驕奢は言ふに及ばず、蛙の聲を鎮めむが爲に終夜貴族の城濠を掻き廻はさるべからざる農民ありき。國民は國稅を免れ居る僧侶をして其の黄金の珠數を爪繰らしめむが爲に、年々一億萬弗の賦金を納めざるべからざりき。

而して是の如きは獨りルイ十四世治下の佛蘭西のみならず、全歐洲を通じて腐敗せる舊文明の殘骸として見らるべきものなりき。神聖羅馬帝國と稱するものありと雖も、實は小獨立政府の覺束無き集合體に過ぎず。其の主腦とも見るべき普魯西も澳地利も是を統一する力無く、議會ありと雖も立法機關の幽靈に過ぎざりき。其議員等は、公使の椅子の色は赤と緑と何れか威嚴ありやと云ふが如き問題を一日の議案と爲し居れる有様なりき。當時の以太利は、單に一個の地理上の名稱に過ぎず。英吉利も亦實際は少數貴族の寡人政治のみ、其の下院の如きも賄

賂によりて當選せる大地主の集會に外ならず、言論出版の自由は束縛せられ、唯其弊の佛、澳、諸國の如く甚しからざるのみなりき。要するに特權ある教會と專制の政府と、驕傲奢侈を極めたる貴族と、榮色ある農民とは、歐洲大陸の到る處にありき。斯かる間に新思想は先づ氣早やなる佛蘭西人の間に動き初めたり。マルテル、モンテスキュー、ルソー等の唱へたる自由、平等、博愛の主義は、更に斷頭器械の響きによりて説明せらるべき事となりぬ。佛蘭西革命、即是れ也。

## 二 其事情及び奈破翁

佛蘭西革命の狀況は茲に述ぶる遑無し。兎に角是の革命は人類の歴史に比類なき殘酷悲惨なるあらゆる事情に伴はれて其の歩を進めたり。自由、平等、博愛に狂したる佛蘭西人は、今や其の行くべき道を忘れたり。彼等は、人類の惡徳を化現せる一賣女をば、自由の女神として崇拜せり。新憲法は幾度びか發布せられたり。王は位を退けられて斷頭臺に上せられたり。自由の美は、しき夢を望みたる佛蘭西人は却て、ギロチンの響に魔はれたり。彼等は行くべき道を忘れたるのみならず、其の爲すべき事をも忘れたり。斯くてナポレオン・ボナパルトの起つべき時は遂に來りぬ。

奈破翁は大なる際物師なりき。彼は初めは民黨を踏臺にして兵權を握り、更に兵權を踏臺にして民黨を壓制せり。一千七百九十九年の「クーデター」以來、彼は遂に佛蘭西國の主權者となりぬ。是の如くにして佛蘭西は、歴々二十年の間に數百年間の羅馬史を復習せり。——王國は顛覆せられたり、共和政治は建設せられたり、而かも其の基礎の薄弱なるが爲に遂に野心ある一將軍の手裡に落ちぬ。奈破翁は正に是れ佛蘭西の核撤なりき。佛蘭西の核撤は永く共和國の統領を以て甘する者に非ざりき。彼れ、伊太利及び萊因河邊に於ける赫灼たる戰功を負て歸國するや、佛蘭西は事實に於て最早や共和國に非ざりき。核撤は、ルビ、コンを渡りたり、是に於て曾て自由の爲に其世襲の王を犠牲にしたる國民は、今や湧くが如き歡呼を以て、コルシカ島の一軍人の頭に帝冠を上せたり。「帝國萬歲」と「マルセイユズ」の奇異なる諧調は、久しくギロチンの響きに惱みたる國民の耳を樂ましめたり。一千八百七年に於て奈破翁の權力は其の絶頂に達したり。彼れは昔に全佛蘭西

及び北以太利の主人なるのみならず、其兄弟は南以太利並に和蘭に王たりき。西獨逸は全然彼の屬國にして、普魯西、澳地利、亦彼の足下に摺伏し、彼の所謂大陸制度に聯合して、英吉利に反對せしめられたり。ライプテヒの戰に萊因同盟の崩壊してより、彼れの勢力漸く振はず、一度ビエルバに流され、幾もなく華德堡の一戰に敗れて再び聖ヘレナに流され、佛蘭西の核撤は茲に全く政治的舞臺を退きぬ。ルイ十八世は巴里に歸りて奈破翁の後を受け、佛蘭西革命は茲に全く其餘波を收めたり。

### 三 佛蘭西革命の結果

奈破翁の覆没と共にブルボン王統は再び佛蘭西に君臨せり。然れどもルイ十八世を王位に迎へたるは同盟軍の銃劍にして國民の弊には非ざりき。佛蘭西革命の結果は、疑もなく其當初の理想たる自由、平等、博愛の觀念を歐洲の人心に樹立するを誤らざりき。若し一時の影響を以てすれば、是の革命は甚だ好望なるものに非ざりき。彼は教育を破壊せり、宗教を破壊せり、博愛の麾下に立ちて虐殺を恣

にせり。天下何物か能く『恐怖時代』の慘劇に比すべきものあらむや。然れども是等は一時の弊のみ。舊文明の殘骸を粉塵して自由、平等の大義を天下に明にしたるの勳功に至ては、千秋萬歲凍として抜くべからず。

奈破翁は帝王なりき、然れども中世的の專制帝王には非ざりき。彼は、他、迄、民主的帝王なりき、彼は國民の輿望の上に帝冠を戴きし也。是點より見れば、華德堡に於けるウーリントンの勝利は即ち近世の民主、義に對する中世的專制主義の勝利なりき。是を以て同盟軍が奈破翁の代りにブルボン王統を擁立したるは、即ち佛蘭西革命の流血を無視したる所爲なりき。一千七百七十九年以來、佛蘭西が歐洲列國の公敵たるは毫も怪むべきに非ず。當時英國に於ても、大陸諸國に於ても、主權者の思想を司配したるものは、多くは依然たる中世的專制主義に外ならざりければ也。然れども犠牲の血は無益に流れざりき。奈破翁は列國にとりて是迄も無き恩人なりき。十九世紀の文明は是の革命の源泉より湧き出でたる清流なればなり。

試に是の革命の影響を略説せむか。其の最も顯著なるは言ふまでもなく、佛蘭

西也。古き貴族は枯葉の如く捲き去られたり、教會も商團も各々其特權を失ひ、凡ての佛蘭西人は同一法律の下に平等となれり。海陸軍人となる特權は貴族の手より奪ひ取られたり。是の弊風を根本的に打破したるは一伍長を總督に拔擢し、宿屋の給仕人をナポリ王に推薦したる奈破翁なりき。貴族僧侶に屬したる土地は國家の有となりて、弘く國民に貸與せられ、納税の義務も亦全國を通じて一様に爲されたり。社會の秩序整頓するに隨ひ、勞働社會の狀態亦漸く好良に赴けり。佛蘭西以外の歐洲列國が被れる影響も亦小少ならざりき。白耳義和蘭、以太利及び萊茵河一帶の地方は若干年月の間佛蘭西の治下でありしを以て「奈破翁法」の下に封建制度の破壊せられ、平等的組織の制度せらるゝを親睹せり。是を以て奈破翁覆没後、佛蘭西の支配を離れたる後にありても、永く是を徳として其の封建時代の舊制度を回復することを爲さざりき。特に獨逸にありては幾多の小侯伯は全く其の世襲の獨立を失ひ、茲に他日來るべき聯邦統一の地盤を造るを得たり。若し奈翁の戰爭微せば、獨逸帝國の統一は永く見るべからざりしやも知る可らず。以太利も亦然り。獨逸の統一と以太利の獨立とは歐洲今世紀の二大事實也、小侯

伯の滅亡素より與て力ありしと雖も、其の根本の動機は人種的感情より生起せる國民主義の勃興に存せずむばあらず。而して是の人種的國民主義の興起せるは、奈破翁の征服に本かすむばあらず。是に依りて見れば、佛蘭西革命は十九世紀文明の二大理想たる民主主義と國民主義との生母なりと謂ふべし。即ち知る、佛蘭西革命は華德堡に於て擊破せられざりき。奈破翁の帝國は覆没せり、然れども十九世紀の生母たる佛蘭西革命は其の嫡統たる民主主義と國民主義との發達の中に永遠の生命を保ちたり。奈破翁を仆したる歐洲列國も、終に佛蘭西革命の征服を免るゝ能はざりき。

### 第三章 第二革命(一千八百四十八年)

#### 一 第一革命の反動、維納會議

然れども奈破翁の没落と共に第一革命の反動は起りたり。是を代表する者を維納會議と爲す。

維納會議は專制主義の化身なりき。其の目的は全然第一革命(即ち佛蘭西革命)

の理想を打破するにあり。換言すれば歐洲列國を千七百八十九年以前の狀態に回復するにあり。是の目的は或程度に於て到達せられたり。日耳曼同盟の時機は尙ほ未だ熟せざりしが、是の會議の結果として普魯西と澳地利は革命以前の狀態に復したり。魯西亞は波蘭土を併せ、英吉利はマルタ島を得、瑞典は那威を收め、瑞西は改造せられ且つ擴張せられ、法王は其の舊土を復したり。而して是の復古運動の中心となれるものは澳地利の宰相メッテルニヒなりき。維納會議が專制主義の化身なるが如く、メッテルニヒは維納會議の化身なりき。第一革命に對する歐洲列國の反動を知らむと欲せば、メッテルニヒの政略を知るに如くは無し。

## 二 反動の化身、メッテルニヒ

『新にも就かず、舊にも復らず、唯ありし儘の事態を維持するは、メッテルニヒの大方針なりき。彼は是の方針を貫かむが爲には如何なる代價をも辭せざりき。獨逸列邦の首位に居り、以太利の支配者たる澳地利は、其の全力を假して彼れの政略を補助せり。言論出版の自由は嚴に束縛せられ、普通教育は杜絶せられたり。彼れ

公言して曰く、國家は知識ある人民を要せず、唯盲從に訓練せられたる臣下と官吏とを要するのみと。是の目的の爲には僧侶を用ふるに若くは無し、是を以て頑迷なる信仰は榮達に缺くべからざる資格となれり、同時に新教徒は迫害せられぬ。中部及び南部歐羅巴は是のメッテルニヒの強迫の下に一時の靜肅を保ちたり。然れども第十九世紀の理想なる民主主義は、流石に澳地利の一宰相の力よりも強かりき。メッテルニヒにとりての得意時代は、即ち第二革命にとりての準備時代なりき。是間の消息を解せむとせば、先づ第二革命の火元たる佛蘭西に就いて説く所無かるべからず。

## 三 佛蘭西に於ける第一革命の反動

外國軍の銃劔によりて王位に上りたるルイ十八世も同盟軍の退去したる後は是非共國民の肩に倚らざるを得ず。是に於て憲法は發布せられ、佛蘭西は立憲王國となりぬ、然れども王と共に歸國したる王族貴族等は是に満足せず、ルイを使嗾して專制君主國たるの準備として衛兵を組織せしむ。衛兵は首尾よく組織せら

れ革命の標章たる三色旗の代はりにブルボン王家の白旗は翻りぬ。ルイの死後シャル十世として王位に上りたるものは、即ち是の白旗軍の一統領なりき。然れども摸型的ブルボンとも稱すべきシャルの短き治世は、是の舊王族が到底十九世紀の支配者たるに適せざることを最も明に證明したるものなりき。彼は國民の委任を濫用し、議會の權限を無視せり。憲法違反者としての王の批難は國內に擴がり。『バリカド』は直に巴里の街の上に築かれたり、國民は『オテルドキエ』の屋上より翻へる三色旗の懐かしきに喝采しぬ。王兵は城外に驅逐せられ、シャルは位を退けられ、オルレアンの傳統なるルイフィリップ代て王位に上り、ブルボン王朝は再び茲に覆没し畢矣。時は惟れ一千八百三十年。

一千八百三十年より四十八年に至る十八年の間、フィリップはオルレアン王統の根據を固めむが爲に一方ならず苦心せり。而して是の苦心の中には多少の成功を齎せしものありしが、革命の機運は彼れの支配の下に何時しか熟せられたり、而して是が動因となれるものを大奈破翁に對する崇拜熱となす。薄弱なる立憲政治と、ブルボン、オルレアンの平凡なる王政とは浮氣なる佛蘭西人を永く満足する能

はず、國民は漸く奈破翁時代の強大と光榮とを懷慕し初めたり。チエールは其の歴史に於て、ペランヂエーは其の抒情詩に於て、奈破翁の下に働ける佛蘭西人の功業と名譽とを盛に讚美せり。マレンゴ、フリドランド、華德堡の老兵士は國民が追慕の情を新にせむが爲に、到る所に往年の閱歷を物語れり。奈破翁の肖像は東はフランダより西はピレネーに至るまで、到る處農民の爐邊に懸けられたり。全國民は缺焉として齊しく懊惱する所あり、『大奈破翁』てふ名は咒語の如く是の間に響き亘れり。ルイフィリップは其地位を固めむが爲に、ボナバルト黨の歡心を買はむと欲し、英吉利と協議して奈破翁の遺骸を巴里に迎へ、盛大なる儀禮を盡して是を改葬せり。然れども此の改葬は益々奈破翁崇拜熱の熱度を高からしめたるの外、王及び其の朝廷に何の利する所無かりき。

兎角する内にフィリップ王の最後は近きたり。王は時事の日に非なるを認め、選挙法を改めて頽勢を防遏せむとせり。是の新選挙法によれば、國民の選挙資格は、全國民を舉げて僅に三十萬の有資格者あるに過ぎざるまでに高かりき、是に於て國民の大多數は事實に於て参政の權を褫奪せられたり。議場に連るものは富豪と

貴族とのみ。是の參政權を得むが爲にバスチユを破壊し、ルイ十六世を斷頭臺に上したる國民、如何ぞ是の專横を默視して已むべけんや。是に於て民主黨はチェール、ギゾーを統領とせる一團體を組織し、一千八百四十八年二月華盛頓の誕生日をトして一大會を催し、一舉してルイ、フリップの政府を顛覆し、新に憲法を制定して共和國と爲し、ルイ、ナポレオンを選舉して大統領と爲す。ルイは大奈破翁の甥にして、當時は平凡他奇無き一鈍物と見做されたりき。是の一鈍物が俄に大統領の地位に上りたるは、一は大奈破翁に對する懷慕の情の其の甥に及べるが爲、一は鈍なるが故に、議會のまに／＼左右すべしと想像せられたるが爲なりき。然れども佛蘭西人が失望すべき時は、遠からずして來りぬ。チェール後に人に語りて曰く「佛蘭西人は、ルイ、ナポレオンに對して、二個の誤解を抱けり。初めに彼を鈍物とせしは、其一なり。終りに彼を英雄とせしは、其二なり」と。

兎も角も、佛蘭西に於ける第一革命の反動は第二革命によりて掃蕩せられたり。一千八百四十八年は一千七百八十九年の正嫡なりき。

#### 四 佛蘭西以外に於ける第二革命

第一革命は佛蘭西の特有物なりしが、第二革命は全歐洲の共有物なりき。巴里に於ける二月革命は、枯野に落ちたる一把の松火の如く、其火焰は見る／＼大陸の四方に擴がれり。第一革命は寧ろ列國の嫌惡を買ひたりしが、一千八百四十八年の數ヶ月は俄然として全歐洲の政治的狀態を一變せり。

維納會議の議決は、獨逸聯邦にとりて甚だ満足なるものに非ざりき。彼等は統一を希望せり然れども、普澳兩國の嫉視は是の希望を妨げたり。彼等は憲法を希望せり、然れども王侯麾下の銃劍は是の希望を貫かむが爲には餘りに強かりき。是の如くにして空望の中に歲月を過すこと三十年、而して巴里に於ける二月革命の飛報は忽ち暴風の如く傳はれり、革命は原燎の如く瞬く間に擴がれり。到る處の大都會に民權の爲に起てる徒黨あり、政府は其勢に避易して到る處に自由と民權とを認容せり。普魯西王は憲法を公布して聯邦統一の爲に盡すべきを誓ひたり。唯澳地利にありて、維納大學生を先鋒とせる民黨の一揆は脆くも制服せられ



獨逸聯邦の統一は茲に後年の希望に屬しぬ。而して澳地利の専制主義には魯國の後援あることを遺るべからず。澳地利の領域には由來幾多の異人種を包含せり、匈牙利に於けるマジールの如きは、アリアン人種の先天的反對者たるチュラニア人種に屬する者也。巴里に於ける二月革命の聲は、匈牙利人の獨立布告となりて反響せられぬ、コッスト實に是が領袖たり。是に於て澳地利は援を魯國に求めぬ、魯國は是を甘諾せり、是を甘諾せるは匈牙利の分離は即ち直に波蘭土の分離を意味すべきを恐れたれば也。是の如くにして獨立軍は滅び、コッストは出奔し、中部歐洲は再びメッテルニヒが鐵蹄が下に威服せられぬ。

若し夫れ以太利は、メッテルニヒの言へる如く、一の地理的名稱に過ぎざりき。然れども『統一以太利』てふ觀念はカブル、マヂニの理想たる如く、ダンテ、ペトラルカ、マキヤベリーの理想なりき。而かも十九世紀に於て其の國民的觀念の特に勃興したるは奈破翁の征服の結果に歸せざるべからず。然れども維納會議を主宰せしメッテルニヒの眼には『地理的名稱』に過ぎざりしを以て、其の大部分は依然として澳地利に隸屬せり。『カル、ボナッリ』是に反して先づ興り、『青年以太利』是に次ぎて起り、

巴里に於ける二月革命の傳はれる頃には『統一以太利』の理想は眼前にありしが如く思はれたり。然れども澳地利は名將テデツキの力によりて間もなく東方伊太利を回復し、將に羅馬を衝かむとす。是時思ひ懸なくも佛の大統領ルイナポレオンは恩人の假面を被りて以太利に亂入し、澳地利に先ちて羅馬を占領せり。マヂニ、ガリバルヂー等は統一の日、尙ほ遠きを望みて落膽せしが、尙ほ是によりて三個の眞理を悟りぬ。一に曰くサルヂニア王は伊太利中興の君主として信頼すべきもの也、二に曰く外國の勢力は凡て信頼すべからず、三に曰く澳地利の勢力半島内に存する間は、伊太利の獨立望むべからず。是の如くにして、彼等の失敗は尙ほ成功の半ばなりき。

## 五 第二革命の反動、ナポレオン三世

第二革命の結果として佛蘭西共和國の大統領に擧げられたるルイナポレオンは、同時に是の革命の反動の代表者なりき。彼は國民が彼を興みし易しと侮れるを奇貨として、潜に其の野心を涵養せり。彼は任期満つるに臨みて其の再任を希

望せり而して是の希望は憲法の認めざる所なるを以て彼は茲に一大決心を爲し、憲法改正の動議に於て三分の二の味方を得むが爲に一夜反對黨に「クーデター」を施しぬ。全國民が是の不意打に呆然たる間に彼は強盛なる軍隊を以て大虐殺を巴里街上行ひぬ。從來彼を嘲笑したる氣輕なる巴里人も一千八百五十一年十二月以降は決して彼を笑ふと爲さざりき。事茲に至れば寧ろ易々たるのみ議院は滿場一致を以て彼の行動を是認せり而して間も無く佛蘭西皇帝の金冠は彼の頭上に冠らせられぬ。第二共和國是に於て滅ぶ。

### 六 第二革命の結果

第二革命は是の如くにして終りたり。其政治上の結果を擧ぐれば普魯西其他一國の憲法に過ぎざれども其の社會上に於て平民の權利を伸張し、民主自由の觀念を普及したるは其の顯著なる功績と爲す。第二革命は民主主義と國民主義とが如何にして到達せらるべきかの方法に就いて最も苦き經驗なりき。然れども十九世紀文明の最終の發達が是の經驗によりて準備せられしことを想へば寧ろ

低廉なる代價なりと謂はざるべからず。

### 第四章 第三革命(中部歐羅巴の造改)

#### 一 小ナポレオンの没落、共和國の建設

一千八百四十八年の第二革命は專制主義に對する一般人民の反抗なりき。然れども是の反抗には一定の指導と適當の訓練とを缺きしを以て比較的鞏固なる舊組織を破壊するの力無かりき。是れ其の失敗せる所以也。第三の革命は全然別種の方法に出でたり。多くの國にありては組織ある政府は烏合の一揆に代りて革命の前驅となれり。其の確乎たる目的と充實せる權力とは首尾好く是の事業を果したり。獨逸と伊太利とは是が爲に統一的國民となれり、澳地利は是が爲に改造せられたり、佛蘭西は是が爲に再び共和國と爲れり。而して是の中部歐羅巴の改造の動因となれるものは佛蘭西なりき。

佛蘭西は前章に説けるが如く、ナポレオン三世の下に再び帝國と爲れり。ユゴ一の一言最も好く是の帝國の特質を現はせり。曰く「佛蘭西は帝政に戻りたり、唯

其の異なるは、大奈破翁の代りに小ナポレオンあるのみ」と。然れども國民の是の事實を看破せるは遙かに後年の事なりき。彼等は小ナポレオンが初期の成功に心酔して、大奈破翁の帝國眞に復活せりと信せし也。氣早なる佛蘭西人が是の如く信せしは洵に無理ならぬとなりき。クリミア戦争に魯を挫き、伊太利戦争に澳を倒したる頃の彼れが権力は實に目覺ましきものなりき。一千八百五十九年頃に於ける佛蘭西は、恰も一千八百七十年後の普魯西にも較ぶべかりき。然れども小ナポレオンは遂に小ナポレオンたるを免れざりき。一度び北米戦争の干渉に失敗し、二度び墨西其に失敗し、三度び波蘭土政略に失敗し、而して隣邦普魯西の勢力隆々として増進するを見、更に國內に於ける自己の不人望の漸く高まるを見るに及びては、彼れの煩悶は其限を知らざりき。彼れ一方に於ては憲法を改正して議會の歡心を求め、他方に向ては普魯西と開戦し、其の勝利によりて自家の權勢を固めむとせり。然れども普魯西には大奈破翁をも恐れしむべきビスマルクありき。是の如くにして二個月の後、彼はセダンの一囚人となり、新共和國は預言者の瓢の如く、一夜の中に巴里に建設せられぬ。

## 二 獨逸及伊太利の統一

第三革命の一大事實として記すべきは獨逸聯邦の統一也。キルヘルム一世の普魯西王の位に即くや、普魯西の運命は軍隊の上に懸れることを看破せり。彼れの抜摘せる宰相ビスマルクは能く王の志を體認し、議院を眼中に置かずして擅に軍備を擴張せり。彼れが議會の批難に對する一語は、永く彼れの政畧の套語となれり、曰く「方今天下の事、唯血と鐵とによりて爲さるべきのみ」と。ビスマルクは是の鐵血政略を用ひて、先づ和蘭を威赫し、シエスキヒ、ホルスタイン事件を機會として、澳地利の容吻を杜絶し、所謂「七週戦争」に於て國內の不平を平げ、其實力に於て漸く佛蘭西を超駕せり。彼は是の如くにして首尾好く小ナポレオンの嫉妬と野心とを挑發し、交戦二個月にして其帝國を破壊せり。是の大勝利は獨逸聯邦の統一を確定するの力ありき。セダンに小ナポレオンを擒にしたる翌年一月、佛京エルクサイエの宮殿に於て普王キルヘルムは公然獨逸皇帝の金冠を戴けり。ビスマルクの鐵血政畧是に至て其功を奏し、澳地利は全く獨逸より驅逐せられ、久しく期

待せられたる聯邦統一は、茲に見事に實現せられたり。而して是統一を固めたるものは普佛戦争の砲火と流血となりき。

伊太利の統一も亦十九世紀史の最も趣味ある局面也。是の統一の中心となりたるものは言ふまでもなくサルチニア也。サルチニアの以太利に於けるは猶ほ普魯西の獨逸に於けるが如し。サルチニアが獨逸の普魯西なるが如く、カブルは以太利のピスマルクなりき。彼はクリミア戦争に際して同盟軍に加はり、一は以て英佛の歡心を買ひ、一は以て自國の軍隊を練り、徐ろに機の到るを窺へり。一千八百五十九年、彼は佛蘭西と同盟し、澳地利を驅逐して先づ獨立の地歩を作り、次に普魯西と同盟して澳地利の殘領たるエチチアを取り、ナポレオンの敗後に至りて遂に羅馬を取り、茲にダンテ以來伊太利人の理想なる半島統一の事業を完成せり。千八百七十一年以後の以太利は、最早や單に地理的名稱に非ざる也、其人種と國語と制度とを同じうせる同胞は、四百年來の離別の後再び一堂に握手せり。以太利人は自由と獨立との爲に戦ひたる彼等の勇士に向て謝する所無かるべからず。勇士とは誰ぞ、曰く政治家カブル、曰く預言者マデニ、曰く戰士ガリバルデー、曰く

王、キルトル・エマニエル是れ也。

### 三 三國同盟改造後の平和維持策

ナポレオン三世の没落後に建設せられたる共和政府は、一千八百七十年に於ける城下の盟を以て無上の國辱と爲し、何時かは報復の機運に達せむことを期待せり。獨逸、澳地利、以太利の間に締結せられたる所謂三國同盟は、是の佛蘭西の復仇を防遏せむが爲に生起せる者也。三國同盟の由來は極めて簡單也。老猾なるピスマルクは普佛戦争の終ると同時に其の宿仇たる澳地利の歡心を求めたり。獨逸せる澳地利は到底是の強盛なる新興國に對抗する能はざるを以て、亦歡で是を迎へたり。ピスマルクは次に以太利を味方にせむが爲に、キクトル・エマニエルに左袒して法王の權力に反對する旨を公告せり、是れ以太利の最も憂ふる所の法王の處分に存するを熟知すれば也。以太利は首尾好く味方となりぬ。一千八百七十八年の伯林會議に於て魯西亞は獨逸と分離したりと雖も、ピスマルクは尙ほ獨逸以の間に三國同盟を締結するを得たりき。

獨佛蘭西たるもの亦是の三國同盟に對抗して何等かの準備を作さざるべからず。恰も好し魯西亞は伯林條約に不満を抱きて中部歐羅巴の關係を離れたり而して其の原因は塊地利が魯士戦争に關して漁夫の利を占めたるにあり。是れ佛蘭西にとりて乘すべきの機也。二國同盟は當時に於て默契せられしならむか。近時兩國の艦隊互に往來して熱心なる歡迎を交換したるが如き魯帝の親ら巴里を訪へるが如き佛蘭西大統領の魯西亞に赴きて是に答禮したるが如き愈々兩國の近親を加へたるもの如し。其の間の條約の如何なる點まで進行し居るやは局外者の窺知し難き所なりと雖も三國同盟に對する二國同盟の存在は今日までは炳焉たる事實なりと謂はざるべからず。是れ一面より見れば現狀破壊の準備にして他面より見れば現狀維持の方便也。

#### 四 結 論

パスチエの破壊を以て初まれる革命は中部歐羅巴の改造と三國同盟とに於て最終の段落を告げたるが如し。佛蘭西は常に其先驅にして隨て又最大の影響を

被りたりき。彼は三期の革命の間に一度び王國となり二度び帝國となり三度び共和國となりぬ。獨逸と以太利とは是間に統一と獨立とを得澳地利は殆ど全く改造せられ中部歐羅巴は一百年前に比して其の面目を一新せり。是の變遷を貫徹せる二大理想が民主主義と國民主義との發達にあること既に説けるが如し。然れども歐羅巴の中に佛蘭西革命の直接の影響を受けずして別種の發達を爲したる二大邦國あるを遺るべからず。何ぞや英吉利と魯西亞と是れ也。

今世紀に於ける英吉利の歴史は一言すれば平和の革命也。社會の改造に力ありしものは大陸諸國に於けるが如く銃劍にあらずして言論なりき。唯海上に越在せるを以て國際上の關係に於て大陸諸國の如き歴史上の意義を有せざる也。若し夫れ魯西亞は一千八百七十八年の伯林條約までは絶えず列國と交渉し常に其主要なる一勢力となれり而して所謂東方問題の主格者としては其の地理的關係の更に廣大なるものあり。是れ一言無かるべからず。

#### 第五章 東方問題(東部歐羅巴の改造)

## 一 魯西亞と土耳其

『世界の帝都』たる君士坦丁の所有者を土耳其と爲す。土耳其の是を有するは其國力の強きが爲に非ず、唯列強互に牽制して、一國の所有に歸するを肯せざるが爲のみ。蘇西の地峽は地中海の咽喉也、而して埃及是が所有者たり。非アリアン人種たる土耳其人は、早晚歐洲より驅逐せられざるべからず、唯歐洲列國が如何に是を處分すべきかは疑問也。東方問題、是に於てか起る。

東方問題の直接關係者は魯西亞と土耳其と也。東方問題を知らむと欲せば、先づ是の二國を知らざるべからず。

專制武斷希臘教、彼得大帝、帝王の暗殺、虛無黨、是等は魯西亞てふ名稱と離るべからざる聯想也。魯西亞の文明は中部歐洲に較べて一百年は後れたり。民主々義の理想は尙ほ是國に生育せず、『貴族、聖教、國家』とは一千八百五十五年に死せるニコラス一世の套語なりき。歴山二世の代に至りて、民主々義は漸く其の萌芽を發したり。ラブロフを代表者とせる自由黨、バクニンを領袖とせる虛無黨は、既成社會

の顛覆を理想として蜂の如く起りぬ、爆裂彈は帝自らの頭上に下りたり。歴山三世其後を受けて嚴に民黨を迫害し、現帝ニコラス二世又其後を受けて今日に到りぬ。帝は寧ろ自由主義の人ならむも、其の國是は多く前代と異なる所無し。要するに、十九世紀は尙ほ未だ魯西亞に曙けざる也。

土耳其に至ては更に甚しきものあり。彼は十九世紀の歐羅巴にける中世紀の國家也。而して其の人種に於ても、其の國體に於ても、言語に於ても、宗教に於ても、其他一切の社會組織に於ても彼は全く東洋的也。東方歐羅巴の二百年來の歴史的宿題は、如何にして是の東洋的國家を歐洲外に驅逐し得べきかにあり。其の長所が侵略にのみ存する土耳其人は、守成の地に立つに及びて失敗のみ引續けり。一カルロキッツの條約(一千六百九十八年)によりて彼は匈牙利の獨立を是認せり。一千八百三十一年より三十三年までの戦争の結果として、希臘は彼れの羈絆を離れて獨立せり。ルマニア、セルキア、ブルガリア等、バルカン半島の諸邦も引續きて分離せり。魯西亞は愈々南進せり。若しクリミア戦争に於ける英佛同盟軍の反抗微りせば、一千八百五十六年に於て、君士坦丁の半月旗は既に撤却せられたりしな

らむ。クリミア戦争は魯西亞の南進に對して手痛き打撃なりき然れども彼得大帝以來の魯西亞の國是は容易に挫くべくもあらず。東方問題の起る已むを得ざる也。

## 二 東方問題の解釋

『君士坦丁を魯國の首府にせよ』との所謂彼得大帝の遺詔が事實なりしや否やは審ならず唯最も明なるは是の事が現に魯國の國是たる一事なり。クリミア戦争の爲に遮断せられたる魯西亞は虎視眈々として新に機の乘すべきを窺へり、乘すべき機は遂に來りぬ。一千八百七十五年、ヘルツェゴビナに於ける基督教徒が土耳其人に虐殺せられたる事は是れ也。

往時神聖羅馬帝國が羅馬帝國の正嫡と稱したるが如く魯西亞は東羅馬帝國の繼續者を以て自ら居れる者也。是の故に回教國に於ける希臘教徒に對してはおのづから深痛なる同情を有し、其の迫害に復讐するは彼にとりては神聖十字軍に外ならざりき。況や又是が爲に其の政治的野心の同時に満足せらるべきをや。

是の如くにして彼はヘルツェゴビナの虐殺を好機會とし、土耳其に對して開戦を布告せり。魯土戦争是に於てか起る。

是の戦争に於て魯國は十分の勝利を得たり。土耳其が聖ステファノの媾和條約に於て魯國に讓歩したる所のものは實に莫大なりき。若し英相ビコンスフィールドの抗議微りせば魯國はバルカン半島の主人となりしならん。

英國の首相ビコンスフィールドは是の土耳其の讓歩を以て歐洲の平和を害するものと爲し、聖ステファノ條約の全部を破毀して列國の協商に委ぬべきを主張せり。一千八百七十八年に於ける伯林會議は是の主張に本づきて開かれぬ。英國の希望は首尾貫徹せられ魯西亞は是の戦勝の結果として殆ど別に得る所無く、其の南下の道は茲に杜絶せられぬ。

東方問題は伯林條約の締結と共に一段落を告げたりと雖も、未だ最後の解釋に到着したるに非ず。其今後の成行は色々に想像せらるべきを得べし。魯西亞にして千八百七十七八年の魯土戦争を反殺せむか、ボスフォラス灣頭の半月旗を撤却するは易々たらむ唯列國の利害にして伯林條約の當時に異ならざる以上は、是事遂

に望むべからざる。土耳其領域の基督教國民が或方法によりて幾多の獨立國民となることは強ちに期待し得べからざるに非ず。而して是等のスラブ國民がバルカン同盟を形成して魯澳の南下に備ふること亦想像し難きに非ず。然れども魯澳果して是を黙過すべきや否やは疑問也。兎に角其の方法の如何は暫く措き、土耳其が歐洲以外に驅逐せらるゝの日は早晚來るべきが如し。東方問題は其時に到て始めて完全に解釋せらるべき也。

### 第六章 極東問題(歐亞の衝突)

#### 一 人種競争として見たる極東問題

土耳其は歐羅巴の亞細亞也、故に東方問題は歐羅巴に於ける歐亞の衝突也。伯林條約が是の問題の解釋を延期するや、歐亞の衝突點は歐洲の東端より亞細亞の東端に移りぬ。極東問題は是れ也。

極東問題は、東方問題の如く、其根本は、人種競争、六百年以降繼續せられたる、チュニアンとアリアンとの人種競争の一節に過ぎざる也。十五世紀以前はチュニアン

ン人種の攻勢時代なりき。東羅馬帝國と回教國との衰頽に乗じて、エルサレムを占領し、七回の十字軍を撃退して遂に君士坦丁を陥落し、其の聖ソファアの塔上に半月旗を樹てたるものは、實にチュニアンの代表者たる土耳其人なりき。十六世紀以後、是の人種の態度は漸く一轉せり。ソリマン帝より伯林條約に到るまでは土耳其衰頽の歴史也。匈牙利は土耳其以外に於てチュニアン人種が歐洲に樹立したる唯一の國家也。然れどもコンスタントの義戦も、地利の束縛を脱する能はず、中

世紀に於けるマジルの遺業、永くアリアン人種の足下に仆れ畢んぬ。

アリアン人は歐羅巴に於てチュニアンを屏息せしめたるのみにては、甘心せざる也。彼等は、權力平均の必要上、暫く土耳其を歐洲の一角に残し置き、漸く歩武を進めてチュニアンの本土たる、東方亞細亞に干渉し初めたり。埃及先づ其の衝に當りて、アラビイバシ國命を懷いて斃れ、英露各々、中央亞細亞を分割し、南洋諸島亦多く血らすしてアリアン人の正朔を奉せり。印度既に久しく起たず、緬甸亦國を爲さず、西力東漸して將に馬來半島の海角を越えむとす、是に於て清國は佛に對して安南を争へども勝たず、暹羅亦是と競はず、湄公河東岸の地安南を併せて遂に佛



領に歸しぬ。魯の中央亞細亞に志を得ざるや、全力を西伯利亞經營に盡し、東半球の上北部を横斷して、黑龍江畔及び樺太連島より、直に支那朝鮮、日本の背後を衝きぬ。是に於てか、チユラニアン人種の最後の國家たる支那朝鮮、日本はアリアン人種の爲に一大包圍攻撃を行はれたるの觀あり。是を人種競争として見たる極東問題の概略と爲す。

## 二 極東問題の現在(日本と魯西亞)

極東問題の原動者は魯西亞西也。魯西亞の野心は那邊にまで擴がれるかは、何人も明言する能はざる所なれども、其の野心あるは明也。是の野心が少くとも、日本海北沿岸の主權者たるに於て、初めて満足せらるべき事も亦明也。是の計畫は、現狀の破壊を須要とす。是に於て、歐亞の衝突遂に免るべからず、而してチユラニアン勢力を代表して是の衝突の局に當り居るものを日本と爲す。

日本が世界歴史中の一國として、目覺めたる時は、即ちチユラニアン人種が歐亞衝突に於ける其の代表者として、彼を要したる時なり。是を以て彼れの天職は極東

平和の維持者たるにあり、極東の平和を維持すとは、即ち極東の現狀を維持する事なり。是を以て極東現狀の破壊を須要とする魯國の南下に對して、おのづから反對の地位を取らざるべからず。『日魯開戦』てふ套語は、是の反對の將來を豫想せるものに外ならず。

然ども將來は暫く言はず、日本は今日まで如何に其の天職を盡し得たりやは過去の事實に屬す。千八百九十四五年に於ける日清戦争は明に是の天職の自覺に本きて戦はれたり。何となれば清國の暴慢に對して朝鮮の獨立を扶翼するは、東洋平和に必要な事と思惟せられたれば也。日本は支那に勝てり、遼東半島は將に割讓せられむとせり、而して是と同時に三國干涉は興りたり。是の干涉の魯國の方寸に出でたるは言ふまでも無し。スラヴ南下の要衝たる遼東が、日本に占領せらるゝは魯にとりては是上も無き不利益なれば也。日本は東洋平和の爲に已むべからずとして遼東を還附せり。彼は是の屈辱をも、尙ほ其の天職の名によりて甘受せり。然れども、東洋平和の爲めに還附せられたる遼東は魯國代つて是を取りぬ。是れと前後して英は威海衛を占め、獨は膠州灣を領しぬ、而して日本は是

れを黙認せり。彼れが是の黙認も亦東洋平和の天職に本きて爲されたる者なる乎。争はざる所に平和あり是れ彼が其天職として維持せむと誓ひたる「平和」なる乎。東海の雲行日に急にして列國の利害亦日に新也。日本は進で朝鮮に據らむ乎。退て對島海峽の領域を守らむ乎。抑も朝鮮を扶翼して歐洲の白耳義たらしめむ乎。這般の事項は恐らくは二十世紀史上半部の一節として記述せらるゝ時あらむ。

## 第七章 歐洲文明の普及

### 一 亞米利加

アリアン人種は、常に兵力に於てのみならず、又其の文明の競争に於て、漸く世界を征服せり。地球上の人種國民一にして足らずと雖も、今世紀に於て歐洲文明の影響を受けざるは無し。

世界の大部分は阿弗利加の内部を除くの外、十九世紀以前に於て既に開拓せられ、英、荷、西、蘭、佛諸邦の人民は各々地球上の各部に植民地を有せしが、今世紀に入り

てより一層迅速なる發達を爲せり。北米合衆國は建國以來、僅に百二十餘年に過ぎずと雖も、其物質上の繁榮は夙に世界の耳目を驚かせり。南米に於ける西班牙の植民地も今世紀の初めに於て獨立せり。其諸國は天然状態の爲に比較的發達せずと雖も、而かも伯刺西帝國のみにも今日既に六千哩以上の鐵道あり。一千八百六十二年には一尺の鐵道も無かりし墨西其は、今日に於ては既に五千哩以上の延長線を有せり。物質的文明の後、に精神的文明來る、是等諸邦の今後の發達想ひ見るべきものあり。若し夫れ阿弗利加内部の探檢に至ては、十九世紀史の永く後世に誇り得べき所也。

### 二 阿弗利加

亞弗利加探檢は十八世紀の末年より絶えず歐洲冒險家の注意する所なりき。マンゴト、バルクが蘇丹探檢より、スピク、及びグラントが、ネクトリア、ニヤンザ湖の命名に至るまで、幾多の勇士は是の事業の爲に盡瘁せり。其の最も著名なるものを、リビングストン及びスタンレーの探檢と爲す。リビングストンは蘇格蘭の一

牧師なりき、一千八百四十年、喜望峯を出發し、死に至るまで三十三年の間南部阿弗利加の蠻地を跋渉せり。其の久しく歸らざるや、紐育ヘラルドはスタンレーに囑托して、搜索の途に上らしむ。スタンレーはウジバと稱する處に於て、病耗けたる一歐人に遇ひ、其のリビンググストンなるを確めぬ。然れども彼はスタンレーの勸告を斥けて歸國することを肯せざりき。スタンレーの後に遣はされたるカメロンは、リビンググストンの從者が其の主人の屍體を擔ひ來るに遇ひて是を倫敦に輸送せり。阿弗利加の内地は是の如き幾多の義人の力によりて首尾好く探検せられぬ。今や『暗黒大陸』は過去の名稱に過ぎざることゝなれり。外部阿弗利加の多くの部分は歐洲文明の平均の程度を現せり。近時南阿共和國が二十萬の英兵に對抗して多く遜色無きが如きは、其の好適例として見るを得む。

### 三 亞細亞

亞細亞に至ては、歐洲文明の勞力の更に著大なるものあり。印度が英吉利の支配の下に驚くべき進歩を爲したるは、茲に言ふまでも無し。其の貿易が毎歲殆ど

一億五千磅に達せるの一事を擧ぐれば即ち足る。西伯利亞も亦魯領に入りてより頓に其面目を改めぬ。一百万方哩の面積は今や黒龍江の水路境域となり、南部西伯利亞の深林は開闢以來初めて斧斤の響を聞き、バイカル湖畔の大鑛坑は方に採掘せられ、一萬哩に近き世界第一の鐵道は將に露國々境より浦鹽斯德、旅順まで北方亞細亞の大廣原を横斷せむとす。中央亞細亞の諸地も亦英露の支配の下に長足の進歩を爲せり。

保守主義の化身と稱せらるゝ支那帝國も、遂に歐洲文明の影響以外に立つ能はざりき。二十年前に於てすら、外國貿易は既に五千萬磅に達し、二十二の開港場に歐洲人の備使せられ居るもの四百四十人ありき。日清戦争以後歐化主義の勢力亦大に加はり、數百人の留學生は歐洲及び日本に派遣せられ、北京大學は英語を用ひつゝあり。今後の趨勢略々察すべきものあらむ。若し夫れ日本が歐洲文明の輸入によりて如何の影響を受けしかば、茲に説く迄も無き事也。

### 四 文明競争の將來

アリアン人の勢力範圍の擴張は、十九世紀の一大事實なること、并に是の擴張には常に文明の征服伴へることは、茲に述べたるが如し。然れども今は歐洲文明、流布の初期に屬す。そが果して如何なる點まで他人種、他國民の文明を改造し得べきかは、今日以後の問題に屬す。鐵道電信は世界を征服するを得べし、然れども國民的精神は容易に外來の勢力に屈せざる也。容易に外來の勢力に屈するものは、是れ其の人類、其の國民の既に精神的に滅亡し居ることを證する也。摸倣時代は畢竟自覺時代に到着する準備期に外ならず。歐洲文明は、今日に於て尙ほ未だ其の世界的征服を誇稱するを得ず。健全なる國民のアリアン人種以外にも存するものあるを覺悟せざるべからず。

## 第八章 學術及び文藝

### 一 學 術

十九世紀の理想たる民主主義の學術の上に現はれたるものを、自然科學と爲す。自然科學の進歩は、即ち十九世紀の學術史也。天文學に於ては、ラグランヂ、ラプラー

スの開きたる新時期は、是の一百年間に於て見擬ふばかりに開發せられたり。海王星を初めとして多くの未知の世界は紹介せられたり。分光器の發明ありてより、天體の性質は手に取る如く説明せらるゝことなれり。星霧説は哲學者の宇宙論よりも信すべきものとなりぬ。物理學は、嘗にエチルギト不滅の大原則によりて、確乎不拔の根底を作りたるのみならず、瓦斯的動力的理論によりて物質内部の構造に關する前人未發の知識を開拓せり。若し夫れ、レントゲン氏のX放散線の如きに至ては、『アラビアンナイト』の奇異譚を背後に瞻若たらしむるに足る。而して是の種の新事實の發見に伴へる社會の物質的進歩は、更に驚くべきものあり。化學の進歩も決して物理學に譲らず。分光解析と週期律とによりて幾多新元素の發見せられたるの一事を以てするも、十九世紀は優に學術上の貢獻に誇るに足らむ。解剖學は、十九世紀の新科學なりと云ふも差支無し。管に細胞に關する研究の發達せるのみならず、キルヒョウ氏が是を醫學に應用して、所謂細胞病理學を組織せるが如きは、斯學の面目を一變したる事實也。科學の進歩は常に相待なり。生物博物地學等に關して茲に言ふまでも無かるべし。一個ダルクンの名を指す

も想半に過ぎむ也。

自然科学の發達は、精神科學の上にも、少からざる影響を及ぼしたり、是れ特に記せざるべからず。哲學者の中には、自然科学の侵略に對して、自家の領域を保ち得べきや、否やを危みたる者すらありき。心理學の如きは先づ以て革命に遭遇せり、從來の唯理的方法は佛蘭西の貴族の如く放逐せられ、數學、生理學、物理學等の平民的方法によりて建設せられむとせり。倫理學に於ても、政治上の民主主義に相當する功利主義は、ベンサム、ミル、スペンセル等の煽揚によりて一舉して斯學の一大勢力となりぬ。革命の反動は學術上にも是れ有り、然れども其の大勢に到ては儼として動かすべからざるものあり。古風なる純理哲學の如きは、たかく國民的僻性として、嗜好の一に加へらるゝこととなりぬ。

自然科学の齎らせる革命は、嘗に哲學のみならず、又宗教、藝術の上にもまで及びぬ。宗教家は分光鏡の試験の結果に其の神學を適はせむが爲に少からず苦心せり。彼は是が爲に原始宗教の最も貴き教義を犠牲に供しぬ。

是の學術上の民主主義は、那邊まで其の革命を續けむとするや。ギリチンの時

代は兎も角も過ぎたるが如し、學術界の専制君主たりし哲學は如何なる點に於て是と折合ふべきや。倫理、藝術、宗教に關する學術は、今や漸く國民的特色を帯び來らむとす、是れ即ち學術界に於ける國民主義の發達也。此の國民主義と彼の民主主義と、學術上に於て如何に調和し、如何に結合せらるべきや、是れ今後の問題也。

## 二 文藝

文學は抽象の理論をたどりて進み得べきものに非ず、其の進歩の前程には具體の理想を要す。其の故に佛蘭西革命をして民主を理想とせしめたる同一の傾向は、十九世紀の文藝をして先づ中世を理想とせしめたりき。中世主義は十八世紀の形式、方便、唯理の主義に對して、自然と自由とを主張したる文學界の革命なり。然れども、中世主義は、一步を進むれば近世主義とならざるを得ず。近世主義は形式に於ては寫實を尙び、内容に於ては個相を重す。自然科学の發達は疑もなく藝術上の理想を變更せり。幾多の詩人は是の過渡期に際して煩悶せり。テニゾンが前後の『ロックスレー・ホール』の如きは其の一好適例ならむ。醇化を輕ずると、個

相の通性を没するとは、共に近代主義の弊なり。

近代主義が國民的もしくは人種的傾向を表示するに及びて、文學には亦國民主義あるを見る。ホイットマンは『ヤンキー』の理想を裡面より描けるもの、キップリングは英吉利の國民精神を表面より現はせるもの、共に傾向文學を代表す。佛のゾラ、魯のトルストイ、北歐のイブセン、亦然り、獨のゾーデルマン、ハウプトマン亦然り。

美術も亦文學と同一の軌道を走りたり。今世紀の初めに於ける歴史畫の著しき發達は、即ち文學上の中世主義に較ぶべきものなりき。自然科学の發達を促がしたる同一の精神は、寫實主義となりて美術の上に現はれ、個相の描寫を以て藝術の極致となすの風起る。佛の印象派は是の傾向の最近の發達を示せり。形似の眞に逼らむことを力めて、其の内想の貧しきを致し、若しくは其力の一部に偏局して、全軀の調和を顧みざるに及ぶや、茲に寫實主義の弊生ず。

私人の贅澤品漸く廢れ、一般人民の感興を共にし得べき公共的美術の漸く發達し來れるは、今世紀の一特徴也。所謂紀念美術と名けらるるもの、如きは是れなり。是と同時に建築興れり。十六世紀以降個々分立したる彫刻繪畫は、茲に再び建築

と結合し、全體の調和の爲に讓歩協力するの傾向を生じ來れり。

美術が文學の如く國民的特性を發現したることも、十九世紀美術の著明なる一現象也。而して是の美術に於ける國民主義の發達を促がしたる有力なる動機が、拿破翁の征服及び其後に來れる國民的自覺にあることも、亦注意すべき事實なり。今日に於ては佛、獨、英、蘭、日、國民的趣味の上に各々其の特殊の様風を具ふ。

政治上に於けるが如く、文藝の上にも、亦極東問題あり。是の問題の解釋に當りつゝあるものは日本人なり。

## 第九章 物質的進歩

### 一 物質的文明の三尊(綿鐵石炭)

今世紀に於ける物質的進歩は、過去二千年の文明を嘲笑せり。幾多の自然力は人類の配下に入り來れり。人は其の馬を使ふが如く、其の蒸汽と電氣とを使用し得ることとなれり。富は驚くべく増加せり、交通の利便は地球の距離を縮めたり。凡そ這般の進歩は三種の物質によりて成されたるを見る、綿鐵石炭、是れ也。

綿は世界の到る處に産す。唯其の完全なる紡績方法の發明せられたるは近年の事に屬す。其の結果として綿花製造物は、一百年前に一シリングの價値を有せしもの、今日は於ては一ペニーを以て購ひ得ることゝなれり。鐵は今日殆どあらゆる器械の唯一要素なるのみならず、近時に於ては船艦家屋の構造に使用せられつゝあり。今日を以て鐵時代なりと謂へるは決して過言に非ず。而して是の鐵をして使用に勝えしむるものは石炭也。十八世紀の中葉まで、鐵礦は不十分ながら薪材によりて熔鑄せられたり。然れども一度び石炭坑の發掘せらるゝや、製鐵事業は頓に勃興し、諸種の工業亦是に伴うて長足の進歩を爲しぬ。一千八百十五年に於ける安全燈の發明、一千八百四十二年に於ける蒸汽鏈の發明、亦何れも製鐵事業に關聯して爲されたり。奈破翁一世と共に十九世紀文明の大立物たる蒸汽機關も亦主として鐵と石炭とによりて運轉し得らるゝ也。

## 二 蒸汽と電氣

十八世紀に於ては水車風車の外に人力を省くべき器械は知られざりき。ワット

は蒸汽力に就いて注意する所ありしが、蒸汽機關として實際に應用せられしは、今世紀の事に屬す、而て最も著大の功力を現はしたるは、交通機關に於ける應用也。一千八百七年、北米ハヅソン河上に於て初めて蒸汽船の運轉は試みられたり。三十八年には首尾好く太西洋横航に使用せられ、爾來幾多の改良を経て今日に至れり。蒸汽車の試用は幾度びも失敗せしが、ジョーヂ・ステュアソンンの盡力によりて、鐵道はリバプール、マンチェスター間に敷設せられ、蒸汽車は成功せり、是れ一千八百二十九年のことにして、實に世界に於ける最初の鐵道たり。四十年には世界鐵道の延長既に早く五千哩に達し、交通機關の面目は漸く一變せり。十九世紀の物質的文明は蒸汽船と蒸汽車とに初まれりと謂はむも不可無し。一千八百六十九年、蘇西地峽の開鑿ありてより東西兩洋の交通は更に容易となりぬ。快速なる汽船を以てすれば七十日に於て、馬耳塞横濱間を往復し得ることゝなれり。

蒸汽機關に次で十九世紀の交通を一變したるものは電氣也。其の最初の應用は、一千八百三十七年、北米合衆國に於て爲されたり。五十一年に於て常設電氣線は初めて英佛二國の間に架設せられ、五十八年には太西洋海底電線の竣功を告げ

ぬ。今日に於ては南阿戦争の状況は翌日の日本新聞紙上に報告せらるゝに至れり。鐵道と電信とは兩々相離るべからざる者也。長線路の鐵道は各停車場に於ける電信の消息無くむば、一刻も其車輛の運轉を許さざる也。

### 三 商業上の影響

鐵道電信が商業上に及ぼせる影響は言ふまでも無き事也。商人は最早や仲立人の蓄積品を購買するの要無く、一片の電信によりて其の生産地より直に是を輸入するを得べし。價格の動搖は確實なる情報によりて漸く少く、商賈は投機事業より漸く離れたり。殊に蘇西地峽の開鑿已降、東西の商業は愈々敏活親密となり、最早や印度の貨物を英國に蓄積するの要無きに至れり。何となれば佛獨、澳伊の輸入商は亞細亞市場と直接の取引を爲し得べければ也。若しニカラグア運河の開鑿にして首尾好く成功せられたらむには、世界の商業交通は茲に第二回の革命に遭遇したりしならむ。

## 第十章 當今の問題

### 一 軍事問題

平和の在る所に軍備あり。十九世紀の平和は、權力平均の別名に外ならず。義務兵役の制度は普魯西より初まりて、重なる國は皆是を用ひたり。是の制度に據れば國民は一定の年齢に達すれば二年若くは三年の間現役に従事し、其後若干年の間は豫備兵となり、豫備兵の期盡くれば國民軍に編入せらる、即ち國民皆兵主義也。海軍の設備も年を追うて完成せられつゝあり。新興國日本の如きすら既に十八萬噸の艦隊を有せり。英獨佛の造船所は各國の注文に忙殺せられむとす。凡そ是等の莫大なる軍備を維持せむが爲に、國民は重税を拂ひ其の生産的事業を抛ちて是に従事せり。平和の價は時に戦争の價よりも貴し。或統計家の説によれば十九世紀後半に於て戦争に死したるもの、二百五十萬人を下らず、是に費したる金額は一百二十億萬弗に過ぐるならむと。吾人の生息する平和の今日、是の如くにして購ひ得たる也。



今日の平和は、權力平均の危険なるカチ合也。而して動もすれば是の平和の破壊せられむとする三地點あり。即ち一はアルサス・ロトリンゲン、二は君士坦丁、三は日本海也。前者は佛蘭西の復讐に對する獨逸の防禦也。中者は魯國南下の野心に對する歐洲列國の牽制也。後者は東洋平和の維持を國是とせる日本に對する魯國の侵略也。平和の現状を擔保するものは、前者にありては三國同盟たり、中者にありては伯林條約たり、而して後者にありては魯國兵備の未完なり。日魯協商は是間の閑談柄に過ぎざるのみ。

## 二 社會問題及勞働問題

社會問題は十九世紀文明の暗面なり。科學の發達、富の増殖、教育の普及、宗教の進化、是等の文明に對する陰影は、社會問題に集注せり。社會問題は十九世紀文明の『必然なる害毒』なり。

民は由らしむべし、知らしむべからず。是れ十八世紀以前に於ける爲政者の主義なりき。十九世紀は民をして知らしめたり。貧民は社會の特權が少數なる富

貴の人に分配せられ居るを認めたり。人權の平等、個人の自由を信奉せる彼等は、是に於て社會組織の根本問題を討ねざるを得ず。或學派は個人が財産を私有するの權利を全然否認せり。其中には或はヘンリー・ジョージの如く、單に土地私有に反對するものあり、或は生産に關する一切の事物は社會全體の共有物たるべしと説く者あり。或は又國家をして單に土地のみならず、製造所、鐵道、交通機關等一切の所有者たらしめ、其政府をして是が管理に任せしむべしと説くものあり。是れ即ち近年獨逸學者の間に行はるゝ國家社會主義なり。

是等は社會主義中の温和なる者也。其の極端なる者に至ては、現今の經濟組織を根本的に破壊せむことを主張する者あり、『財産を私有するは盜賊を働く也』(Property is robbery) とは是輩の套語にして、社會改造の唯一方法は革命にありと説く。

彼等にとりては如何なる種類の政體も、如何なる種類の社會も、唯顛覆の一事あるのみ。無政府黨若くは虛無黨の名稱是より起る。ダイナマイトは彼等の言論也。彼等は是の如くにしてバルセロナの劇場を破壊し、佛蘭西の代議院を破壊し、マデレンの寺院を破壊せり。彼等は是の如くにして魯帝歴山二世を暗殺し、佛の大統

領カールノー、澳の皇后を暗殺し、エリス公を狙撃せり。彼等は秩序と平和との恐るべき敵なりと雖も、其の勢力は深く恐るゝに足らざるもの、如し。

社會主義は勞働問題と最も密接の關係を有す。是の主義の有力なる扶持者は、多く勞働者の間にあれば也。蒸汽機關の發明は工業の事情を一變せり。是より以降備者と被備者との親密なる關係は全く其跡を絶ち、勞働者は其人格を失ひ、單に勞働を供給する活器械として取扱はるゝこと、なれり。是に於て工場主又は資本主に對するの彼等の所爲を決するものは、主従の情誼に非ずして單純なる權利義務の關係となれり。其知見漸く開くるに隨ひ、彼等と富豪者との間の生活状態の懸隔を自覺し初め、茲に漸く其の不平の念を生ずるは、蓋し免れ難き所なるべし。勞働社會の生活状態は、是を百年前に比較して、決して退歩せるものに非ざるべし。唯今世紀は彼等に自己の地置を自覺すべき知識を與へたり、是れ其の不平ある所以なり。今日にありては、勞働者は宛然として、社會主義の無盡藏なる豫備兵なり。社會主義と戰はむと欲するものは、先づ勞働者に安住の地置を與ふるを上策なりとせむ。

### 三 人種問題

人種の二字は、國際植民に關する多くの問題を解釋し得べき鍵鑰也。同人種の先天的結合力と、異人種の先天的反撥力の如何に強大なるものなるかは、十九世紀の歴史に於て十分に證明せられたり。而して人種問題は、常に過去の問題たりしのみならず、又將來の重大なる一問題なり。

獨立自治は十九世紀史上の著明なる現象の一なり、而して獨立自治とは、同人種結合の要求の別語に過ぎず。獨逸と伊太利の統一及び希臘の獨立は、是の要求によりて成されたり。匈牙利、セルビア、ブルガリア、ルマニアの自治も、亦是の要求によりて成されたり。愛蘭土自治案が英國政治界の宿題となれるも、亦是が爲なり。今日にありては、匈牙利と那威とは、其の司配者に對して分離を希望し、ボヘミアも亦其の故國の獨立を回復せむことを謀る。即ち知る、獨逸と伊太利とを統一したる同一の原因は、即ち塊地利、瑞典、英吉利の統一を破壊するの原因なることを。而して皆是れ同異人種離合の先天的要求に外ならず。

今日猶太人が歐洲の到る處に擯斥せらるゝ如く、支那人は北米、南洋の到る處に擯斥せられつゝあり。曾て人類平等の大義の上に其國を立てたる合衆國人は、今や米大陸の土人に少からざる迫害を加へつゝあり。是れ亦人種問題に關する一現象なり。

一言以て是を覆へば、同人種相結合し、異人種相反撥する感情は、人類先天の至性也。東方問題も、極東問題も、南阿、玖馬、比律賓の離叛も、支那人排斥も、南阿戦争も、畢竟是の先天的感情の發動に外ならず。是の如きは過去に於て然るが如く、將來に於ても亦然るべし。人種問題は、二十世紀の繼續問題なり。

#### 四 宗教問題(上) 理論問題

宗教革命以降、宗教の將來は尙ほ未了の問題に屬す。十九世紀文明の發達は宗教の原理を明にしたると同時に、其の存在を擔保せり。

宗教が新文明の發達の爲に、從來有し來りたる幾多の特權と根底とを失ひたるは事實也。宗教的制裁によりて、歴に保全せられたる社會の秩序と道德とは、國家

組織の漸く完備せる十九世紀に於ては、法律制度の力によりて維持せらるゝこととなれり、是れ宗教衰頹の第一原因也。是と同時に、教會に屬したる幾多の特權は國家の手に移り、隨て國家宗教の衝突は避くべからず、而して是の衝突に於て宗教は失敗せり、是れ宗教衰頹の第二原因也。自然科学の進歩は宗教の教へ來りたる幾多の真理の荒誕なることを證明せり、是れ宗教衰頹の第三原因也。是と同時に、教會の信條、經典の解釋は、茲に其の統一を失ひ、自由信仰と高等批評とは、信徒の團結を弱からしめぬ、是れ宗教衰頹の第四原因也。是四個の原因は疑ひもなく、宗教の好望なる將來を預告するものに非ざりしと雖も、而かも是れ宗教盛衰の問題にして、存亡の問題には非ざるなり。

自然科学は開けたり、是の自然科学に本ける哲學的世界觀も亦説かれたり。然れども尙ほ吾人の知識の無限なる要求を満足すること能はざる也。科學哲學の進歩とは、竟畢一の無學より他の無學に移るの謂のみ。吾人を満足せしむる能はざるに至ては、即ち一也、宗教の一脚、茲に於てか立つ。且つ夫れ吾人は知の動物たりと同時に、情の動物也、實在の世界は吾人に取りては、價值の世界也、而して價值と

は情の對境也。科學と哲學とは理窟を教ふれども、價值を與ふる能はず、人生世界の價值に關しては知識は多く爲す所無し。是に於て人はおのづから理外の信仰に緣らざるを得ず、宗教の他の一脚、茲に於てか立つ。畢竟無究を趣ふの心あるところ、其處に宗教無きを得ず。如何なる時代の文明も科學と國家との外に於て宗教の存在を認めざるを得ざるべし。唯是の宗教が如何なる形式に於て現はるか、は自ら別問題に屬す。

### 五 宗教問題(下、實際問題)

宗教に關する實際問題は、大凡四あり。教育對宗教は其一なり、國家對宗教は其二なり、教權主義對自由信仰主義は其三なり、基督教對佛教は其四なり。教育宗教兩者の分離は、今世紀の後半期に至りて一層分明なる事實となれり。北米合衆國にありては、國民教育は殆ど全く僧侶の手より離れたり。歐洲諸國にありては、最下等の教育は多く依然として僧侶の干渉を被れども、稍々高等の教育は漸く宗教の範圍外に獨立するに至れり。英佛二國の國民教育も亦同一の傾向

を現はせり。日本にありては、國民教育の要素としての宗教は、國家の全然認めざる所なり。國家對宗教の問題は、伊太利に於て最も著しく現はれたり。法皇權は伊太利に於ては所謂國家内の國家也、國王と法王との乖離は常に社會の平和を破らむとす。法王問題にして片附けらるゝに非ざれば、伊太利の國本は確定せられたりと謂ふべからず。歐洲諸國は多く國教と稱するものを規定すと雖も、其の特權は多くは言ふに足らず、國民亦必ずしも是を信奉するに非ず、謂はゞ歴史上の殘骸に過ぎざるのみ。

今の基督教に二大派あり、是を保守派と進歩派と稱するも可也、カソリシズムとプロテスタントと別つも可也、教權主義と自由信仰主義と稱する恐らくは更に可ならむ乎。羅馬教會、希臘教會、監督教會等は前者を代表し、諸の虔信派、清教徒、ユニテリアン、ユニバサリスト諸派、何れも後者を代表す。前者は舊信仰の傳統を繼ぎて教會もしくは教會の規定せる信條の絕對權を主張するもの、後者は個人の自由なる信仰を中心として、必ずしも傳承儀禮を重せざるもの、是二主義の對立はあらゆる時代の宗教歴史に其の痕跡を止めたり。遠く法律を主張したるペテロと信

仰を主張したるポロとの衝突も、近くは羅馬教會とルテランとの反對も、何れも是に外ならず。是れ獨り基督教に於て見る所なるのみならず、亦佛教に於ても見る所の事實なり。東西文明の潮流極東に接觸してより、基督教と佛教との衝突は免るべからず、日本は方に是の衝突の一舞臺也。其の將來素より知り難しと雖も、而かも國の内外に執着して漫に相對抗したる兩教徒は、今後或は其信仰の根本問題に立入りて、其態度を一變するの時機あるべきが如し。佛教と基督教とは其由來を異にせる世界の二大宗教也、其の反對には素より深遠なる根據あるべきも、而かも其の根本的信仰の上より相接近すること能はざるべき乎。即ち基督教内の自由信仰は、佛教内の同主義と、佛教内の教權主義者は、基督教内の同主義と各々相結合すること能はざるべき乎。國の内外は是の主義の根本的反對に較ぶれば、寧ろ淺薄なる差別に過ぎざる無き乎。這般の問題を決するは二十世紀の歴史なり。

附言、是總論中の歐羅巴政治史の綱領は、シカゴ大學教授ジャドソン氏の著「十九世紀の歐羅巴」に依れり。是書は一昨年の出版にして、三百數十頁の小書なれど、簡にして盡せり。是の篇頁ふ所あるを以て、茲に同教授に對して謝意を表し、併せて是の書を讀者に紹介す。

(三十三年六月)

### 第二期 雜篇

#### 歴史と人種

歴史的活動は之を一面より見る時は、人種的活動なり。是れ過去三千年の歴史が明に我等に教ふる所に非ずや。是に於てか史學と人種學との關係一層の緊接を加へたるものと謂ふべし。然れども吾等に於て之を見れば、我邦の歴史家は多く未だ這般の觀察に向て充分に重要を措かざるものゝ如し。過去に於ける内外歴史に關する紛々たる著述は、明に之を證せり。豈之れ我邦史家の一大缺點に非ずや。

人種の競争は獨り古代に於てのみならず、人道博愛の進歩せりと稱する所の近世に於ていよゝ其峻鋭を加ふるの事實を見るは、歴史家の大に注意すべきところなり。昔西羅馬の滅亡は希臘羅甸民族とチュートン民族との争なるが如く、又十字軍の遠征は回教徒たるセミチック民族と基督教徒たるアリアン民族との争ひなりしが如く、今日希土の戦争は人種の争にあらずして何ぞ。露西亞が百方力を盡

してボスフォラスの舊都を取らむと擬するもの亦人種の争に非ずして何ぞや佛獨の反目は羅匈民族とネーデルン民族との疾視に非ずや。信仰の自由と人類の平等とを旨義とせし新大陸移住民の子孫が土人を虐待し支那人を排斥し更に日本人を拒絶せんとするの傾向ある是れ亦人種の争に非ずや。フリビンの叛徒が西班牙の強力に抗しスラブ民族が常に圖南の志を紹ぐ是亦人種の争に非ずや。國家の競争は一面より見れば殆ど之れ人種の競争なるの觀あり。人種の研究豈史學當眼の急務に非ずや。若し夫れ人種は何が故に相争ふか。愛なる神を戴きて爾の敵を愛せよと訓へられたる基督教國民が那の如き豺狼の行爲は何によりて然るを得たるなるか。人類的情誼の發達につれて人種の差別の益々其界限を明にしたるの事實は國民の將來に如何の警告を與へたるか如何なるが是れ歴史の光明に照されたる國家究竟の目的なるか。是れ等は人種と關聯して歴史哲學上極めて趣味ある疑問なりとす。

吾等は這般の研究の第一歩として人種の歴史的意義を明にせんことを我邦の史家に勸告す。

(廿年六月)

### 成敗と正義

一物存在の眞意義は其の依て以て物たるを得る所の精神本領の存在にあり。正義を以て立つ所のもの一朝屈辱を忍ばば是れ已に滅亡なり。形骸は性格を作ること能はず。世間名存し實亡へるものあり進化の美名の下に滅亡の事實を掩へるものあり。斯の如くにして一種の幽靈的形式主義は殆ど無限の威力を以て社會に臨むに至る。是に於てかあらゆる不義は雲湧泉湧して其の底止するところを知らざらむとす。

あゝ名目主義の弊なる哉形式主義の禍なる哉。正義の爲に滅亡する國家は滅亡によりて榮ふ。所謂大義親を滅すとは實に是大主義の福音に非ずや。今や其性を失ひて而も其命を全ふするものあり彼等はひいて國家をして精神的死亡を遂げしめむとす。國其性を失はば之れ變化に非ずして滅亡に非ずや。世には死せる宗教あり然れども國民は國家をして死せしむべからず。あゝ形式主義の弊なる哉。

正義の爲に斃るゝは正義と共に生きるなり。世には形骸のみを以て立たざるものあり。個人も國民も己むを得ずむは死して而して後生するの大覺悟大精神無かるべからず。

(卅年八月)

### 社會問題に就きて

社會問題の最後の解釋は遂に教育問題に歸着すべし。貧富の懸隔を以て社會の體制上免るべからざる結果なりとすれば、是の如き自然且正當なる發達を沮濁することは取も直さず社會的體制の破壊を以て目せざるべからず。所謂社會主義の如きは天理人道に背戾せるものなり。

今の時に於て一部論者の妥當なりと誤認せる財産制限の行はれ得べからざることは猶其共産主義の如きなり。若し所謂任俠的社會主義は極めて望ましき事なりと雖も富者の意志を制限するに足るべき強大なる制裁は國家及び道德の現狀に於て素より望み得べきにあらず貧民社會の根本的救濟策は遂に貧民教育の上は落ち來らざるべからず。吾人を以て之を見れば這般の事理素兩言にして決

すべきのみ。然らば則ち如何にして貧民を教育せむか。彼等をして社會の體制を解せしめ自己の位置を改良する永遠の方策は社會制度に對する正當の服従の下に自動的事業に依らざるべからざることを認識せしむるにあり。天賦人權の安想を打破し服従の必ずしも羞耻にあらず強力の遂に權利の所依たる所以に對して正當なる觀念を有せしむるにあり。同時に獨立自依の精神を奨勵し他の好意慈善に依頼するの念慮を断たしむるにあり。是の如くにして漸くにして改善の途に就かば貧民社會の救濟期して待つべきのみ。

(卅年九月)

### 國家的宗教

今日の宗教は國家的となりて國家保護の下に其生存を保たむかもししくは自家本來の平等主義を維持して甘じて滅亡すべきか二者其一を擇ばざるべからず。是傾向は歐羅巴諸國の基督教に於て見るのみならず近くは我邦の佛教歴史に於て最も適切なる事例を認め得べし。

日本の國家及び國教たる神道と調和抱合するとは佛教傳播の須要の制約な

りき。眞言、天台二宗の如きは殊に朝家外護の下に貴族的性質を帯び來り、其大乘佛教の本旨の如きは夙に堙滅し了りたりき。夫の淨土眞宗は是貴族的宗教の箱束を打破し、平民の爲に平等無差別の救濟門を開きたるもの、而かも其歴史は漸く當初の目的と離叛し、國體を逢迎し、外護を喜び、貴顯に阿附するに至り、是傾向は今日に至りて一層較著となれり。是の如きは淨土眞宗の腐敗なるに相違なしと雖も、抑も亦自家の存在及び昌榮を支撐せむが爲に已むを得ざるの條件なりしなり。佛教の爲に其外護を受くるを難するものは、やがて佛教の爲に其衰弱を企圖するものなり。國家と宗教との歴史的關係を知るものは、宗教外護の必要を認めざるべからず。

然れども外護によりて佛陀教が其の本來の面目を失ふべきは猶基督教に異ならず。若し夫れ神道は日本國家の歴史と密接の關係を有するもの、國家保護の下に國家の發達と共に其昌榮を増進し來るべきは自然の勢なりとす。(三十年九月)

### 基督教徒の逢迎主義

今を去る三月前、『日本主義』は左の如き短評を掲げき

「宗教は國家的なるべからず、國民的なるべからず、眞正の宗教は萬人普通世界的ならざるべからず」とは實に是一月前までの宗教家の語調なりしなり。然るに今日は忽ち一變して折衷的となり、曾て其眼中に匿かざりし所の「國家」「國民」を言ふに至らむとせり。これ何の原因する所ぞ、他無し、唯吾人の「日本主義」の新運動の強固遠慮なる大組織と、其嚴肅なる國家的教理の敵すべからざる事實と論理とを傳へ聞き、未だ其主義の發達せられざるに先ち、衷心恐懼の念を起し、他日國家國民主義に改説し適合せむの準備として、今日より折衷的語調を取り來れるものに外ならず。實に吾人の主義の風説世間に擴まるや、今まで國家を言はざりし所の宗教家等、忽ちにして國家を言ふに至り、今まで國民を輕視したりし宗教家等、忽ちにして國民性を考ふるに至れり。

「日本主義」第二號「宗教家の語勢忽然一變」

吾人は茲に記者が言ふが如く、其動機の『日本主義』の唱道を恐れてなりしや否やを審にする遑無しと雖も、最近の半年に於て基督教徒の語調に著しき變化ありしことは事實なり。即ち非國家、非國民をすら唱ふるを憚らざりし基督教徒が、國性民情を考ふるに至りしは争ふべからざるの事實なり。吾人は之を名けて基督教



徒の逢迎主義と云ふ。

逢迎主義必ずしも不可なるに非ず、否宗教存在の第一の制約なり。チロに劣らざる暴帝コンスタンチヌスを聖人と崇めゴートの蠻族アラリックを救済者と拜したる基督教が、今日尙ほ其殘命を列國樹立の間に保ち得る所以のものは、實に是逢迎主義あるが爲めならずや。佛教の逢迎主義は聖德太子の四天王寺となり、藤原氏の興福寺となり、本地垂迹説となり、神佛一體説となり、在家外護の願となり、皇佛大同團となれり。逢迎主義豈之れ宗教繁昌の第一要件に非ずや。

蓋し宗教の物たる素靜力的自ら社會進化の活力と爲ること能はず。隨て社會全般の事物に亘りて其實勢力を把持する國家の進歩に對しては常に受動的態度を取らざるを得ず。偶々進で實際的勢力を占斷せむと欲するも現世の中に根柢無きを以て幾もならずして失敗するを免れず。中世に於ける法王權の如きは、羅馬帝國崩解の後を承けて、西歐諸州の精神的中心となりしを以て其持續の歲時比較的に久しきを得たりきと雖も、是れはた近世國家的意識の明瞭となりゆくに隨れて、今や徒に空名を擁するのみ。今の世は敬虔なるビスマルクをして、現世を支

配するものは國家のみ、宗教の關する所にあらずと言はしめたる時代なり(ピクス演説集)逢迎主義豈之れ宗教現下の急務に非ずや。吾人は本邦の基督教徒が今にして初めて之を覺りたるを以て、寧ろ其の時勢に後れたるを想ふ。

逢迎は宗教の俗化なり、衰亡なり、墮落なり。宗教の變遷は素生物の進化に比擬し得べき者に非ず、吾人は夫の逢迎主義によりて僅に其の奄々たる氣息を保つ今の宗教の状態を見て轉々惻怛の情に勝えざるなり。遮莫今の基督教徒は如何に時勢を逢迎せむとしたりしか。吾人をして其一二の事例を瞥見せしめよ。如何にして日本の歴史と基督教との連絡を成就せむか、之れ逢迎主義の第一問題なり。

一基督教徒は六合雜誌(百七)に之を論じて曰く、  
歐米に於て基督教が社會の大勢力たる所以のものは其國の歴史と連絡して相離すべからざればなり。歐米諸國が由りて以て立つ所の根柢は基督教に關係無きはなし。然るに我日本國の基督教は宣傳日尙ほ淺きに因るとは云へ、未だ吾國の歴史と連絡を全うする事能はず其盛衰は日本國家の盛衰と密も關係する所無し。苟も世界の趨勢と列國の交際とに鑑むるものは我日本が基督教を等閑視することの國家の發達に甚だ不利益の事たるを覺知するに難からざ

るべし。

日本歴史と基督教とは連絡せられざるべからずとは、一基督教徒の言としては素より當に然るべし。然れども吾人は其の何故に連絡せられざるべからざるかを問はむと欲す。國民性は外物攝取の力に於て一定の限界を有す。其發達の制約及び目的に於ても亦異なる所無きを得ず。同一の文物を以て萬邦の民族に強ひむとするも徒に其自然の進歩を沮遏するに過ぎざらむのみ。三大洲を蹂躪せしサラセン民族の遺蹤に幾何の回教徒を留めしや、黑人は手にコランを取りて而して拜物教を捨てず、佛陀は我邦に於て神祇として崇拜せられたり。吾人は何故に吾人の國民性に反きても異邦の宗教を信せざるべからざるか。基督教徒はアルヤ人種の佛教がツラン人種の支那、日本に行はれたるを以て、宗教の感化は人種の差別を超越すとす。殊に知らず支那、日本の佛教は又印度の佛教に非ざるを。若し夫れ世界の太勢に處し、列國の交際に資するの故を以て基督教の傳播を必とするは、是れ已に宗教問題を超越して政治問題に入りたるなり。宗教の根柢は人心の感化に存す、内より啓發すべくして外より強迫すべからず、是精靈的事業を以て政

策の使僕となす、之れ宗教の俗化衰亡墮落に非ずや。逢迎主義の弊茲に到る又免るべからざるの數なるか。六合雜誌の論者は更に其言を續け、基督教と日本歴史との連結の方法を述べて曰く、

- (一) 基督教は進で政治的要素となるを要す。
- (二) 社會的運動の最要素と爲るべし。
- (三) 外交上の勢力と爲るを要す。

あゝ基督教徒は三十年の宣傳に國民性の遂に動かすべからざるを見て、其立脚地を政治外交の上に求めむと欲するか。其志や善し而かも一宗教が政治社會の要素となり、外交上の勢力とならむが爲には、國民性情の中に如何に深遠なる根柢を有せざるべからざるかを悟らず、徒に自家勢力の極衰を回復せむが爲に、苦楚煩悶するの狀寧ろ憫殺すべし。

實にや最近十年間に於ける基督教の衰頹は、よその觀る目も哀れなり。一度、國粹保存論に頓挫し、再び教育宗教衝突論に挫折し、三たび日清戦争後に於ける國民的意識の覺醒を代表せる吾人の日本主義に打撃せられ、今や方に其極衰の期に

瀕せり。從來同教事業中の有力者たりし傳道學校は、勢日に非にして學生の數實に寥寥。其先達先覺の士と稱せらるゝもの、亦往々教班を脱して顧みず、内にありては非基督教信徒にして其最大傳道校に長たるものあり、嘗て聖書の譯者として高名なりし人は、今や貨殖の外其他を知らざるあり、彼等は山口師範學校に於ける彼等の所謂迫害に對して抗議するの勇氣だも存せざるなり。彼等が金科玉條と頼みたる世界主義は今や弊履の如く委棄せられ、中には『世界主義路傍に迷ふ』と嘆するものあり。基督教雜誌『真理』の記者は是衰勢挽回策を以て教育事業に存すとなし、茲に其逢迎主義を説きて曰く、

政府が設置せる學校は下幼稚園より上大學校に至るまで組織全く整頓したり。之れ國家の慶事也。而して是國民未成の頭腦を左右し得る學校の空氣が排基督教の精神に富みたりとせば、是れ基督教の傳道に任する當局者が大に考ふべき事に非ずや。是時に當りて吾人傳道者は教育社會を他の蠶食に放任せずして自ら爲す所あらざるべからず、即ち許多の幼稚園小學校中學校を設立すべし。斯くせば少年子弟の腦髓に排基督教の精神を養成せざらむを得む。次で基督教徒も亦教育社會に入りて事を企つべし。若し主義を同するもの多數を制するに至らば排基督教の火焔は多く上ぼるを得ずして、止むを得む。

之れ何たる横着なる意見ぞや。現今教育社會に於ける排基督教の精神は教育勅語に本ける國家教育主義の必然の結果なり。教育と宗教との衝突は井上博士と高橋某との爭論と共に終を告げたる者に非ず、基督教が其中心教義を改良し非世界的、非個人的、非人類平等的となるに非ざれば、其衝突の存在は依然として今尙ほ昔の如し。基督教徒の中に『偶然に生れたる土地の如きは其故郷となすに足らず』とする者ある間は、『支那の爲に日本と戦ふも、日本の爲に支那と戦ふも、吾に取りては一のみ』と揚言するものある間は、日本人が實際に信仰實踐し得る所の天皇の神聖と國家の至上を措て、宇宙間の至上至貴なるものとして、神、耶穌、羅馬法王、希臘教主を崇拜する間は、基督教豈教育社會に隻脚をだも投じ得べしや。夫れ是の如き明白なる矛盾を顧みずして、國家教育に其根柢を植えむと擬す、何物の横着か之に如かむや。記者は逢迎の志ありて未だ其道を知らざるものなり。逢迎は阿附媚悅叩頭を以て成し得べきものに非ず。必や先づ我國體と宗教的信仰との根本的調和を謀らざるべからず。徒らに外部の事情によりて一時を塗抹するは、永遠の策に非ざるなり。是に於てか基督教徒の中最も先見あり學識あ

るものは更に其逢迎主義に一步を進め、日本、建國の精神及び理想に鑑みて、皇室及び神道の爲に、基督教の教義を附會せり。一基督教牧師が六合雜誌(百九)に於て、  
 今や我帝國は、建國以來の大理想たる開國進取の大理想を發揚して、更に獨立自治の大本を完  
 うせむと欲す。是時に當て區々陳腐なる富國強兵論を以て國民を感奮せしめむと欲す亦た  
 陋ならずや。吾人は唯大に日本人が開國以來大に抱懐せる敬天の精神を覺醒して人類の天  
 父たる活ける上帝の存在を深く意識して、その恩祐の下に國を爲し民を爲し我皇帝を中心と  
 して一國の神民、茲に極東に勃興する者なるを自ら覺らむことを欲す。

と論じたるは、即ち是傾向を表はせるものなり。然れども拙なるかな、是逢迎や。論者は果して日本人が開國以來常に抱懐する所の敬天の精神の果して何物なるかを知れりや。是の如き精神の覺醒が果して吾人を論者の注文通りに人類の天父たる基督教的上帝の存在の意識に導くべきものなりや。あはれ論者の逢迎に急なるや、一段の歴史的考察を遺却したり。然れども是要點の遺却こそ論者の爲には幸なりしなれ、彼は之が爲に一時の妄信によりて、獨り自から媚悅し得たればなり。

日本國民の敬天の思想は、祖先教に出で、國家の中心、臣民の宗家たる皇室の上  
 に萃まる。吾人の依つて以て國を爲し民を爲し、一國の神民として極東に勃興す  
 るの運命を有するを得たるは、皇祖皇宗の丕圖に本く。三千年の歴史は是意識を  
 結成して牢として抜くべからず、吾人の體認すべき理想は是に外ならざる也。夫  
 の所謂上帝なるもの、吾人と何の關する所ぞ。『開國以來の敬天の精神を覺醒す』  
 と論せる六合雜誌の論者は、國民性の自然の發展より、宗教を演繹せむと欲す、是點  
 に於ては他の凡々たる迷信者流に一步を進めたり、然れども其信仰の内容を遺却  
 するに及びて、折角の逢迎も水泡に歸せざるを得ざりき。

近頃公教の唱道者は、是逢迎主義を繼續し、更に百歩を進めて直に大膽にも基  
 督教と神道との抱合一致を絶叫せり。論者は素基督教の先醒にして、神道の熱心  
 なる研究者を以て知らる。以爲らく神道は其本來の有神論を研磨して、國家の基  
 礎を鞏固にし、帝室の尊嚴を擁護し、臣民の品性を高尚ならしむべき天職を有する  
 ものなり。是天職の自覺は山崎をして天御中主神を推尊せしめ、本居平田をして  
 産靈神を崇敬せしめ、黒住をして天照太神の御開運を祈願せしめたり。之れ新日

るものは、更に其逢迎主義に一步を進め、日本、建國の精神及び理想に鑑みて、皇室及び神道の爲に、基督教の教義を附會せり。一基督教牧師が六合雜誌(百九)に於て、

今や我帝國は、建國以來の大理想たる開國進取の大理想を發揚して更に獨立自治の大本を完うせむと欲す。是時に當て區々陳腐なる富國強兵論を以て國民を感奮せしめむと欲す亦た陋ならずや。吾人は唯大に日本人が開國以來大に抱懐せる敬天の精神を覺醒して人類の天父たる活ける上帝の存在を深く意識して、その恩祐の下に國を爲し民を爲し我皇帝を中心として一國の神民、茲に極東に勃興する者なるを自ら覺らむことを欲す。

と論じたるは、即ち是傾向を表はせるものなり。然れども拙なるかな、是逢迎や。論者は果して日本人が開國以來常に抱懐する所の敬天の精神の果して何物なるかを知れりや。是の如き精神の覺醒が果して吾人を(論者の注文通りに)人類の天父たる基督教的上帝の存在の意識に導くべきものなりや。あはれ、論者の逢迎に急なるや、一段の歴史的考察を遺却したり。然れども是要點の遺却こそ論者の爲には幸なりしなれ、彼は之が爲に一時の妄信によりて、獨り自から媚悦し得たればなり。

日本國民の敬天の思想は、祖先教に出で、國家の中心、臣民の宗家たる皇室の上に萃まる。吾人の依つて以て國を爲し民を爲し、一國の神民として極東に勃興するの運命を有するを得たるは、皇祖皇宗の丕圖に本く。三千年の歴史は是意識を結成して牢として抜くべからず、吾人の體認すべき理想は是に外ならざる也。夫の所謂上帝なるもの、吾人と何の關する所ぞ。『開國以來の敬天の精神を覺醒す』と論せる六合雜誌の論者は、國民性の自然の發展より、宗教を演繹せむと欲す。是點に於ては他の凡々たる迷信者流に一步を進めたり、然れども其信仰の内容を遺却するに及びて、折角の逢迎も水泡に歸せざるを得ざりき。

近頃公父教の唱道者は、是逢迎主義を繼續し、更に百歩を進めて直に大膽にも基督教と神道との抱合一致を絶叫せり。論者は素基督教の先醒にして、神道の熱心なる研究者を以て知らる。以爲らく神道は其本來の有神論を研磨して、國家の基礎を鞏固にし、帝室の尊嚴を擁護し、臣民の品性を高尚ならしむべき天職を有するものなり。是天職の自覺は山崎をして天御中主神を推尊せしめ、本居平田をして産靈神を崇敬せしめ、黒住をして天照太神の御開運を祈願せしめたり。之れ新日

本の鬱勃たる大精神に指導せられて雄大なる一宗教を生出すの已むを得ざるに至りしなり。然れども山崎本居平田黒住去りては大精神亦逝きぬ。今や日本は一大新天地を開き新日本の大理想を造らむとす之れ須らく世界的大理想によりて養成せられざるべからず。世界的大理想とは何ぞ即ち公父教なり」と。論者は公父教一編を雑誌『宗教』(七十)に掲げて是意義を詳密に説明せり。論者の説頗る壯快なり。蓋し猶太國教の基督教に移りたる事蹟を以て我邦に比しエホバを以て天照太神若しくは天御中主神に基督教を以て所謂公父教に擬するものゝ如し。宗教の方便主義逢迎主義も亦茲に至て極まれる哉。

論者は如何に國民の宗教的意識を檢覈したりしか。論者は必ずや平田黒住の神道は如何なる事情の下に生起したりしかを研究せしなるべし。是時時勢の平和的迫害に對する國學者の反抗を外にして幾何の一宗教的大精神が國民の間に磅礴せりしとするか。人死して教又傳らず是一事已に其消息を傳ふるに足る。吾人は今日平田黒住の後を承けたる一宗教的大精神の暗流を國民の間に認むる能はず。日本主義は神道の復興と稱せらる然れども現に自ら宗教に非ず實踐道

徳の主義なりと宣言せるに非ずや。大日本の大精神大理想は明に國祖崇敬國家至上の主義の中に含蓄せらるると宣言せるもの豈獨り吾人の日本主義のみならずや宗教者を除て忠誠なる國民の亦た等しく認識する所なり。是の時に當て論者の所謂公父教なるもの將た何の爲す所ぞ。論者は二三學者の説を附會して神道を宗教視せり。其形式のみを見れば或は宗教の形を備へたりと云ふを得む其作用に到ては現世實際の道義を外にして別に所謂宗教的と稱すべきものを見ず。之れ『日本主義』が神道を以て主義となし宗教となさざる所以なり。公父教の論者は國民的意識の如何を顧みず單に外邦宗教の發達史を採りて直に本邦宗教の進程に比擬せんとす。寧ろ小兒の見に非ずや。

且夫れ論者は徹頭徹尾功利方便の點より公父教を説く。之れ最も笑ふべきなり。一世を風化するの宗教は先づ絶対眞理として承認せられざるべからず。其眞偽是非の理性的問題を全然抛却し去りて偏に功利方便を説く商豎匹夫を欺くべきも聰明なる國民を奈何せんや。耶穌は方便として其基督教を説かざりき實に其救済安立の教義を訓ふるに先ちて宇宙人世の絶対的眞理として之を宣傳せ

りき。誰か基督教を以て没道理的はた感情的となすや。今日より之を見れば所詮一個の迷信に過ぎずと雖も、歴史上其勢力の根據は實に其真理たるの點に存せるなり。スコラ學派以來、科學哲學の進歩に對して、不斷の調攝を懈らざるは實に是理性的根柢の確立を其存在の要義なりと認識したるが爲ならずや。今日苟も宗教界に一新旗幟を翻さむと欲するものは先づ之を科學的はた哲學的真理なりとして説かざるべからず。夫れ之を爲さず、漫然其利益便功を口にするものは十九世紀の文明を侮辱せるものなり。誰か是の如き昧者の言に聽かむや。公父教や、其規模の壯大は則ち快とすべしと雖も、逢迎世義としては最も拙劣なるを免れず。

今日基督教の國體及び國民性に對する逢迎主義は公父教に到りて、一と先づ其終局を告げたるものゝ如し。吾人は基督教徒が今後如何の逢迎主義を構造すべきかを知らずと雖も、愈々出で、愈々拙なるべきは、吾人之を預測するに難からざる也。

(三十年十月稿)

士の徳操

吾人宋史を讀む毎に、深く歐陽修の人と爲りを慕ふ。常に以爲らく、士の進退當に是の如くなるべしと。吁、吾人今にして本邦士風の衰頹を嘆するもの抑々亦又遅かるべき乎。

知識の高遠彼が如く、學術の精微彼が如きもの、世間何んぞ限らむ。獨り其忠厚の器質を挾みて、終始其徳に反かざるに到りては、歐陽文忠公は眞に一代の國士なる哉。上下四十年、事多く志と違ひ、道遂に世に行はれず、具さに世路の崎嶇を歴、速困躓幾度びか、流竄の禍に罹るも、剛正の節果敢の氣死に到るまで衰へず、堅く公議の是非を執り、凛乎として動かず、勢利前に誘ひ、斧鉞後に迫るも、從容として大義に就けり。箕山の側、潁水の涘、英魄靈氣、永く千秋の龜鑑となる、亦宜なる哉。王介甫は公の政敵、曾て「一國に在りては、則ち一國を亂し、天下にありては、則ち天下を亂す」と罵りたるもの、而かも公の死を弔して嘆じて曰く、「公や復び見るべからず我れ誰と與にか歸せむ」と。吁、一世の國士人を化する亦是の如きものある乎。

吁吾人今にして本邦士風の衰頹を歎ずるも、抑々亦遅かるべき乎。今の入成敗を重じて節義を軽ず、其の立つや則ち名利其の行ふや則ち逢迎所謂人物の高下は其の志す所の名利の大小にあり。夫の徳を二三にし、主義を賣り良心を賣り朋友故舊を賣りて而して一身の虚榮を買ふもの、今の所謂士人の常に非ずや。白日堂々の儀容を持して天下に巷議するもの、安ぞ知らむ暮夜朱門を叩いて媚悦哀を乞ひ十年清士を以て世に嚮慕せられたるもの、誰か一朝にして權勢の奴隸となるを思はむや。憫むべきものは朴直なる興衆なるかな。彼等の瞻依戴拜する所の人、は只彼等の肩に憑りて榮達の地に達するを目的とす、其手一度び是地に觸るれば、士足直に彼等の肩を蹴倒し、踴躍して是に就き、顧みて手を額にして興衆の呆然たるを笑はむ。今の士人は才を負ひて徳を稱せず、却て成敗を以て是非を辨せむと欲す、是を以て千計萬策、要は利慾を出でず。昔者歐公、功名成就せりと雖も居らずして去る。國家を以て志となすもの、這般の氣宇、私情の外に轄然たるもの無かるべからざる也。

吁吾人は尙ほ己れを欺きたる者の言に聴かざるべからざるか。彼等の筆は名利の筆なり、主義によりて動かざる也。既に欺かれたる吾人は更に其詐欺を再びせむと欲する者を惡むべからざるか。そも、社會の制裁なるものは斯かる場合に用ふべきものに非ざるか。

(三十年十一月)

社會的制裁の薄弱

吾人は今日社會的制裁の薄弱なるを觀じて、本邦士風の衰頹其の來るところ一日に非ざるを懷ふ。今の人よ、徒に風俗の輕薄人情の澆季を歎ずるを已めよ。吾人はむしろ是の一般道德の棄廢を以て、むしろ吾人の享受すべき當然の應報なりと思惟す。

社會的道德の維持は獨り個人に委ぬべからず、社會亦自ら監視督勵の責に任せざるべからざる也。我社會は從來果して是責務を完ふしたるか、積極的督勵は暫く言はずとするも、果して能く消極的監視をだに成し遂げたりし乎。あはれ、是監視の怠慢、即ち社會的制裁の薄弱は、道德衰頹の最大原因には非ざりし乎。(實例)

健全なる社會は猶ほ健全なる人體の如し、自己の生存組織に妨害あるものは必



す是を排斥すること猶ほ過て腐敗物を收容したる時健全なる消化器の之を吐海するが如し。偷合苟容は社會道德の荒廢を意味す。夫の一度社會の外に放逐し、後ち故なくして是を收容するものは何ぞ再び吐瀉物を食ふに異ならむ。是一事社會組織の不健全を表出して極めて明瞭なるものに非ずや。是を以て吾人は謂ふ。士風の頹廢風俗の輕薄人情の澆季は其の由て來る所一日に非ず。社會的制裁の薄弱實に是が最大原因の一なりと。

(卅年十一月)

無題 (一)

人心は偏し易し其境遇天性おのづから彼をして等々不如の大觀に勝えざらしむ。學藝の士に於て殊に然りとす。

夫の書の外に知識なく圖書館の外に世界なく同臭交友の外に人間なきは所謂學者の自ら高しとする所以にあらずや。抑々自己の人たるは何に困りて然る。學者にして始めて人たるか將た人にして初めて學者たるか。彼等は未だ曾て這般の問題に想到せざる也。

彼等は自ら觀察秤量の公平を誇る。而かも己を揚げて他を抑へ昂然自負人を見ること土芥の如きは常に彼等に見る所是れ古今の通弊なり。ポープとスキフトとの通信には一切世人を怪物と罵倒しゲーテ、シルレルの書翰亦社會を怪物の巢窟と嘲笑せり。今夫れ大自然の眼より是等の數々たる小量を下瞰せば其總括旦夕の智見を狭み謂はれなく巻て他を凌蔑するの輩は如何に見ゆべきや。所謂學いよ／＼深くして智いよ／＼淺きもの眞に憫殺すべきなり。

其地と位とによりて人各々其分を殊にす是れ天の命なり人の分なり。而かも萬千不同の中おのづから融會和合する所なくむば人生社會國家の意義殆ど解すべからざる也。今の紛々たる小學者は書の外にも知識あり圖書館の外にも世界あり同臭交友の外にも人間あることを覺らざるべからず。

(卅年十二月)

無題 (二)

『酒と女と歌とを好まざるものは終生呆癡たらむのみ』(Ver nicht liebt Wein, Weib, und Gesang, der bleibt ein Narr sein Leben lang.) 若し今の學究にして是言が宗教革命の大

勇者ル、テルの口に出でしを聞かば、或は其意外なるに驚かむ。其意外に驚けるものは更に退て三思せよ、吾人は寧ろ今の少量切々たる村學究をして是意氣の一分を得せしめむことを欲す。吾人豈彼等に向て酒と女と歌とを奨むるものならむや。

智ありて意なきもの其弊や、情ありて意なきもの其弊や、靡。現下の青年學生の多くは屈に非ずむば則ち靡のみ。今の精神界の沈滞に一振攝を加へむものは夫れたい意育なるかな。

(卅年十二月)

### 人道何處にある

人道何處にある。膠洲灣は二次の宣教師殺されたるが爲に暴力を以て占領せられたるに非ずや。

東洋の平和は二人の宣教師よりも輕しとするか。教に仆れたるものは天國の恢復に向て其血を濺ぎたることを感謝せざるべからず。獨逸政府は是に對して干戈を動かさむとす、是れ果して爾右の頬を打たれば宜しく左の頬を向けよと。

の教を擴めむが爲めの行爲なる乎。

今や宗教は政略の奴隸なり、方便なり、昔し所謂切支丹が自ら施したる所のもの、今政府に於て是を爲す。

是の如き國家の保護の下に傳教せざるべからざる基督教徒は憫むべきかな。心あるものは耻ぢよ、清國皇帝の勅額を得て會堂に掲げむが爲には其の携へたる聖書は血に塗れざるべからず。基督教徒は事是に到りて猶人道の所在を吾人に告げ得べき乎。

(卅年十二月)

### 私立學校を論して當局者の注意を促す

私立學校撲滅を主張するものあり。吾人俄に是に左袒すること能はず。然れども我邦現時の私立學校の存廢可否に就ては一言せざるべからざるものあり。

人動もすれば偏に官立學校の充全を説きて私立學校の特長を思はず、然れども兩者の利弊一律にして斷すべからざる者あり。國費を以て設備する官立學校は其教師校舎器械の完備に於て遙に私立を凌ぐ。是れ争ふべからず。然れども其

弊や形式に流れ文飾に陥る。夫の教職に居るもの動もすれば一般行政官吏の態度を以て學生に臨み約するに法を以てし官吏の權能に據りて威福を弄す。眞に教育の熱誠を瀝して育英の志を樂むものおのづから少し。是を以て校舎器械の充實は洵に嘉すべしと雖ども往々其學生をして無氣力無精神の死學者たらしむ。是れ官立學校の通弊なり。蓋し既に教育を以て國家事業となすおのづから一私一己の方針主義によりて動くを得ずおのづから人を造り英を育つる上に於ても亦其理想一面に偏倚するを容さず。是に於てか規模の廣大は個人的特性の發達を妨げ所謂凡人教育の弊に陥る。亦已むを得ざるの事情ありと謂ふべし。

私立學校は則ち然らざる也。教育者は一定の理想一定の主義に據り自己の理想的人物を造るに於て毫も拘束せらるゝ事なし。實に是の如き主義理想を標示して同好の士を天下に求め以て其懷抱を實現せむとするは私立學校成立の本來の主腦たらざるべからず。是を以て所謂主義教育と人物感化とは私立學校に於て初めて行はるゝことを得べし。官立學校に於ける形式教育の缺陷は是に依りて少補充せらるべく私立學校の眞價亦實に是に存す。

私立學校は私人の財によりて立つもの其教官校舎器械等百般の設備は素より官立學校の如く完全なるを望むべからざる也。然れども是の不完全なる設備は一定の主義によりて活動し其校主若しくは教師は是主義の爲に事に教育に従ふ。而して是に入るものは相互の默契によりて是主義の爲に盡さむことを誓ふ。是を以て造られたる人物は主義の人物なり一定の主義によりて鼓吹せられ堅強なる意志と精神とを抱持するの人物也。社會は形式的器械的の人物と共に斯かる主義意志精神の人物に待つ所多し。是の如き人物を養成するは私立學校の特長なり。

吾人は官立私立の間に褒貶の意を寓するものに非ず。其の双々相對峙して其特色を保つことの社會國家の爲に有益なるを信すればなり。然れども人若し我邦今日の私立學校に就きて其可否を問ふものあらば吾人俄に其存在を是認すること能はず。何を以てか是を言ふ。

今の私立學校を見よ、厩に其二を除きては何處に主義に據りて立てるものありや。滔々として是れ射利私益の爲にせられたるものに非ずや。人物教育は生

徒の月謝を以て維持する學校に行はるべからざるなり。精神理想の教育は生徒の顰笑に憂懼するものゝ爲し能はざる所なり。其創立者は育英を樂むものに非ず。主義に盡すものに非ず。唯彼等が小間物屋煙草屋と爲らざる代りに學校屋と爲りたるものゝみ。彼等は一種の商業を以て教育を見る、一切外面上の飾表は皆是れ射利私益の爲のみ。彼等は已に商人として教員を雇聘す、來るもの亦商人のみ學を賣りて財に換ふれば則ち足れりとす。茲に學ぶもの亦顧客の商店に對するが如し、得たる所の知識は月謝によりて購求したるものと思惟す。あゝ師弟の情誼金錢によりて厚薄あるべき學校に向て主義理想の人物を養成せむことを要む猶ほ木に縁りて魚を求むるが如き也。私立學校は本來是の如くあるべき者に非ず、而かも今の私立學校は其一二を省けば概ね皆是れのみ。

是弊の由て來る所以を尋ぬれば、吾人は二個の原因を見る。主義教育の爲に私學を創始すべき適當の人物無きこと、及び基本金の缺乏是れなり。

現今の私立學校にして、一個の人物を中心として存在せるもの果して幾何ありや。曾て同人社は中村敬宇氏を中心として起りたりき、而して今や其人亡くして

校亦滅びたるに非ずや。曾て同志社は新島襄氏を中心として起りたりき、而かも其主義は人と共に亡び、兎に角にも一種の精神的教育によりて本邦の新文明に多少の寄與を爲したる校舎は、今や將に京都帝國大學の一豫備校たらむとすと云ふに非ずや。福澤論吉氏を中心とせる慶應義塾は、今や學風の紊亂殆ど拾收すべからず。押川方義氏を中心とせる東北學院亦將に昔日の面目を失却せむとす。看來れば大私立學校の將來一に何ぞ落實たる。是の如きは畢竟是種の教育の性質として、其創立者の人物に待つ所多きが爲に非ずや。

設令ひ人物其當を得ずとするも、十分の資金を投じて育英を樂むの篤志者あらむか、良し吾人の所謂る主義教育の目的は十分に到達し得られざるまでも、尙ほ一個の學校として官立と雁行して其効果を收め得べし。然れども、觀するに今の私立學校中是準備あるもの果して幾何あるべきか。彼等は唯官立學校に入るの資格無き青年の爲に門戸を開くもの、是が學生たるもの亦好で是に入るに非ず、官立學校に入る能はざるが故に、已むを得ざるに出づるのみ。是に於てか、學生の月謝は、當に學校の維持費を辨するのみならず、創立者に對して相當の利益を供せざ

るべからず。圖書匱乏し、器械充實せず、師弟相親まず、學校と學生と損得によりて離合す、亦已むを得ざる也。あはれ是の如くにして如何なる種類の教育か果して能く成功し得らるべきぞ。人物ありて而して資金裕ならむ乎、是れ私立學校の上乗なるもの也。而かも圖書器械、校舍の不備にも係らず、私立學校が尙ほ儼として其品位と効果とを保ち得る所以のものは、實に人物あるが爲に非ずや。人物と共に資金無きものは、是の如きは寧ろ害ありて益なし。國家教育の上より見る時は、當局者は須らく相當の制裁を加へざるべからず。

以上論じ來れば、吾人は對私立學校策に就いて一言當局者の注意を請はざるべからざる者あり。潜に憂ふ、今日の滔々たる私立學校は資格調査上果して適當なるものなるか、果して然らば、其所謂資格調査の標準、其物は國家教育主義より打算し來りて、果して適當を稱すべきものなるか。吾人必ずしも教育を以て國家專有の事業となすを主張せじ。民間有志の士が盛に是に従事することは自由競争の利益を收むる上に於て最も必要なるを見る。然れども教育は一國の大事、其の影響する所一旦一夕に止らず。國家の幸福を目的とせる政府は特に國家的眼孔よ

り最も嚴密に監督せざるべからざるなり。今の文部省は果して這般の大觀察に本きて私立學校を監視するか。若し政府誤て官立學校を以て官府の事業となし、其の私人の經營に係るもの我れ關せずと思惟するが如きことあらむには、是れ國家の爲に由々敷一大事なり。更に又民間の教育によりて却て其經費の節減を僥倖し、其資格有無の問題を等閑視するが如きことあらば、是れ殆ど國家的罪惡なり。吾人は今の賢明なる文部省に萬々是事無からむを祈望して已まざるなり。

(三十一年一月)

### 國樂制定の必要

社會風教の維持に關して音樂の勢力の大なることは争ふべからざる也。而して我邦を顧みれば一の國民的音樂と稱すべきもの無し。是れ豈我社會の一大缺點にあらずや。

從來及び現在の音樂一にして足らず、其の西洋より輸入せられたるものは、一個の美術として見むには、誰か其優秀なる價值を拒むべき。而かも未だ國民生活と

圓融抱和するに及ばず、即ち國民的音樂としては、毫も爲す無き也。古來の傳襲に係るものは、或は鄙俚に傾き、或は上品に偏し、共に一般社會に向て其推獎を敢てし難き事情あるを免れず。況や今日多少高尚なる音樂的趣味を解する者の満足を要むるに足らざるをや。是れはた國樂として用無き也。一の雅樂協會ありて國樂制定の目的の爲に盡力するは大に多とすべし。然れども所謂雅樂を以て是の如き國樂となさむとするに到ては、遂に固陋の譏を免れざるべし。雅樂は須らく保存すべし、今日及び將來の國民的嗜好に適すべきものに非ざる也。

今日音樂學校に教ふる所の音樂は、餘りに専門的なり、餘りに直譯的なり、餘りに西洋的なり、即ち餘りに非國民的なり。吾人が國立の音樂學校に於て非國民的音樂を事とするを當然とすべき理由を見る能はず。

抑々音樂の國民的たるに於て、缺くべからざる二個の條件あり。國語と調和すること、其一なり、其國民的生活狀態と抱合すること、其二なり。所謂趣好なるもの萬邦を通じて一なるものに非ず、其社會生活の如何によりて影響せらるべきもの也。美學上の原理に到ては、東西古今に二途あるを許さず。然れども其適應の事

情に到ては、須らく各國の國民的生活によりて規定せらるべし。夫の國語の性質を顧みず、猥に西洋音樂家の遺蹟を踏襲して、過たすとすもの、其生活狀態の如何を顧みずして、偏に彼邦の樂を喜ぶもの、争でか國民的音樂を確立することを得べき。彼等は動もすれば趣味の教育を呼ぶ、是れ大に可。然れども彼等が他に向て趣味の教育を強ゆるに、先ちて自ら國民生活によりて教育せられなば、更に大に可ならむ乎。

進莫音樂は家庭の幸福を増進し、社會の秩序を維持する上に於て、缺くべからざる也。今の教育家音樂家は、大に是點に注意せざるべからず。國費を以て非國民的音樂學校を建設せる文部省は、殊に一番の猛省を要す。 (三十一年一月)

公開書

西園寺文相に呈する書

西園寺侯閣下。蜂須賀侯去りて、濱尾氏文相の椅子に據ること、僅に六十六日、今や閣下再び入りて、教育界の風光多少の新彩を添へむとす。茲に聊か所思を陳じ

て閣下座右の参考に資せむと欲す。  
 世往々閣下に擬するに世界主義の主張者を以てせむとする者あり。是れ吾等  
 が信する能はざる所、想ふに必ず齊東野人の語に過ぎざらむ。先に閣下の文部に  
 相たるや、方に井上氏が嚴峻なる國家主義教育の後を受く、閣下或は其の弊あらむ  
 を慮ばかり、故らに世界を口にしたるに非ざるか。當時閣下の言として傳ふる所  
 唯世界的眼光を以て日本を見よと云ふにあり、偶々偏僻者流の揣摩を招きたりと  
 雖も、閣下の意、吾れ等決して所謂世界主義なるものと毫も相關せざることを疑は  
 ざる也。

故井上子國家教育主義の大體は、洵に邦家百年の長計に副ひたるもの、將來如何  
 なる人が文部の局に當り、如何に新奇の設備を計畫せむも、是大主義大精神は永く  
 遵奉せざるべからず。是れ一井上の私見に從ふにあらず、實に日本國家の建國及  
 び歴史の精神を繼承する所以なり。然れども無智の輩大體に通せず、其本を去り  
 て其弊を長じ、猥に自尊外卑の風と成さむとす。是れ國家主義が誤りて偏僻固陋  
 の証を受くる所以なり。閣下が國家に對して世界を言ひしは、想ふに畢竟病に應

じて樂を投じたるの言、吾れ其井上子の國家主義を否定するの意を包含せる者に  
 非ざるを信する也。然るに世人却て閣下の説を以て世界主義となす。吾れ閣下  
 の爲に潜に是を悲む。

想ふに今の世に於て苟も頑迷不靈の徒に非ざるよりは、誰か所謂世界主義を唱  
 ふるものあらむや。世界を以て國となさば是れ既に國無きなり。博愛衆に及ば  
 ずは素より人の道なりと雖も、義務に輕重あり、情に親疎あり、其國を愛せずして  
 而して人の國を愛するもの、是れ反臣賊子のみ。唯國家は獨り存するに非ず、世界  
 の國家なり。其存在及び進歩は素より世界各邦の大勢によりて影響せられざる  
 を得ず、是を以て國家を以て事となすものは自己を知ると共に世界を知らざるべ  
 からず。是れ最も視易き道理なりとす。但國の成るや成る所以の道ありて存す、  
 其國性民情の異なるに隨ひて、人文發達の特色を有す。徒に自ら世界の  
 大勢に没  
 了して他の遺蹤を依傍すべきに非ざる也。且世界の  
 大勢なるもの列國の傾向を  
 外にして存するものに非ず、然らば則ち我れ自ら我れの力を以て是  
 大勢を振作す  
 べきに非ずや。何にぞ自ら屈辱し、外邦の讒笑を追て喜憂すべ  
 けむや。我は我が

特色を保ちて終始渝らず、是れ國を成すの第一義、將た又世界文明の進歩に寄與する所以なり。

想ふに閣下が所謂世界の一國として本邦を見よと言ふもの、其意必ずや是にあらむ。閣下外遊の久しき、夙に歐洲文明の真相を知り、英獨佛露の強盛は所謂世界主義によりて然らざるを了せしならむ。十九世紀政治上の大觀は所謂人種國民的結合を経とし、國家至上主義を緯とせる、各國民の主我的運動に存することを認めしならむ。徒に彼が皮相の文明に眩惑し、我が建國歴史の精神を遺却するが如きは、吾等聰明なる閣下に於て、萬々此事無きを疑はざるなり。不幸にして吾等閣下前年の設備に於て、閣下が是國家主義の著しき振攝を見る能はず、却て世人をして閣下を世の淺薄なる拜外者流と同一視せしめしを悲む。今や閣下再び文部の局に當る、是れ閣下が事實を以て世人の誤解を釋了するの好機會に非ずや。吾等是に文部刻下の事業に就て聊か閣下の爲に言を爲さむか。

閣下の先に職にあるや、高等教育會議の殆ど教育界の輿論たりしに係らず、閣下是を排斥し各直轄學校以外に是の如き機關を要せずとなしき。閣下よもや今日

尙は是の如き意見を有せざるべし。大臣有司の更迭頻繁なる間にありて、獨り教育方針の確立を見得べきが爲には、文部省以外に於て、國家教育の大主義の中に、時の當局者が私見を調攝し、以て方針人と共に變遷するの弊害を預防し得る所の一勢力有らむを要す。今の時に於て是の如き勢力は是を高等教育會議に望み得べきのみ。唯一般會議の性質として、朋黨比周の弊は深く是を警むべしと雖も、其議員選任の方法宜しきを得れば、是れはた多く意とするに足らざるなり。目下の道唯々是が擴張を計るにあり。去月以來議員の増加や、見るべきものありと雖どもや、在官者に偏するの嫌あり。是れ恐らくは全國教育界の輿論を收容する所に非ざるなり。然ども閣下にして同會議の必要を認めずむば、則ち已む荷も其必要を認めれば、須らく十分の改良を斷行し、以て其目的を貫徹せざるべからず。會て同會議の設備に反對せし故を以て、今日尙は是を冷眼視するが如きことあらば、是れ恐らく閣下の雅量を示す所以に非ざらむ。

義務教育の普及方案及年限に關して、文部省は已に畫一の方針を有せざるべからず、而かも其施設の功果見るべきもの甚だ少なし。吾れ等素より速成を尙び百



年の計を認るを好まず、然れども邦家の大事一日を緩うすれば、是れ邦家一日の禍なり。今や内外時勢の急潮澎湃として注ぎ来る、國家教育上の一大振攝を加へ、其不拔の大方針に向ひ着々歩武を進むべき時ならずや。先に當局者尋常小學の授業料を規定せしは、素より是義務教育普及の精神に出でたるなるべし。然れども今日は是の如き姑息の編縫策を以て甘すべき時に非ざるなり。一方には公立學校の不備に向て何等改良の方案を立てず、而して他方には私立學校撲滅の方針を取る無謀の擧と謂はざるべけむや。文部省は全國の模範となるべき東京市の教育に對してすら何等督勵の勞を取らず、其不完不備今日の如きに放任し、却て國民教育を以て全國を尙へむとす。少しく妥當を缺く無からむや。文部省は蜂須賀侯の配下に、租政の多きに咽びたり。濱尾氏職にあること、二ヶ月未だ天下の耳目を一新するに到らず。閣下是際に處す、是れ功名を尙ふもの、好地位に非ずや、義務教育の事は一例のみ。

内地雜居に對する教育界の準備は世人の喋々する所なり。吾れ閣下の如何の意見を抱持せらるゝやを審にせずと雖とも、吾れ等を以て是を見れば、未だ多く言

ふに足らざるなり。一國教育の方針は、内地雜居を待て初めて確定すべきに非ず、我は我が立つ所に據りて來者を迎ふるの一事あるのみ。吾人は國民教育の大主腦として既に勅語を有す。勅語は建國の大本を明にし、民性の特質を示し、昭乎として百世の鑑なり。是に將順し、是を發展し、皇祖宗の丕圖を體認して、國家萬世の隆盛を期待する、外所謂國民教育の方針なるものあるを許さざる也。如何ぞ内地雜居を望で俄に狼狽するを須かむや。是大主腦を把持して、中外時勢の變遷に攝應す、去就に於て一毫の惑あるべき理無し、如何ぞ閣下に於て獨り累を爲さむや。夫の外國語學を盛にすることを以て内地雜居の準備となすが如き、決して其道を得たるものに非ざるなり。我邦に來り我民とならむと欲するものは、須らく彼れより我に攝すべし。我に於て彼を逢迎すべき謂はれ無きなり。語學の事、一些事に似たりと雖ども、逢迎主義の弊は、決して是に留まらじ。若し是によりて、崇外迎合の風を馴致し、我國性民情を累はす事、あらば、是れ實に國家の一大事なり。一國の衰亡は多く、是國性民情の破壊に本くこと、殷鑑普く古今の史乘にあり。豫め彼れの語を學びて、彼の來るを待つは、是れ屬國の準備なり、自立自主の大國民の所爲

に非ざる也。今日逢迎主義の教育を以て内地雜居の準備と思惟するもの往々所謂有識者の間に是を見る是れ吾が深く遺憾とする所なり。吾れ閣下の是際に處するの道おのづから吾が容物を要せざるものあるを疑はざる也。

宗教の事亦然り。帝國憲法は既に信教の自由を保障す。政府の待遇に於て彼此の間に偏頗あるを許さざるなり。もし宗教上内地雜居の準備なるものを要すとせば是れ即ち佛耶兩教同一の待遇に存せむ。國體と適應せざることに於ては厭世教たる佛教は平等教たる耶蘇教に同じ。其の久しく我國に存在せるの故を以て國家の保護を受くるは謂はれ無きの甚しきものなり。政府は内地雜居と共に斷然情弊を絶ちて謂はれ無き保護を廢止せざるべからず。是の如くにして佛教の衰亡を速うするを得ば是れ寧ろ國家の幸のみ。若し夫れ國家教育に宗教を加ふるが如き閣下の賢既に其迷妄を了せられたるならむ。憲法の正條を紊り國體の精神を亂る是より甚しきは無し。而かも是の如き迷妄なる建議が前内閣の廟議に上りたることを思へば將來國民教育の大事にして閣下の賢明に待つ所のもの決して尠少ならざるべし。吾れ常に國家の爲に是事なからむを望む也。

陳べ來りたる所素より當眼の一二のみ。吾等を以て是を見れば野に在りて叫ぶべきこと一にして足らざる也。戦後の經營として國民教育の振攝は朝野の心を齊しうして翹望する所閣下の聰明必ず能く裁する所あらんを信す。然るに猶此言ある者は區々の微忱蓋し黙して已む能はざる者存すればなり。願はくば吾言を河漢にすることある勿れ。頓首々々。  
(廿一年二月)

### 吾人の宗教觀

吾人の宗教觀は極めて簡單也。宗教の主性は迷信なり。所謂宗教の改善は進歩に非ずして滅亡なり。世に宗教哲學なるもの無し。もし有りと思惟するものあらば是れ一の迷ひのみ。唯宗教に關する科學としては宗教史と宗教心理學とあるべし。前者は人類迷信の變遷を説述し後者は迷信の人心に於ける心理學根據換言すれば人は如何に迷ひ得るか次第を明にす。宗教が人生の幸福問題と關係するの多少は國民精神に於ける宗教心の多少に

依る。宗教は又方便として知識の縁無き愚民を化するを得べし。然れども斯くして爲されたる感化は、嚴密なる國家的道德と一致せず。宗教と稱する人心の病的現象に關する吾人の意見即是れのみ。世の宗教家諸君以て如何となすや。

(廿一年二月)

### 笑はざる國民と文學美術

日本人は世界に於て最も笑はざる國民なり。蓋し必ずしも笑ふを好まざるに非ず、笑ふの餘裕に乏しければなり。

大なる國民には必ず笑の餘裕ある也。大人にして小兒の心を失はざる也。大なる文學はかゝる國民に於て初めて望み得べし。

明日の食を慮るの國民、衰亡を憂ふるの國民、自衛自活に餘念無き國民は文學美術と縁無き國民なり。

(廿一年二月)

### 紳士と高利貸

紳士録收むる所高利貸あり、博徒の親方あり、是輩豈所謂紳士と稱すべき者ならむや。紳士は士なり、君子なり、品性德行に於て群氓の師表となるべき者なり。苟も所得税を納むるものは是を目するに紳士を以てす、偶々拜金根性を暴露し來る事小なりと雖も、是の如きは國民道德の危機、憂國の士の決して等閑視すべからざる所なり。

(廿一年二月)

### 死學者

身死して其學活くるもの素より欽すべし、學其人と共に傳はらざるもの亦恕すべきものあり。獨り當世の米を食みて甘じて死學者たるものに到ては深く悲むべき也。折衷を以て高しとし、曖昧を以て廣しとするの風ありてより天下の學生生ながら死するもの多し。希くは彼等に與ふるに五十年の糧を以てせよ、而して萬卷の死書と共に深山不毛の地に坑にせよ。一世の思想を刷新する所以也。

(廿一年一月)

無定見を誇る學者

今の學者と謂はるゝ人の中には、己れに一定の意見無きことを誇るの風あり。こはいみじき心得違ひにあらずや。學理上又實際上に一定の説を立て是れによりて世の衆愚を導きてこそ一世の師表として仰がるゝ價值もあるなれ。さるを説無く意見定まらぬを學者の常と思へるが如き人は、學者の天職を如何に心得たるにや。

素より定まらぬを強ちに定めよとは謂はじ、思想は夙斷に害ありて熟慮に益あること言ふまでも無し。さあれ、今の學者某の事某の理に就きて意見を問はれたらむ時、吾れはさる事に就きて定まれる説を樹つる程、輕率なる學者に非ずと様に己れの意見の定まらぬを誇り、顔なるは何事ぞ。吾等假りに一個の學者としてかゝる間に確答する能はずとせば、赧然として其學の淺く其識の到らざるを耻ぢむとこそ想はるれ。  
あゝ無定見を誇る學者は是社會、是國家に何の用ありや。

學者の誤解

凡て人は其の信する所を忌憚無く公表するの勇氣無かるべからず。己れはかく信すれども他人は如何に思ふらむ若し笑はるゝことあらばなど思ひわびつらふはなべて志弱く膽氣に乏しき人の常ならむが如し。古よりかゝる己れの固く信せる事を爲し得ざる人の大事を成就したる例し無し。學者に於ても同じ事なり。某の時己れ固く然りと信じたることは、其時を然りと公言するに於て何の憚る所やある。人は己れの意識を超えて何事をか信じ得べきぞ。又某の時固く然りと信じたる事も他の時然らずと固く信することあらば、其説を改むるに於て又何の憚る所やある。それを豹變なりと云ふは思想の變遷てふことを解せざる人の言のみ。人知は生れてより死ぬるまで斷へず進歩すること、猶哲學の思想が歴史と共に斷えず變遷するが如し。人間知に一定固着の眞理なるもの無し、是の斷えざる進歩其物が則ち眞理なりと知らずや。  
もし學者にして一定渝らざる意見を樹てむとせば、それは臨終の際に於てするの

外無かるべし。又哲學者が歴史上に萬古不易の説を立てむとせば、それは歴史の終る時に於てするの外無かるべし。死は一人の思想を固定すされど歴史の始めなく又終りなきを如何にすべきや。

所詮眞理は變遷の外に無し。學者が客觀的に萬古易らざる意見を定めむことは思ひもよらざるなり。されば人々其時々固く然りと信する所を然りと公言するの外無かるべし。

斯く言はば其説且暮に改まり散漫として歸する所無かるべしと憂ふるものあらむか。さりながら愚昧輕佻の輩にこそかゝることもあらめ、苟も識見ある學者にありてさる憂は萬々無かるべし。まこと學者と呼ばれむ程の人はよし其説如何に論はるとも一定必然の道によりて發達するものなれば前なる説と後なる説とを繋ぎ考ふる時は一部の小思想史を現すべきなり。さればかゝる學者の説は其の時に固まらざる代りに其發達の道に於て定まれりと謂ふべし。古より大なる學者にありと謂はるゝは是意味に於ての一定の意見なり。

今の學者が其の信する所を公言するに憚るは蓋し斯く思へばなるべし。——吾

説は過去に於て變化し來れり吾れは今日現に固く信する所あれども過去の例によりて類推する時は是亦明日に到りて渝るやも測られず。されば吾れ今是の所信を公言せば、そが萬一明日に到りて渝りたらむとき變説として嘲けられむ。是嘲りを免れむには吾れは所信を枉げて非を遂ぐるの外無からむ、是れ共に吾が忍びざる所なり、如かず暫く緘黙を守らむには——と。

かゝる緘黙の謂はれなきことは先に述べたる所にて明なるべし。畢竟眞理には生命あり、人知の發達は即ちそが現はるゝ所なり。夫の博物學者がピンもて蝶や蜂を刺して動物の標本を作るが如き考にて一定固着の眞理を捉へむとするはいみじき誤解ならずや。世の學者が其の固く信する所をだに公言し得ざる迄に怯懦なるは所詮是のいみじき誤解に本づく。彼等にして其の學者たるもの天命を全うして人生の爲に盡すあらむと欲せば、先づこの大々的誤解を擺脫せざるべからず。

(卅一年三月)

死學者と守錢奴

古にありては學は氣を養ふにあり、今の人一び儒衣を服すれば、反て奄々として將に絶せむとす。是れ何の象ぞや。人の爲に學あり、學の爲に人あるに非ざるなり。專念學に力む、名は則ち嘉すべしと雖も、而かも翻て人生の目的を遺却するあらば、是の如きの學はた是れ何爲るものぞ。

吝嗇にして錢を是れ蓄ふるもの、人は是を守錢奴と呼ぶ。錢なるもの素と人の爲に存す、人錢の爲に存するに非ざればなり。苟も人世に益なくむば、陶朱の富は半錢の功無し。然らば則ち何ぞ守錢奴を嘲りたる所以を以て、夫の死學者を罵らざるや。

所謂死學者は守錢奴と相去る幾何ぞ。形あるが爲に錢の殊に賤むべきか、形無きが爲に學の獨り貴むべきか。其人生の目的と方便とを混同するの誤謬に就ては兩者些の徑庭無し。

(廿一年三月)

### 世豈所謂儒服なるものあらむや

昔者孔丘常に章甫の冠を戴き、緋掖の衣を着く、魯公見て其の儒服なるやを問ふ。

答へて曰く、丘壯にして魯に居り、長じて宋に遊ぶ、故に二國の俗に隨ふのみ。世豈所謂儒服なるものあるべけむやと。

以て今の學者を警むべし。世豈所謂學者なるものあるべけむや。

(廿一年三月)

### 國家の要求

國家國費を抛ちて留學生を送る、國民が義として彼に要求すべきもの一にして足らず。

彼れの文を學び、彼れの學を修む。留學生の務むべき所是に盡きざるなり。東西人文の特質を闡明し、世界の開化に貢獻すべきもの、彼と我と互に異なるものあることを確認するに於て初めて其目的を達したりと云ふべし。彼の便々たる腹筒畢、竟活書、筐たるに過ぎざるもの、豈學者の能事ならむや。若し夫れ彼れが皮相の文明に眩惑し、嘆美、摸倣、是れ事とする、所謂一派の「亞米利加歸り」に至りては、寧ろ國家の蠱毒のみ。

人文發達の理想に於て各國其特質あるを認めよ而して是差別的理想に對する實現の方法如何に着目せよ。文化交流の目的詮する所是に過ぎず。吾人の海外留學生に希望する所即ち是れのみ。是れはた國家の要求也。(卅一年二月)

### 大西祝氏を送る

大西祝氏、哲學研究の爲に三年間獨國留學を命せらる。氏の斯學に於ける名聲夙に定評あり留學の目的を到達して遺憾無からむこと吾人の決して疑はざる所なり。想ふ氏の歸朝して京都文科大學の開始せらるゝの日本邦學術界に如何に新彩を添へ來るべきかを。唯氏や蒲柳の質務めて自愛せずむば北歐の風物或は累を爲さむ。氏よ國家が氏に待つ所甚だ尠からざるを思へ。吾人又何をか言はむや。(卅一年二月)

### 異人種同盟

日英同盟を説くものあり、日佛同盟を言ふものあり。然れども國民よ、異人種の

同盟の永續し難きことは歴史上の事實なることを認めよ。

愛蘭土は何故に自治を求むるか。ルマニアブルガリアは何故に土耳其に叛きたるか。波蘭の分割は滅亡にあらず歸順なりと説ける史家の言には儘に深奥なる道理を含む。ウンガルンは何故に獨立せむとしたるか。コッストは敗死せりと雖も十一ヶ國の國語を談する民人を以て組織せられたる軍隊は正に塊地利の死相を現せりとせらる。當に亡ぶべき希臘は亡びずして當に盛なるべき土耳其の力は到る處に牽制せらるゝは何故ぞ。無害なる猶太人と支那人と日本人とは到る處に迫害せらるゝは何にぞ。更に所謂パンストラキニスムの世界的大運動を見よ。

是十九世紀の一大潮流は所謂人種國民的の名によりて稱せらる。アルサス、ロレーインの現状如何を知る者は根本的異人種同盟に向つて幾何の望を繋ぎ得べきか。(卅一年三月)

### 大スラヴ主義

洵に大スラヴ主義の偉大なる運動に注目せよ。北はアドリア海より東は太平洋の黒龍江口に到り西はポランドより南は波斯の國境に到る迄幾多の土地風土民族を包括して茲に至強至盛なる人種的感情の磅礴せる所謂大スラヴ主義の領域に非ずや。殆ど一億萬の生靈は是の不思議なる本能に驅られて尨大なる一團體となり今や方に世界歴史の舞臺に投じて萬邦環視の中に其大々的國民運動を開始せり。是れ果して何の現象ぞや。

是れ偉大なる國民勢力は同人種の結合に存することを訓ふる者に非ずして何ぞや。英佛西諸國の膨脹史を見よ彼等は好て異人族と同盟す而れども同盟の必要去れば則ち翻て是を亡ぼせり。全く外交關係より離れたる異人族は其の意味する處單に二個の仇敵に過ぎず。人類に先天的罪惡なるものあらば是一事儘に人類の罪惡なり。

來以て往を推すことを得べくむば日英もしくは日佛同盟の意義亦おのづから火を賭るが如きものあらむなり。

(廿一年三月)

江戸ッ兒は忘恩兒か

人は謂ふ東京の人は恩誼を知らずと。誰か是に答ふる所以を知る。

今や滿城の人奠都三十年祭に熱中す。而かも彼等の中一人の前征夷大將軍徳川慶喜公の入京を歓迎したるものあるか。草より出で、草に入る武藏野の原は誰が爲に今日あるを致したる。曾て御膝下の民たるを誇りじものは果して何の眼を以て雨肅々の日天下の公方の其舊城趾に入るを目睹せしか。

人或は奠都三十年祭を以て征服者に媚びたりとなす是れ大義を知らざるの言のみ。唯吾は名譽ある江戸ッ兒をして徒に現勢に媚悦して舊恩を忘れたりとの誣あらしむるを欲せざるなり。

古を忘るゝの民

太田持資徳川家康勝安房西郷南洲の四人の爲に紀念日を設けよと國民子東京人の爲に説く。城市建設者の爲に紀念を設くるの一事吾人大に是を讃す。但其人は徳川家康を以て足れりとせむ。



今○の○故○を○以○て○古○を○忘○れ○さ○る○は○人○生○の○美○事○甲○州○の○僧○夫○帽○脱○し○て○信○玄○公○を○語○り○仙  
 臺○の○走○卒○手○を○額○に○し○て○貞○山○公○を○説○く○江○戸○人○士○の○何○ぞ○爾○か○く○權○現○様○に○冷○な○る○  
 吾○人○は○是○の○如○き○古○を○忘○る○の○民○の○均○し○く○日○本○建○國○の○祖○宗○を○忘○却○す○る○民○な○ら○む○を  
 恐○る○也○

(三十一年五月)

國民道德の危機

昔者猶太の遷民はパレスチナの名を聞きて涙を流せり。吾人は我皇室及び國  
 家の名に對すれば常に言ふべからざる一種肅敬の情を禁する能はず。是を以て  
 吾人は他の忠君を説き愛國を唱ふるを聞けば良し身隷與臺にして是を口にす  
 も覺えず帽を脱せんと欲す。情一び往いて思ひ君國に集まる何の違ありてか唱  
 説する人の心事を揣摩せむや。  
 然るに近時我社會に忠君を嘲り愛國を罵り他の是を説くものを目して矯飾と  
 なし偽善となすものあり。是を教育主義として唱ふるものあれば呼ぶに死教育  
 を以てし是を社會道德として英むるものあれば笑て偽愛國となす。嗚呼是の如

きは果して喜ぶべき事なるか。

眞に私己の爲にする所ありて君國を言ふものあらば其人の心事甚だ惡むべし。  
 而かも其忠愛の道に於て嘲罵すべき所以を見ざるなり。嗚呼萬一忠君愛國を嘲  
 罵するが如き風習の社會に認容せらるるあらば是れ即ち國民道德が其根柢に於て  
 動搖せることを表示するものなり。嗚呼國民道德の一大危機なるかな。吾人は  
 是を以て國民的良心の制裁を喚起すべき最も嚴肅なる問題なりと思惟す。

今の忠君を嘲り愛國を罵るものは素より君國に就いて言ふに非ずして夫の口  
 を是に籍りて私己の利益を計るものを嘲罵せるならむ。然らば則ち彼等は彼等  
 が主として是嘲罵を加ふる所の國家主義もしくは日本主義主張者が是の如き偽  
 善者なることを如何にして知り得しか。人に隨て説を異にするは則ち免れず其  
 唱ふる所の主義に就いて公明の争を爲すこと能はず却て漫然是を唱ふるもの  
 人物に就て偽善を叫ぶ。是れ實に自己の品性を損し識者の爲に窘迫の醜態を笑  
 はるゝのみならず彼等が君國の忠愛を見ること朋黨の攘奪にだも若かざること  
 を表白するものに非ずや。

(三十一年四月)

愛國を罵る者に告げむ

嗚呼眞なる哉、大道廢れて仁義あるや。吾人誠に世の愛國を罵る者に告げむ。吾人が君國を言ふの已むを得ざるは今の世に爾等の如きものあればなり。爾等は謂ふ、忠君愛國は日本國民として何人も有せざるべからざる所と。然るに爾等は却て他の是を説くものを嘲るに非ずや。爾等の中には偶然に生れたる日本の如きは我母國となすに足らずと公言せしものすらあるに非ずや、而して爾等は尙ほ且つ吾人の言を些の必要なしと言ひ得るか。爾等の眼には今の世に於ける國民道德の亂離を認めざるか、認めて而して其統一を須要ならずとするか。爾等は忠君愛國の眞理を否定せずと謂ふ、然らば則ち何故に之を嘲罵するか。爾等の心にありと云ふ忠愛の情は、其忠愛を否定する他人に對して甘じて黙する得るか、然らば則ち是れ君國の公德に非ざるなり。他を濟ひたるを以て大なる耶蘇と佛陀とを崇拜する爾等は何故に他を救はむが爲に忠君愛國とを説くものを獨り偽善なりとするか。あゝ何人か國を賣りて而して正義を叫ぶものよりも多く偽

善なるを得べきか。

宗教の眞精神と新宗教

宗教の眞精神とは何ぞ。耶蘇教にも、佛教にも、回々教にも通有せるやがて宗教の宗教たる所以の根本元素と云ふの義か。さらば是れ宗教の定義なり。世の宗教の眞精神を言ふもの亦多くは新宗教を言ふ。新宗教とは何ぞ。佛耶回諸教の特性を離れ、是の所謂抽象的眞精神に基きて新に造らるべき宗教の義か。斯く解して大に誤らすむば、こはまさしく座上の空論に過ぎざるべし。宗教の眞精神や善し、唯是の眞精神が何故に佛耶回諸教となりて現はれたるかの理を明にせず、漫に新宗教を言ふものは、偏に人類の通性を見、是通性が依て、以て現實界に其形象を有し得る所の差別原理たる民族の特性を顧みざるものに非ずや。人生の事凡て國民的特色を帯びて存在し、且發達す。もし我邦に於て新宗教を言はむと欲するものあらば、先づ國民性の特色に就て深く究むる所あるべし。宗教の眞意義を言ふが如きは其迂途に及ぶべからず。さるにても、日本主義をだに



大人物と私徳

人は其事業に於てのみならず、亦其品性に於ても大なり得べし。是二者を兼ね備ふるものを大なる人物と云ふ。

グラッドストーン氏は、ハワードン寺院の門丁の病を訪ひ、爲に聖書を讀みたりき。彼は、是心を以て天下の事に當りたり。其七十年間の政治的生活に於て一人の私敵を有せざる、真に故ある也。

世には所謂功利の外にも道ある也所謂階級の外にも人ある也。官邸の立關に私生兒を置去りにせられたる國務大臣を怪まざる國民は未だ大なる人物を解せざる也。

(廿一年九月)

少年國

我邦は夫れ天下の少年國乎。人五六十歳に到れば、概ね半死の白頭翁也。是れ儘に大人物の缺乏せる一の理由也。人の名を好むや、其功を一生の中に收めむと欲

す。老衰期の五六十なるものと、八九十なるものと、其事業に於て徑庭ある、素より其所のみ。況や成熟期の一年は、修養期の十年に匹敵するものあるに於てをや。

試に我國の學者に見よ、年五六十に到れば進取の氣象頓に熄み、塵に既得の小名譽を墨守して失はざらむとを是れ務む。偶々後進者流の儀式的奉戴に遇て、時に時代後れの舊套を反覆するに過ぎず。世の既に己れと違へるを覺らず、其説の陳腐を以て傲然として高く標持す、寧ろ憫むべしとなす。

夫の五六十にして自傳を編み、閱歷譚を述ぶるものは、一生の事業已に終れりとなす乎、徒に過去を追憶するを已めて、何ぞ更に猛進一番するを務めざる。未來は青年の特有物に非ざる也。吾人は是點に於て、歐洲の大人物を景仰するの情に堪えず。

グラッドストーンは八十七歳にして尙ほ政界の大立物なりき。彼は其の死する數週前までは、ホマー研究に就いて古典學者を驚倒するの意氣を有せりき。八十二歳のビスマルクは老衰事に勝えざりしと雖も、五年以前には猶歐洲風雲の一角を握りたりき。現在の老人傑に就いて見るも、法王レオ十三世は以太利僧正中の尤

も剛壯有爲なる一人也而して彼れ年方に八十七。英の畫家トマス・クーパーは今年九十五の高齡にして、ロヤルアカデミーの繪畫會は年々彼によりて少からざる光彩を添ゆ。倫理學者及び宗教學者なるジームスマルチノは一千八百〇五年に生まれ七十年以來其研究と著述とを懈らす。現時以太利の樂界に錚々たるエルチは今や方に八十四歳。英國女王は身神や、衰頹せりと雖ども尙ほ七十八歳也。五六十年は是等のより見れば壯者のみ。大なる傳記は長き年月の下に編纂せられざるべからず。日本は遂に少年國に終らざるべからざる乎。

(卅一年九月)

### 大人物の生死

然れども如何に大なる人物も歴史より見れば常に一個の天職の爲めに生まれたる觀あり。彼れ是天職を果せば其同胞が彼れの爲にせる感恩の祈禱を後にして靜に永世の人となる。近き例しはグラッドストーンとビスマルクと也。若し是二氏の死をして今より十年又は二十年の前にあらしめば其國民は償ふ

べからざる損失を被りしならむ或は其死に踵ぐものは革命的破裂なりしやも知るべからず。然れども今や二氏の死は其國民の幸福に一波紋をたも及ぼさる也。嗚呼一度び其天職の成し遂げられたる後にはかゝる大人物も世界の歴史の前には如何に小なるよ。大なるものは歴史なる哉。

(卅一年九月)

### 植民地と歴史の教訓

米國は遂に全比律賓の占有を斷行すべしと傳へらる。『イムピリアリズム』は遂に西班牙に勝ちたる米國を征服せり。

然れども植民地の利害に就いて歴史の教訓を見よ。二十世紀には植民史上の改革を見むとは炯眼なる歴史家の明言せる所也。

獨逸が歐洲以外に其範圍を擴めしは、僅々十四年以來の事也。彼の領地は亞弗利加に於ける九十二萬方哩の外、大太平洋及び支那膠洲灣にもあり。されど内失費の莫大にして、外所期の効力を有せざるは獨逸外交家の早くツブヤケる所也。佛蘭西は其保護國を合すれば無慮三百六十萬方哩の大領地を有す。然れども其の

亞弗利加に在るものは素より言ふを埃たす、亞細亞、南洋、西印度にあるものも、實に非常の金額を本國より補助するに非ざれば維持し難き也。伊太利の紅海沿岸の屬地も、徒に母國の納稅者を苦むるのみ。西班牙に到ては最も不幸なる殖民史を實驗せること言ふまでも無し。日本も亦臺灣に困弊しつゝあるに非ずや。北米合衆國にして商業國たり、平和國たる以上は其歴史の教訓に背きて比律賓を占有するの利益果して確實なる乎。

(廿一年九月)

高價なる美譚

人心の美は多く戦争の中に於て顯はる。人生眞に恨事あらば是れ儘に其のなり。

米西戦争は方に終を告げぬ。幾多の美譚は幾百萬人の涙と血と生命とによりに購はれぬ。試に其二三を録せむ乎。

西班牙の提督セルエラ將軍米の水雷艇の襲撃を果さずして遁逃せむとするを見るや、部下に令して撃沈する勿らしむ。曰く勇士死を決して敗艦に近く、我れ豈

是を殺すに忍びんやと。是と同一の例は米軍にもあり。テキサス號の艦長フクリッ、西班牙巡洋艦オケンドの轟沈せられたるを望み、其部下の歡呼を制して曰く爾等歡ぶを休めよ、可憐なる同胞は死につゝある也。

米國新聞の一通信記者マッシュル軍に従て脊骨を撃たれ、出血混々として胴軀瘡撃す。其死數分を出でざらむこと明なり。而かも尙ほ其筆を取りて靜かに其通信を草しき。

嗚呼是の如き美譚を製造せむが爲に世界は其輿地圖の彩色を變せざるべからざりし也。

罪惡の首府

昔者ダンテ、フレンツェ府を呪うて曰く「フレンツェは會々正義の地として知られたり、然れども今や不義の露はれむ事を恐れて婦人の懺悔を禁むる僧侶あり。會て市民の血液は皂隸輿臺に至るまで清かりき。而かも今や異民族の混合と共に身心共に墮落の深淵に陥れり。乞食の子孫は今や富豪となれり、彼等は弱き者

には蛇の如く、瘴惡に財藎の前には蜘蛛の如く平伏す。吁フ、レ、ン、ッ、エは罪惡の首府なる哉」と。

吾人は我東京の等しく罪惡の首府なるを想ふ。東京は日本國中の罪惡の問屋也。猶ほ歐洲の新流行が巴里に初まるが如く、東京は日本の罪惡の源泉なり。見よ東京人の入り込める處は如何なる地方にも罪惡を扶植せざるなきに非ずや。希くは悲歌慷慨のメンテをして今日に生まれしめ其の燃ゆるが如き筆をして是の罪惡の首府を描かしめ、以て東京人の心膽を寒からしめむ哉。(廿一年九月)

### 日本人と能辯

何故に能辯は我邦に缺乏せりや、との疑問に答へむは極めて容易のことなるべし。我政體は古來專制政治にして輿論衆議の容喙を許さず隨て多數人民を會して意見の贊同を求むるが如きは政治上殆ど其例を見ず。是れ第一の原因なり。而して是事は國民的性情の上に二個の結果を有す。即ち一面に於ては依頼心を生じ、他面に於ては孤立心を起せり。是の兩つの者は共に能辯の生母たる國民の

共同精神を妨害するもの、是れ第二の原因なり。我邦は最近三百年間の封建政治に於て、最も嚴峻なる階級制度を経由し、上下の意思疏通殆ど其道を絶せり、是れ第三の原因なり。加ふるに我邦士人の間に、冷く強大なる感化を有したる儒教は、常に能辯を奨励せざりしのみならず、却て寡る士君子の道にあらずとして是を擯斥したるの傾向あり、是れ第四の原因なり。是四個の原因あり、近時政體頓に革まり、輿論衆議の勢力大に加はれりと雖も、尙ほ未だ積年因襲の習性を擺脫する能はざる、素より怪むに足らざる也。

如何にして能辯を盛ならしめむ乎。政黨、内閣、方に成りて、國論の一致協同の事業、益々其須要を増し來りたるの今日、是が必須の手段たる能辯は、獨り其落寞に委すべからず。是を盛ならしむる當に如何すべき乎。是れ儘に吾人の一顧を値すべき問題なり。

然れども能辯は、辯者と共に聽者に待つもの也。猶ほ大詩人、大美術家が多く一世の風潮に駕して出で來る如く、能辯家は眞に是を要するの社會にのみ生まるべきなり。今の日本人は果して能辯の勢力を識認して眞に是を欲する乎、吾人は却

て反對の事實を見る也。蓋し我邦人は最も他人の意見に耳を傾けざる人民なり。己れ瑣小の知見を有するや則ち挾て我が説となし我が主張となし、一步も狂ぐるなからむを期す。是を以て他人の意見に接するに當りては心を虚うして其是非を見ること能はず、預め成心を持し、批評的若しく穴探的態度を取りて是に臨む。偶々其説の眞に傾聴すべきものありて己れ亦其傾聴すべき所以を認むるも故らに小我の異を樹て相譲らず却て冷笑暗罵を以て酬ひむとす。是の如き人民に對してデモステネーシスセロ出づるも亦是を如何かすべき。

加之彼等は能辯に對して一種輕侮の情を有する也。少しく其辭令を修め其態度を飾るや、諷刺目するに演説屋を以てし、其能辯を以て説の短所を塗飾するの具なりとす。是の如きは今の辯者の技能未だ至らざる事亦其一原因なるべしと雖も抑も亦我邦人が能辯其物に對する先天的偏見の主として然らしむる所ならずむばあらず。是の孤立自負猜疑の念慮は即ち他面に於て我國民の間に大共同大團結の成立を妨害する主要なる原因にして、社會經營の上に於て大に排斥せしむことを要す、能辯は其後に於て初めて其十分の効果を有し得べき也。(廿一年九月)

幽靈的宗教

吾人は宗教の現在を言はず何となれば今の我邦には宗教なるもの存在せざればなり。既に存在せざる宗教に滅亡もなく未來も無し其前途を論ずるの要無き也。然らば今の所謂宗教を何と名くべき乎。已む無くんば幽靈的宗教乎。名ありて實無く形ありて體無ければなり。

國家的要素としての宗教が其生命を失ひしや已に久し今日僅かに其名によりて存するものは形骸のみ。一部迷信者流の信仰は國家の文明と何の關する所なし。獨逸には無頓着主義 Indifferentismus ありきされど既に無頓着を以て主義となす尙多少の宗教的臭味を帶ぶ我國民は既に事實に於て無頓着なり亡ぼすべき宗教なきに又何の主義なるものを要せむや。

夫の圓頂緋衣の徒は世襲的職業として生活の爲に讀經するのみ他の故あるに非ざる也。人は埋葬と墳墓を托するが爲に所謂信徒たるのみ他の故あるに非ざる也。儀式的に讀經し説教し儀式的に禮拜し喜捨す他の故あるに非ざる也。



是を以て日本國民を以て佛教徒となすものは、鯨を以て魚となし、蝙蝠を以て鳥となすものなり。佛教の存在は歴史上の情力のみ。國家文明の之を見るや、風馬牛のみ。若し夫れ永久にコムマ以下たるべき運命を有する基督教徒の如きは、素より言ふに足らざるなり。

(卅一年九月)

彼は彼たり我は我たり

若し世界に人道なる者あらば、それは同じき所に於て相合したる者なるべし。畢竟彼は彼たり我は我たり。』哲學科學を以て宗教に代へむことは歐洲に於ては明白なる失敗なり。我に於て必ずしも然らむや。

國家の權勢によりて教會を撲滅せむとす、歐洲に於て或は失敗ならむ。我に於て必ずしも然らむや。我れや、宗教の外に道義あり、迷信の外に制裁あり、日清戰爭の勝利は、佛教の力でもなく、人道のお蔭でも無し。今に於て漫に人道を説き、彼に宜しき物を以て直に我に強ゆ、其愚や及ぶべからざるなり。國民的特性は三千年の歴史によりて、明に檢證せられたるに非ずや。我は只我主義を箇中に求むべきのみ。

のみ。

(卅一年九月)

寧ろ民を愚にせむ乎

大なる國民は利巧に非ずして剛毅なり、生意氣に非ずして愚直なり。大なる國民は英雄崇拜の稱氣を要す。今や我國人は、小哲學者、小法學者、小理論家の群集たらむとす。田舎の中學生も、一國の大宰相を呼捨てにするをエラシと心得る世の中には、小我を持って他を睥睨するもの、幾千萬人あるも、未だ以て一同の大を成すに足らざる也。

古の武士道は己を没するに立つ。今や天下を舉げて人の爲にする者無し、是れ教育の過なり。己むを得ずむば夫れ民を愚にせむ乎。

(卅一年九月)

新紙の墮落

夫の文墨馳騁して一世の豪傑を見撫するの概あるもの、一度ひ其人に面すれば、膝語蛇行媚悅百般醜態言ふべからず。今の新聞記者に是輩多し。痴態寧ろ憫む

べきなり。

獨り氣の毒なるは朴率なる地方人士の類なる哉。新聞紙上其堂々傲岸の筆を見て潜に其人物を想望し、一朝刺を通じて而して其一介白面の小兒輩なるの意外に驚く。是の如きは新聞紙の世に重せられざる所以の一なり。

口に正義公道を叫ぶもの其行や往々して屠沽穿窬狂態世故に拘はらざるを以て清しとなし、牢騷人を憤ふるを以て高しとなす。否らざれば所謂巾幗にして人に事ふるもののみ。

彼等は口天下の義を唱ふるも自一人の責を負ふ能はず。今の新聞記者に是輩多し。是れ亦新聞紙の世に重せられざる所以の二なり。

○悔悟の時機来るや遅し

近來民主的思想が政治及び教育社會に表はれ來りたるは著しき現象なり。日本國民が其道德的意識の上に、大猛省を要すべきの時機漸く近からむとす。民主的思想は、それが如何なる假面を被り來るを問はず、須臾も我國體と相容れざる也。

彼の耳學の輩。外邦特殊の制度を談じて我邦に強ゆるが如き、抑々何等の陋態ぞ。我邦にありては、文明の進歩は民權の發達にあらすして、寧ろ臣民の義務を明確に理會するにあり。是れ皇祖立國の鴻圖を體認して、偉大なる國民的理想を實現する所以也。

今の政黨員中には、陛下の信任に立てる内閣を以て憲政黨の出店なりと公言したるものあり、今の政治を以て多數政治なりと公言したる政論家あり、黨の決議即ち内閣の意志たるべしと要請する憲政黨委員あり、「眇たる一個の俗士」を容して教育勅語の撤回演説を爲さしめたる教育會あり、而して社會は多く怪み問はざる也。是等の暴論を公にして顧みざる輩は、無學無識、元より言ふに足らざるべし、而かも彼等を容して是を公言せしむる社會は、甚だ憂ふべき社會に非ずや。吾人は民主的思潮の漸く社會の根底に汎濫し、是忠誠なる國民を盡惑せむとするを見て、國民道德の危機漸く近きつゝあるを思ふ。

あゝ今の政黨なるものは、畢竟二十五年前の愛國公黨の假裝せるもののみ。『是政府は、人民の爲に設けたる政府として見るの外無かるべし』との公言は、今日に於

國民の聲

ても尙ほ依然として其精神たる也。吾人は國民の悔悟の餘り遅からむことを恐る。

(三十一年九月稿、十月公)

人は謂ふ國民の聲を聞けと。吾は則ち問ふ國民の聲何處に在るか。

學者の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ彼等の言は國民の關り知る所に非ず、

彼等の多くは國民の名を借して其一家の言を飾るもののみ。

詩人の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ彼等の歌は彼等の私情を聞かせらるのみ。

新聞紙の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ彼等の論は一黨一派の利害に立つ、

國民の幸福と風馬牛のみ。

政治家の聲は國民の聲なる乎。何ぞ然らむ彼等は國民の名によりて私己の權

勢を争ふのみ國民と何の關する所ぞ。

國民の最大多數は實に默然として聲なき也唯夫の伴々焉たるもの、是無聲の國

民を利として動もすれば口を是に耕る。

經世家たるものよ、沸々たる小泡沫の下に、千萬尋の深淵の杳然として聲なきものあるを知れ。

國民の名の濫用

國民の名の濫用せられたるや久い哉。民選議院の建白は國民の名によりて爲されたり、愛國公黨の組織も國民の名によりて爲されたり、自治制も、代議制も、民政主義の唱道さへも、何れか國民の名によりて爲されたるに非ざるべき。然れども直に國民の名によりて事を爲さむと欲する者は眞に國民の欲求を領會せざるべからず。眞に國民の欲求を領會せむと欲する者は先づ國民の性情を解釋せざるべからず。夫の漫然外邦文物の皮相を欽美して外より是を強ゆるもの焉、國民の聲ならむや。

遮莫無聲の國民は國家の柱なり、彼等は地の鹽なり。爲政家、經世家は百人千人の輩々たるもの、外に四千萬人の無聲の國民あるを忘るゝ勿れ。

田園將に蕪せむとす

坊間勝海舟翁に關する一佳話を傳ふ。曰く、某代議士一日海舟伯を訪うて揮毫を求む。伯直に筆を執り「田園將蕪」の四大字をナグリ附けて是に與ふと。吁、田園將に蕪せむとす何ぞ歸らざる。政治々々と騒ぎ廻る政治屋の國家に無用なるは、宗教々々と觸れ廻る宗教屋の社會に益なきに均し。良民として一人の責を負ふ能はざるもの安ぞ國家の大義を言ふの權利あらんや。(以上三十一年十二月)

西郷南洲の銅像

上野公園に立てられたる明治十年の叛臣西郷南洲の銅像方に其工を終り、覆面に撤下せられむとす。吾人一言の以て世に問ふべきあり。

昔者奈翁の戰に破れて聖ヘレナ島に流置せらるゝや、狂憤せる佛國人民は國運の否塞を以て奈翁の罪なりとし、到る處其肉を喰はむと欲しき。越て二十五年ブルボン王家其位に復し、ルイ・ヌーヴの治下に多年の平和を樂むに及び、健忘なる

佛人は再び奈翁の盛時を懷慕し初めぬ。是に於て、南溟の故墳は發掘せられ、其遺骸は盛大なる儀禮を以て巴里に改葬せられき。今や奈翁が佛國に與へたる耻辱は全く遺却せられ、唯是不世出の英雄の下に、是國が樂みたる槿花一朝の虛榮を愉悅せり。

我西郷南洲は猶ほ佛の奈翁の如き乎。維新中興に於ける南洲が偉勳は永く史上に傳ふべし、其人物亦一世に曠しきものありしならむ。而かも彼は其末路に於て國賊なり。其の事情の如何に拘らず、帝命に背き、國憲を紊り、叛逆の大罪を干犯したるは事實なり。大義名分に於て己に缺くる所あらば、區々たる私徳の如きは言ふに足らざる也。

然るに今や則ち如何の狀ぞ。彼れの大罪は何時しか忘れられ、傳へらるゝ者は其の奮勵のみ、其私徳のみ、日本の歴史に比倫なき一種の尊稱は、特に彼の名に冠せられ、人は大西郷、大南洲を以て彼を呼ぶに非ずや。彼の叛逆の爲に作されたる辯護は、普く國民の認むる所となり、彼の名によりて傳へられたる言行は、依信と歎美とを以て聞かれざる無し。足利尊氏、平清盛に於て、天人共に容るべからずと思惟

せられたる大罪は、彼にありては、偶々其末路を美はしくしたるのみ、是れ寧ろ怪しむべからざる乎。

今や彼を崇拜せる國民は、傳記墓誌を以て尙ほ足れりとせず、其叛逆によりて其大人物たるを證したるを以て足れりとせず、彼の銅像は更に帝京第一の大公園に建造せられ、二百萬の府民をして是叛逆的大人物の面貌を、形體の上に景仰せしめむとす。南洲死後二十年にして是事ある、何ぞ奈翁の遺骸十年にして巴里に改葬せらるゝと相似たるの甚しきや。

若し私己の情實によりて人の行爲を品せむ乎、天下又罪惡なるもの無からむ。唯公道の凜として動かすべからざる者あり、名分是によりて立ち、大義是によりて明なるを得。西郷南洲の私徳や吾人の欽せる所也、而かも彼を以て國民の崇拜に當り得る大人物となす、其の可なる所以を知らざる也、況や帝京第一の勝地に其の銅像を建築するをや。

(三十一年十月稿)

近時の銅像

偉人の像を建築するは、常に美術として市街裝飾の爲のみならず、其高風英姿を想望せしむる事によりて、國民の志氣を感發せしめむが爲なり。事に當るものは、其一面に於て、社會教育の着眼を缺くべからず。

更に想ふ、美術は國民氣風の反映なり、國民の氣風雄大なれば、其美術亦雄大に、國民の氣風卑屈なれば、其美術亦卑屈なり。夫の事に銅像建築に従ふ者は、即ち其事業が國民の氣風を體現して内外に表示する所以なるを忘るべからず。

近時銅像建築の事、頻に興る。就中著大なるもの三あり。宮城門前に建てらるべき楠正成の像、上野公園に建てられたる西郷南洲の像、及び筑前博多に立てらるべき日蓮の像、是れなり。

楠公は日本忠臣の龜鑑なり、是を宮城門前に建つるは甚だ體を得たりと謂ふべし。唯其製作模型の嘗て美術學校内にあるものを見るに、其大いさの大ならざるを恨とすべし。且其態度は、悍馬を制する馬術師に似て、毫も沈勇忠烈の威風を止めず。未だ美術上の大製作を以て容すべからざるに似たり。畢竟是れ美術家が其手工の末技を表はすに專にして、楠公の精神を發揮するの更に大技工なるを思

はざるの弊に坐す。

西郷南洲の銅像を上野公園に建つるの妥當ならざるは、已に述べたるが如し。假りに世人の言ふ如く、南洲を以て大忠臣、大義士、大人物とせむか、斯る不世出の大偉人の紀念像としては、其像の如何に矮小なるよ。九段坂上の大村益次郎の像は、其技術に於ては夙に世人の嗤笑する所なりと雖も、其大きさに於ては、慥に是南洲の像に三倍す。明治國民の理想的大人物を體現するものとしては何等の不倫ぞや。國は東洋第一等の日本に非ずや、土地は二百萬の人口を有する日本帝國の首府に非ずや、場所は大都會の第一等の公園に非ずや、而して建てられたる人物は日本歴史上に比類無き尊稱を有する所謂大西郷に非ずや、而して其大きさは宛然として、益石の庭園中の物也。天下何物の不倫か能く是の如くなるを得むや。

若し夫れ日蓮の像の建てらるべき地が池上に非ず、鎌倉に非ず、房州に非ず、身延山に非ずして、博多なりと云ふに至ては、其の不當なること言ふまでも無きなり。日蓮の安國論が元寇の豫言なりとは、歴史上に確證無き説なり。是の曖昧なる一事を附會して、其像を博多に建て、以て元寇紀念と稱するは、即ち當時日本の忠臣義

士別しては、伊勢の神靈を侮辱する者に非ずや。若し是歴史上の一大事實の爲に紀念像を造るの必要あらば、何ぞ北條時宗若しくは宗河野諸忠臣の像を以てせざる。日蓮宗の信者が一安國論によりて是神聖なる故趾を壟斷するは、我國民の默視すべからざる所也。(全集三卷五八五照)

(三十一年十月稿)

### 大人物の墓

邁莫墓標紀念牌の廣大なるによりて、大人物の記憶を永遠にせむとするは、人情の自然に出づる事なるか。觀じ來れば、扱ても痴けたる業ならずや。時は形ある總ての物の破壊者なればなり。

數年前英國議會は政府の提出に係るクロムエルの塑像建設案を否決せし事あり。當時詩人スキムポルンは憤慨の餘り、直に筆を呵して一篇の詩を作り、雜誌「十九世紀」に寄せたりき。其詩破題直にクロムエルの偉業を頌して曰く、  
吾等のクロムエル何ぞ金石を要せむや、  
大英國の進路を照らせる光明こそ彼の紀念碑なれ。

國民よ徒に其名と其像とによりて大人物を崇拜するを休めよ願くは其功業を復活し繼續し其生血を後昆に傳ふることによりて彼を讚美せよ然らば則ち彼の名は時と共に益其大いなるを加ふべし。祭祀金石は徒に彼を短命ならしむる所以のみ。

グラハム・ベル氏

グラハム・ベル氏や力めたりと謂つべし彼は其不幸なる同胞の教育の爲に自ら其のペター・ハフを犠牲とせり天下豈是より貴むべき獻身的事業あらむや。耻ぢよ名利の爲に慈善を飾るものよ。

(以上廿一年十一月)

逐客康有爲

回天の雄圖空しく沮落して四百餘州身を容るゝに處なく厓に隣邦に投じて天涯亡命の一羈客となる。康有爲の如きもの眞に憫むべきものあらすや。何事ぞ我邦人の偏に躁急短慮の一匹夫を以て彼を詬罵するもの多きや。

人と爲りは問はされ事の成敗は論せされ彼れの志氣事業は孰れか吾人の同感を起すに足るものならざるべき。彼は赤手を以て老大帝國の風氣を開發し空拳を揮て半歳の間に四百年來の弊竇を一新せむとしたるにあらずや。一國革命の先驅としては優に我小楠松蔭に當るに足る。若し夫れ時運未だ到らず千秋の事業忽然として九地の下に失落し身は逐客となりて域外に流離し顧みて故國の事に非なるを望む痛恨何ぞ堪ゆべけむや。吾人は實に彼の志を壯とし彼の情を憐む。

往日コンスト匈牙利の獨立戦争に敗れて米國に客たるや米人到る處に彼を歓迎し彼の爲に集めたる義金實に數萬に上りき。康今や身を我邦に托し萬一却て其冷遇詬罵を得ることあらば是れ國民の名譽にあらざる也。三十年前の日本は今の清國なり今日の日本は實に幾多の革命先驅者康の如きものに負ふ所あり何ぞ獨り隣邦革命の先驅者たる康有爲を容れざるの理あらむや。吾人は我邦人の窄量に恨無き能はず。

遮莫先輩斬られ同志殺され而して張本たる康獨り全きを得天命俄に知るべか

らざるものなり。康たるもの亦自愛すべきなり。

(廿一年十二月)

### 無趣味の社會

「吾れに樂むべき自然の美なからむには寧ろ海を踏みてトリトンの歌を聞かむ」と歎ちたるなにかしの詩人の今更に忍ばるゝかな。あはれ如何なれば世の様のかくは無趣味に成り果てにけむ。

今や凡ての美はしきものは世に貴き寶となりぬ。そは獨り罪惡を以て購ひ得べければなり。道德はこの趣味無き社會の障壁となりて凡ての美はしきものは其外に斥けられぬ。所謂義しきもの清きものは彼れと共に歩まず彼れと共に交らず彼れの孤影を躡ひて其手を握らむとするものは詐り也盗み也汚れ悔り禍也。

今や一切の趣味は世の義しき者の累ひとなりぬ。人は其嗜好をだに道德の規矩によりて律し去らむとす。假面は盛裝に缺くべからざる者となれり否不義の名を甘するに非ざれば彼れは其假面をだに脱ぎ難き也。

今や社會は一路となり人生は一面となりぬ。人は如何なる場合に於ても唯一

つの顔唯一つの聲を有せざるべからず否らざれば偽人として誣られむの憂あればなり。

今や世に大人あるのみ小兒あるのみされど人なき也。男子と女子とあるのみされど人無き也。紳士と平民と富者と貧者とあるのみされど人なるもの無き也。今や人々自ら其獨りを喜びぬ友は彼に於て要無きなり。彼は利害に非ざれば動かず世は是を直しと呼べり。彼は自らの幸福をだも他人の口より聞かずむば厭かざるなり。

斯くて趣味無き人は趣味無き家庭を作り趣味無き社會を造り趣味無き國家を造りこの大いなる人生をして徹上徹下趣味無きものとなし了せむとする也。

今や若き女と男とは白晝に物言ふことをだに許されざるなり。されど人は一枝の花にも尙ほ好惡の情あるに非ずや。

かの其情を抑へ其色を動かさざる人は大いなりとして尙ばる。されど性を矯むるものは均しく是れ偽りには非ざるが。あはれ離愁に泣かず公義に憤らず冷灰枯木の如きもの何が故に獨り大いなるか。



かの弊縵袍を着けたるもの何故に高くして、執袴袴を穿てるもの何故に卑しき乎。尙ふべきは唯その嗜好の高からむことには非ざる乎。

吾れ事を爲すに當りて、人は先づ其の利する所如何と問ふ。あゝ利する所乎、利する所乎、天下の事利を離れて爲すべからざる乎。いかなれば人は争はずして交はる能はざる乎、闘はずして生きる能はざる乎、抑々道義倫常以外に、人生の餘地を留めざる乎。

一面の人は唯一面の人を見る。劍を把て琴を弾き、三軍を慶して野花に泣く。彼れ其行に於て矛盾する所ある乎。

金錢は今の世に於て凡ての物の標準となれり。大臣も、牧師も、藝妓も、其報酬は金錢也。金錢は官吏を奴隸にし、貴族と富豪とを木偶にし、慧しきものを狼とし、愚なるものを驢馬となせり。快樂は金錢によりて計られ、名譽も、徳義も、金錢によりて賣買せられむとす。賭博は彼等が唯一の遊戯なり。

美術は宴樂のうつわとなれり。富豪の爲に白銀の像を造るものあれども、詩人の爲に一基の墓を修むるもの無し。人は祭りをだに營ますなりぬ。神は其費え

に報ひざればなり。

嗚呼トリトンの笛の音やみてより、既に三千年。この趣味無き社會を如何にせむや。あゝこの趣味無き社會を如何にせむや。 三十二年九月

### 無趣味の家庭

何故に今の世に料理屋待合、藝妓、遊女、「めかけ」の供給多きかを問はむものは、先づ何故に今の家庭が是の如きものを需要する人を出だし得るかを問はざるべからず。

現時日本の家庭は既に舊組織を失ひて、未だ新秩序を喚び來らず。感興無く、趣味無く、快樂なく、品位なく、名譽無し、蓋しあらゆる不徳の最も生まれ易き家庭なり。而して其最大缺點は昔時の制裁を失ひながら、尙ほ其形式主義を保てる事也。

今の中等以上のやゝ品位ありと稱せらるゝ家庭を見よ、多くは是れ最も陰鬱に、最も乾燥無味なる家庭に非ずや。屋外に妾を蓄へ、花牌を弄する主人の、其子弟に對するや、猶ほ儒學先生の、其門下に對するが如きなり。人は其家にありて、戯れ笑

ふことを容されず宛然として何れも堂上の君子也彼は其家門を出で初めて其衣を寛うするを得。實に「我家の窮屈に苦む」とは多くの人の歎聲なり。是に於て拘束無き社會の他面に趨りて其人性自然の要求を満さむとし知らず識らず罪惡の窟に入る。是れ勢也。

家庭は父母兄弟妻子の共に棲住する所なり。天下の親善なるもの父母兄弟妻子を措て何處にか求むべき。今の家庭を見ること羈舍の如し。其罪の存するところ言はずして明也。

今の世に於て社會風紀の壞亂を救はむと欲するのは先づ是の如き家庭をして感興あり趣味あり快樂あり品位あり名譽あるものと爲さるべからず。今の家庭や其のやゝ品位あるものは形式に偏して人性自然の發動を妨げ其のやゝ趣味あるものは放埒に失して道義の範を超ゆ共に不可なり。獨り怪む所謂社會改良論者の是を言ふもの少きや。料理屋待合寄席演劇の取締の如きは抑も未而已。

(三十一年九月)

### 砂漠の如し

近時本邦の家屋は益々劣等の趣味を現じ來れり。紳士の邸宅は待合の如し彼等には趣味なし唯贅澤あるのみ。品位は金銭の多寡に比例すとは彼等の主義なり。一切の裝飾衣服馬車皆是主義より打算し來る社會の沒趣なること恰も砂漠の如し。

(卅一年十二月)

### 西班牙の近時

凡そ民心の分離は國家の形勢が最も統一を須要とする際に起るを常とす吾人は西班牙の近狀を見て轉た感慨に堪えざるものあり。

今や西班牙は米西戰爭の屈辱を忍びて方に媾和條約を巴里に締結せり。其條文の末には「西班牙は暴力の壓制によりて之に調印す」との意味を附け加へたりと謂ふにあらずや。吾人は先に米國の宣戰に對する攝政皇后の羽檄を讀みていたく閩國敵愾の熱誠に同情を表せしが今又是憤激の痛語を見えます。西班牙人が臥薪嘗膽の覺悟の壯なるに感じぬ。潜に以爲らくフィリップ二世の古王國は是より漸く盛なるべしと。思ひきや息壤彼にあるに早くも分裂の聲を聞かむとは。

近着西字新聞の報ずる所を通觀すれば西班牙の各部が王國の統一より離れむとするの意向漸く明かになれるが如し。カスチルは王國の主部なるを以て合同を希望すること依然たり。南部諸州又其貧弱の故を以て多くは分離を好まずと雖も、王國中の工業地にして且つ最富裕なる北部諸州は、擧て自治を主張せり。カタロニア、ビスケー二州の如きは公言して曰く「吾等は全王國の養育者たり、南部諸州は只坐して其利を收むるのみ」と。カタロニアの商工業者の大團體は、既に是宣言に本きて分立請願書を攝政女王に呈出せり。其要求する所によれば、中央政府は戦争及び外交の外は一切州郡の經營を各部の自治に委ぬべく、かくて西班牙は亞米利加風の聯立州に分たるべしと謂ふにあり。農民は概して是提案に賛同の意を表せり、そは是改革によりて地租の輕減を見得べければなり。

讀者はかゝる西班牙の近狀を如何と見る。閩國一致の敵愾心と戰敗の屈辱とは昨日の事なるに、早くも内部の不平の爲めに國力の分裂を企つるものあるは、外國の事ながら如何に歎かほしき次第ならずや。加ふるに宰相サガスタの辭職と同時に王黨とカロス黨と、自由黨と社會黨とは各々鋒を削りて争ふべく、時に或は

軍隊の援助、もしくは外邦の干渉をさへ誘起することあるべしとは一般に期待せらるゝ所なりと云ふ。吁、西班牙人は果して國辱を知れる國民なるべき乎。

さはれ是の如きは五個の異人種と三種の異宗教とによりて結成せられたる國家にありて免れ難き勢なる乎。吾人は、願みて、我帝國の天祐に富めるを感謝せず、むばあらざるなり。

二分五厘の地租は三分三厘となりぬ、而かも農民は國家の爲に其負擔を辭せざるなり。是増租によりて最も大いなる打撃を受けたるは東北地方なり、而して軍備擴張の爲に最も多く其利を受くべきは關西地方なり。されど東北の農民は國民の爲に是不利なる經濟上の分擔を辭せざるなり。もし東北をして英國にあらしめば恐らくはアイルランドたらむか幾多のオコンネル、バチルは一地方の利害を代表して自治を唱へなむ。もし東北をして西班牙にあらしめば或はカタロニア、ビスケーたらむか、其農民は自治を求めて其地租の輕減を計らむ。されど我國民は一體たり、地方の利害に執着して國家の大計を顧みざるものにあらざるなり。是れ我邦人の西班牙などに同じからざる所以にして、又吾人が天祐のゆたかなる

を感謝する所なり。進莫我國は米西戦争以降の西班牙の近時を顧眄するを要す。

(廿二年一月)

### 勝海舟

勝海舟逝く、日本は愈人物に乏しき國となれり。

海舟をして板本鎌次郎の心を持せしめよ、日本は今日あるを保すべからず。薩長以下の諸藩人に乏しからざりしも、國家内外の大局に着眼して時勢の轉移を制せるもの、一海舟あるのみ。國民は深く彼れの功業を感銘せざるべからず。

願くは祭祀金石によりて空しく是偉人を嘆美するを已めよ。國民は彼の功業と人物とに鑑みて、其の偉大なる國家的精神を繼紹せよ。是の如くむば海舟死して猶ほ死せざる也。

(廿二年二月)

### 權利思想の發達と本邦の道德

吾人は先に權利思想の發達が從來の道德と衝突せむとするの兆候漸く表はれ

たるを一言せり、希くは讀者の輕々に是一言を看過する無からむことを。是れ實に本邦社會的道德の前途に横はれる一大問題なり。

曩日博士イェーリング氏將に維納大學を去らむとするに臨み、澳地利の將來に關して最も痛切なる忠告を與へたり。中に言へるあり、曰く「權利思想に乏しきは澳國人の一大弱點なり。彼等は動もすれば曰く、是れ一ベニーのみと。斯の如くして自己の權利を放棄し、自ら其胸襟の寛裕を誇るもの比々として是れ也。是の如き個人によりて結成せられたる澳地利國も其個人に等しく正當の權利を主張することを知らず。翻て是を英吉利人に見るに、彼等は自己の權利を主張するに於て正に澳地利人と反對なり。彼等は一ベニーの權利を損害せられざらむが爲に、時に一回の發車に後るゝを願みず。是の如き個人を國民とする英吉利の國家は亦常に自己の正當なる權利を維持するに於て一步も退讓することあらざる也。願くは一ベニーと謂ふなかれ、歐洲列強の競争場裏にありて、澳地利が年を追て退嬰に安せむとする間に、英吉利の國運の駸々乎として、進歩するは實に一ベニーの權利を主張すると否とにあり」と(イェーリング氏)。吾人はイェーリング氏の是言の中

(イェーリング氏)

(權利競争論)

吾人はイェーリング氏の是言の中

に深重なる意義あるを認む。  
 實に自己の權利を重せざるものは亦自己の義務をも重せざる也亦隨て他人の權利を損害することを憚らざる也。吾人は一ベニ一を權利思想の中より排斥するの道德には甚だ危険なる種子を包含せることを認む。而れども是の一ベニ一の權利思想を以て今の我邦に擬す可ならむ乎是れ問題也。

我邦從來の道德は情誼の上に立てり是れ疑もなく美なる道德なりし也。然れども世移り人渝り殊に十九世紀の世界交通の渦中に入りしよりこのかた情誼の制裁は以て社會の秩序を保つに足らず是に於てか法治主義の倫理漸く是に代り權利義務の語亦漸く行はる。社會は爲に疑もなく無趣味となれり。是ればた道德の變遷上已むを得ざる也。近時民法が本邦從來の習慣道德に背戾せりとの批難あるは畢竟權利思想と情誼的道德との衝突に外ならず而して是衝突が二者の完全なる調和を回復する迄に今後益々其激烈の度を加ふべきは今より期待し得らるべき事なりとす。

吾人は是の權利思想の發達を以て本邦文明の性質上萬已むを得ざる事なるを

認むと雖も而も自然の趨勢に一任して百弊の薰蒸を顧みざるの得策なるを認むる能はず。新民法の如きは儘に權利思想を必要以外に助長したるの詆を免れず。吾人は是を以て本邦道德との調和を破りたる一大失計たりと認むると同時に是間に處して過大の齟齬なからしむるの方法を講ずるは今日識者の責任に屬するを見る也。蓋し社會人文の狀態に比して權利思想のみ過度の發達をなす時は一國の倫理是が爲に壞れ輕薄殘忍靡然として風を成さむ。今や我邦にありては權利てふ觀念は未だ全く道德的意識の中に融合せられず隱然として相反目するの觀あり。即ち是れ社會が尙ほ權利思想の發達に適せざるの徴に非る乎。新民法が權利義務によりて父子の關係を規定する間に倫理教育は今に於ても尙ほ情誼的道德を原理となす。是問識者の一考を要するものあらざる乎。(三十二年二月)

### 剪裁の花

木は其實を以て知るを得べし。摸倣的文明の結果今果して如何。外皮を彩りて其味の熟したるを望む得べからざる也。夫の自然の發達に依ら

す、強めて外より附會するもの、往々是の如し。

議會は開けて幾年、而して民は其利を知らず。民法は布かれたり、而して民は其弊に堪えず。英國政府が三十年間の努力を以てして一倫敦の市制を改革する能はざる間に、日本は期年ならずして特別市制を廢止せり、而して市民の得る所何處にある。一方には準備なきストライキは到る處に失敗し、他方には自治の何物なるを知らざる民をして郡長公選を呼ばしむる政治家あり。社會問題を唱ふるものは、勞働の結果を思はずして、獨り賃銀時間を英米に倣はむとす。

國民よ、剪裁の花は香芬を放たず、安ぞ美果を結ばむや。

(三十二年七月)

### 新しき日本

明治の歴史は改革の歴史なり、所謂維新の王政復古は、其後に開かるべき更に深大なる改革の齎場を預告せる一序幕に過ぎざりき。而して是の深大なる改革の齎場は、爾來三十有二年の今の日に於て方に其最高點に到達し、更に再び向上の一、路に新局面を開發するの機運に向へるを見る。吾人を以て見れば、最も適當なる

意味に於ての『新しき日本』の歴史は、是より當に其本章に入るべき也。

所謂新らしき日本とは何ぞ。是を内にしては、序幕の大立物たりし元老の漸く凋落し去らむとする日本也。政治界に、法律界に、文藝、宗教、其他もろくの方面に於て、新日本の新空氣中に生育せる新人物の漸く其霸權を握らむとする日本也。新民法の家族制度を掃蕩せむとする日本也。權利てふ思想が舊來の情誼的、道德に代らむとする日本也。勞働社會に職工組合の起らむとする日本也。基督教と神道、佛教と共に行政區域内に入らんとするの日本也。是を外にしては、西、比、利、亞、鐵道の全通と、ニカラガ運河の開鑿とに自國の利益を認めむとする日本也。極東問題を解釋せむが爲めに、四國同盟に入らむことを望む日本也。國家の利益の爲めには、北米合衆國が爲せる非律賓群島の非道なる略奪をも是認せむとする日本也。是の如きを『新しき日本』と謂ふ。

見よ、如今人物更迭の潮流如何に激しきかを。伊藤、大隈、山縣、井上、板垣の諸元老が久しく政界に把持せりし勢力は、今や漸く星、伊東、尾崎、大石等の後進に轉移しつゝあるに非ずや。勝安房氏は曠世の奇才を齎らして遠逝せり。中村芝翫氏は舊

歌舞伎俳優の最後の代表者として劇界の革新を預告すべく逝きぬ。小中村川田島田栗田諸老博士の凋落は和漢學の革新を警告するものに非ずして何ぞ。人の代るは即ち世の變る也。是の如くにして新日本の來るは時の轉移に伴へる必然の結果たる也。

最も注意すべきは道徳思想の動搖なり。新民法は既に布かれて、人權上の觀念全く昔日と其觀を異にせむとす。財産相續結婚等に就て新民法の規定する所は、從來の家族制度と柄鑿相容れざるなり。父子夫婦の情誼は是より永く權利義務の思想によりて維持せられむとする也。權利の思想とは即ち一厘錢の權利を主張するを以て、士君子の正當なる行爲とする思想也。惻隱慈悲の感情をも權利の二字に據りて肯否せむとする思想也。法治主義の社會一日も是思想無かるべからずと雖も、而かて教育勅語によりて謨示せられたる情誼的道德の精神を奈何すべき。是れ豈教育家の前途に横はれる一大問題に非ずや。

殊に新條約の實施、肩睫の間に逼れる今日に於て、懸念すべきは宗教と國家との關係問題なり。憲法第二十八條は國安を妨害せざる限りに於て信教の自由を擔

保せり、然れども是れ形式的の保證のみ、若し其實質に入りて國家が公認すべき宗教の性質如何を究盡せば、僅に一問題を醸すべし。換言すれば基督教公認の可否は事實に於て宗教界の一問題たるべき也。而して是問題は、直に教育と宗教との關係問題に波及す。今茲に「我校は基督教主義を以て倫理の標準となす」と標榜し來て其認可を要求するものあらば如何問題は決してそが見ゆる如く簡單に非ざる也。事に與るものは當局の有司なるべし、而して是れ事實に於て國民の審判を待つもの也。

是の如きは内國の私事のみ。將來に於て二十世紀史の中心となるべき極東問題の要衝に當るべき者は即ち是の「新しき日本」なることを忘るべからず。極東問題は表面上支那の分割、若しくは其維持の問題なり、然れども其根柢に横はれる最大動機が人種競争に存せることは歴史に通ずるも、認めざらむと欲するも能はざる所也。人種の競争とは、即ちアリアン人と非アリアン人の争也、白人種と黃人種、歐羅巴人と亞細亞人、基督教國と非基督教國との争也。歐洲諸國が今日支那に加へつゝある所のものや、がては明日吾人に加ふべき所のものたる也。

敢て杞憂と謂ふ勿れ吾人は我國民に向て吳々も警告せむと欲するは是極東問題の解釋は新日本國民の最大危機なること是れ也。見よ文明東漸の歴史は即ち西力東漸の歴史也。匈牙利折け、土耳其起たず、印度亡び、埃及仆れ、緬甸、安南、皆併せられ、白人種の勢力今や十九世紀の末葉に到り、澎湃として極東の海涯に寄せ来る。是れ一千年來避くべからざる歴史上の運命也。今後の日本海は此兩人種最後の格闘を目撃するの日あるべし。吾人は人種競争の歴史によりて敢て是事を預言して憚らざる也。所謂四國同盟の如きは一時の幻影ならむのみ。

嗚呼新しき日本は内外實に是の如き形勢の下に立ちつゝある也。敢て請ひ問はむ。是の新しき日本の支柱たるべき新らしき國民は如何の抱負如何の覺悟を以て是國家を行らむとするぞ。新らしき日本は老衰の元老に訣別すべき也。依頼すべきものは唯是新日本の新教育に人となれる新人物のみ。敢て再び請ひ問はむ。卿等の覺悟卿等の抱負如何。吾人は特に是一言を以て吾全國の中學生諸子に警告する者也。

三十二年三月

### 無定見の國民

凡そ人の人たる所以は何處に存すべきか、こは觀方によりて様々に言はるべけれど、道德上より看れば人格の單一ならんは人の人たるに於て缺くべからざる條件なるべし。人格とは何ぞと謂ふに、平易に言へば『我』なり、即ち人の感情思想及び行爲を統一する主體なり。是『我』てふものにして單一ならざらむか、よし人の形體を具へ人の言語を使ひたりとて如何でか人と謂ふことを得べき。例へば『昨日の我は今日の我に非ざれば昨日約束せしことは今日履行するの義務無し』と言ふものあらば如何。是れ即ち人の人たる主性を失へるものにして道德上には既に人たるの面目を缺けるものなり。苟も一個の人として世に立たむには、自己の人格即『我』は始終渝らず、飽くまで其統一を保たざるべからず。所謂定見あり、節操ある人は、即ち最も善く自己の人格を保持したる人なり。所謂無定見、無節操、言に虚偽あり、行に矛盾ある人は、即ち人格の統一全からざる人なり。

こは個人に就いて謂へるなり、されど一の國民を個人に比し、其歴史を個人の生



命に較べ見よ。凡て品位あり名譽ある國民には其人格の統一あること猶ほ個人の場合に於けると異ならざるを見るならむ。若し一の國民にして其思想に貫徹せる根柢なく、其行爲に一致せる節操なく、單に時々氣まぐれ、氣運又は流行に驅られて活動したらむには、是れ即ち無定見の國民なり、無節操の國民なり。其の擯斥すべきこと猶ほ無定見無節操の個人の卑むべきが如けむ。若し百代の後、炯眼なる歴史家ありて各國民の國民的活動を批判して其功過を辯ずるの時あらば、斯かる無定見の國民は實に救ふべからざるの汚名を殘すべし。

然るに無定見なる個人は人皆是を賤むと雖ども、無定見なる國民に到ては是を言ふもの尠し、是れ甚だ怪むべき次第なり。吾れ人は個人として存在すると同時に國民として生活す。然らば則ち吾人が各自の精力を瀝して協力經緯する所の國民的生活も亦品位あり、名譽ある歴史を有せむことを希はざるべからず。何となれば國民各個の品位名譽と國民全體の品位名譽とは兩々相離るべからざるものなればなり。

今無定見なる國民の一例として佛蘭西に就いて一見すべし。吾人は佛蘭西國

民を以て無定見なりとす。それを如何とならば、是國民の思想には定見なく、行爲には矛盾多きこと、さながら人格の統一無き個人の如きを見ればなり。茲に哲學思想を言はんはやゝ不適當ながら、佛蘭西思想の一致なく貫通なく、紛亂統一を缺けるは歐羅巴の何れの邦の哲學歴史にも其比を見ざる所なり。例せば十六世紀にはモンテス、シャロン等の懷疑說盛に行はれしかと思へば、十八世紀の初めにはコンヂヤック、ボンチー、ヘルエチウス等の極端なる經驗論あり。一方にデドロ、ラメトリの唯物論モンテスキュー、ルソーの自然主義あるかと思へば、他方にはテガルト、マルブランシ等の荒唐なる形而上學あり。コムトの經驗哲學是後に興りて盛に行はるゝかと思へば、又更にギクトル、クザンの折衷主義あり。紛々として其の歸向を知るに由なし。一個人の説としては見るべきものはあるべけれども、佛蘭西國民の思想としては前後條理を缺き首尾一貫せず、所詮は無定見の証を免れざるべし。然れば思想界の國民として見れば、佛蘭西國民は最も浮薄にして信用し難き國民なりと謂はざるべからず。

以上は思想上より言へり。又政治上より佛蘭西人の行動を見れば、其の無定見

無節操なる國民なること尙一層明なるべし。遠きは暫く措きつ、十八世紀の末葉に當りルイ王朝に大反抗を試みたる結果、かの有名なる佛蘭西大革命となり、自由平等の大主義を發表して天下の耳目を聳動せり。然るに是革命の大事業未だ全く終らざるに早くも奈破翁帝を奉戴し、其自由政權を唱へたる口を以て皇帝萬歳を歌ひつゝ、甘じて是の大野心家の願使する所となれり。然るに奈破翁一敗してエルバ島に流さるゝや、全國民は忽ち帝に反對して呼ぶに國賊を以てせり、されば帝は間道より僅に配所に赴くを得たりし程なりと謂ふ。然るに風雨一夜エルバ島を脱して本國に歸るや、先に國賊呼はりをせし國民は又もや帝を奉戴して其舊位に就かしめ、再び喜んで馬前に忠義を盡さむと誓へり。奈翁フートルローの戦に敗れて遠洋の孤島に竄せらるゝや、國民は其帝王の末路を悲まず、却て危害を加へむと欲するもの所在道に充てり。かくて國民は大革命によりて顛覆したる謂は、不俱戴天の仇なるルイ王朝を回復せしが、間もなく再び之を覆してルイナポレオンを大統領とし、ルイナポレオンの既に人心を收攬するや、其不法至極なるクーデターを是認して皇帝の位を僭するをさへ許せり。普佛戦争に敗れてナポレ

オン三世城下の誓を爲すに到り、佛蘭西國民は又も大革命の遺業を繼ぎて民政共和團體を建立せり。是の如く僅々一百年の間に其國體政體の變更すること一再にして止らず。其の事業に一定の精神なく節操なきは最も明白なる事實なりとす。斯く節操なき主義なき歴史を有するは實に佛蘭西國民の大恥辱と謂はざるべからず。

讀者よ、予を以て徒らに外國の事を談ずるものと爲す勿れ。斯かる實例は我國民に對ひて大なる教訓を與ふることを注意すべきなり。開國以來我邦には國民的精神の儼然たるあり、一切内外の事物は是國民的精神の中に同化せられ、茲に二千五百有餘年の最も定見あり節操ある歴史を作りしなり。我國民の生活は是點に於ては實に品位あり名譽ありと謂ふべし。然るに近時外邦文物の輸入と同時に是國民的精神を忘却し、徒に摸倣崇拜を事とするものあり。是れ取りも直さず二千五百年來の定見あり節操ありし國民をして、無定見無節操に陥らしめむとする者なり。されば苟も國民全體の名譽品位を重する者は奮て是に反對すべきなり。但し猥りに自ら尊び、外邦の文物とあれば是非善惡の差別なく排除するが如

### 佛蘭西共和國の近世史

き偏見は言ふまでもなく大に警戒せむことを要す。

三十一年一月

佛蘭西共和國の大統領フリスフォール氏、去月十六日俄然として卒去せりとのロイテル電報は、疑もなく天下の人をして佛蘭西國の過去及將來に就て幾多の感慨を起さしめしならむ。然れどもフール氏の死は平和の死也、些の政治上の意義ありしに非ず。是幾多の感慨は果して何に因りて起りたる乎。是を語るものは即ち佛國の歴史也。

天下邦國多しと雖も、其國體及び政體の上に急激の變化を経由せるの甚しき佛蘭西の如きはあらざる也。誠に千七百八十九年以降の歴史を緬想せよ、大革命は新大陸獨立の餘韻を傳へてルイ十六世を斷頭臺に上したり。而して平等、自由、同胞を唱へたる革命的國民は却て奈破翁帝てふ一大壓制の主君を歓迎せり。幾百萬の國民は劍戟を取て帝の馬前に盡瘁せること、シザル治下の羅馬人よりも忠實なりき。然るに華德堡の一戦に敗れて太平洋心の流人となるや、昨日迄皇帝萬歲

を唱へたる國民は、舉て佛蘭西國民の大深仇として帝を罵れり。維納會議によりてブルボン王家の回復を見るや、國民はルイ十四世の盛時を夢み、嘗て其頸血を見て甘心せる虐王の子孫に喜び事へたり。然れども小心なるルイフィリップ王は未だ國民の虛榮心を満たす能はざるに及びて、輕躁なる國民は又更に是を廢黜し、ラマルチン氏の下に共和政府を再興せり。然れども奈破翁帝の治下に味ひたる幻影の如き國民的榮譽は、佛國民の永く忘るゝ能はざる所なり。是を以て先に大逆賊と罵りたる唇を翻へして、盛に大戦勝帝の遺業を讃頌し、聖ヘレナ島の墳墓を發掘し、鹵簿の盛大を盡して、其遺骨を巴里に迎へたり。

巧黠なる小奈破翁の時機を伺ひて民心を收攬し、一夜クデターを行て共和政府を蹂躪するや、健忘なる國民は舉て是に謳歌せり。小奈破翁普魯西に敗るゝや、多情なる佛人は恬然として再び共和政を組織せり。今回卒去せる大統領フール氏は實に是共和政府の系統を受けたる者也。僅々一百年の間に如上の激變に遭遇せる佛蘭西國民の性格が國民として如何に輕躁に如何に浮薄に如何に無定見に如何に無節操なるかは、殆ど吾人の想像し能はざる所也。

試に其年數を案するに、一千七百八十九年に人民議會を創立してブルボン王家を倒してより、大奈破翁の專制政府を歓迎したるまで其間十六年。爾來華德堡の戰爭を経てブルボン王家の復位を迎へたるまで、大奈破翁に謳歌せること凡そ十二年。ブルボン王家再び、仆れ、小奈破翁の下に第二の帝國を建造したるは一千八百五十一年、即ち其間三十七年。而して一千八百七十年の普佛戰爭によりて更に今日の共和政府を組織するまで前後二十一年。爾來二十九年の間、何等の國體の變更なく、今日に到れり。然れども國家の事も、リズムを以て進行せば、佛蘭西國民の革命的惰性は方に、一國家的激變を濫醜するの時期に接近せりと謂ふべし。去年有名なるドレフイー事件の如きは、共和黨と帝政黨との軋轢の外面に現はれたるものに外ならず。軍人は一般に帝政黨に同情を有し、兩者の反抗近時に到りて益々其激烈を加ふる者の如し。是時に當りて俄然として大統領卒去の報に接す。誰か前大統領カルノー氏の横死と最近百年間に於る佛國の歴史とに聯想して、一種の感慨に打たれざらむや。嗚呼禍なる哉佛蘭西國や、國家の事茲に至らば皮相の文物又何かあらむ。吾人は十九世紀の文明を標示する世界博覽會に於る同國

民が政治的出品の餘に非文明的ならむ事を恐る。フール氏の平和の死や、吾人の切に喜ぶ所也。

(三十二年三月)

規律無き國民

若し將來に於て新文明に調攝すべき新しき社會的道德を要すとせば、規律は必ず其一なるべし。從來の日本人は餘りに無規律なるに過ぐ。商賈は約束を重せず。會合の時間には懸直あり。吾人は郵便切手を規定の場所に貼付せざる一事を以て其家風の紊亂を卜するの社會ならしめむことを希ふ。是場合に於て規律は信用也。

單に外形のみと謂ふ勿れ。規律は大なる道德の標號なり、即ち是れ私を以て公に殉するなり、少を以て多に攝する也。社會の秩序の中に自己の幸福を認めむとする他愛的精神の發表也。是を以て紀律ある社會に訓練せられたる人民は、平和を好む民也、事に好では最も勇氣ある軍隊也。